現代裁縫教科書

41278
教科書文庫
4
920
52-1929
20000
89562

教科書文庫
4
920
52-1929
2000089562

濟定檢省部文
用科縫裁校學女等高・校學範師　日八月二年四和昭

代現
書科教縫裁
〔三卷〕

広島大学
教
89562
図書

師講校學門專子女京東
著鶴千村吉

広島大学図書
2000089562

△▼△　東京開成館藏版　△▼△

教育学科
資料室
46
930
BB4

改版につきて

大正十四年本書初版を發行するや、異常の好評を博して全國多數の學校に採用せられ、爾後年を逐うて益採用學校數の激增したるは、著者の最も光榮とする所にして、茲に深く感謝の意を表す。著者は衣服調製の改善に思を凝らし、常にその研究を怠らず。今や著者の研究と實際教授者諸氏の懇篤なる忠言とによりて本書の改修を了へ、本版を公にするを得たるは著者の欣幸に堪へざる所なり。

左に改修の要項を擧ぐ。

一、各卷とも教材を精選し、說明の繁簡を統一し、一層教授に適切ならしめたること。

二、新に實物を調製し、これを寫眞版として挿入し、その他の挿圖をも增加し、學習上興味に富ましめたること。

緒　言

本書は現行教授要目に準據し、高等女學校・實科高等女學校・女子師範學校、及び同一程度の諸學校用裁縫教科書として編纂したるものなれども、今やメートル法の實施期に際し、裁縫教授上に一層の進展を試みんとして、敢て衣服調製上の新傾向を加味する等、種々なる點に意を用ひたり。その大要を摘記すれば左の如し

一、教材は、基本・應用・自作の三段に分ち、基本材料は主に高等女學校に、基本材料及び應用材料は女子師範學校・實科高等女學校等に課し、自作材料は生徒の獨習竝に補充用に充てたり。

一、全卷を通じ、全く鯨尺を廢してメートル尺を用ひ、兩者を對照して示さゞるは、學習者をして速にメートル法の使用に習熟せしめんためなり。

一、從來慣用の寸法をメートル法に換算するに當り、零細なる端數は、仕立て上りに關係なき限り適宜に取捨して、記憶と練習とに便ならしめたり。

一、技術の方法は、著者の多年に亘る經驗と研究とを經とし、之に加ふるに、各專門家の熱心懇切なる援助によりて、諸流大家の苦心に成れる妙案を緯とし得たれば、普遍的のものと信ず。

一、挿畫の選擇には特に多大の苦心と勞力とを拂ひたり。卽ち、實物を製作して寫眞版とし、然らざるものは、製作せる實物を寫生揮毫せしめ、從來に無き特殊の挿畫を多く加へて、學習者の興味を

三、第四卷第十九篇は全く稿を改め、服形の變化繁き子供洋服の調製を理解し易く且つ應用を自在ならしめんがために、各種服形の基本たるべきものを精選して說明したること。

著者はこの改修が裁縫教授上に於ける現時の要求に最もよく適應することを信ず。されど之を以て滿足せず、今後も絕えずこれが研究を重ね、その必要ある毎に更に改修を加へて、常に斯界の羅針盤たらんことを期す。大方の實際教授者諸氏幸に示教を吝しまるゝなくんば幸甚なり。

昭和二年十二月

著者しるす

喚起し、知らず〳〵裁縫教授の效果を擧ぐるに便ならしめたり。

一、本書は、各學年に一冊を終へしめんため、全卷を分ちて四卷とせり。但し、第四卷には子供洋服を加へたれば、高等女學校第五學年にも適用し得べし。各卷の紙數稍や多きに過ぐる觀あるも、挿畫を豐富にし、且つ應用材料を多くしたるためなれば、却つてその實益大なるべし。

一、衣服調製につきては、時運の進歩に伴ふ改善事項に留意せり。農商務省主催廣幅展覽會出品の裁方圖を挿入して、廣幅の小幅に比して有利なることを示したるが如き、その一例なり。

一、本書は、教授上の便宜を計り、自在の運用をなし得るやう編纂したれば、希くは、學習者の程度・鄉土的情勢・時間の多少等によりて適宜に取捨し、或は敷衍省略して、充分に裁縫教授の目的を達せられんことを。

一、要するに、著者は、本書に於て、ます〳〵衣服調製上に於ける知識の向上を圖り、不測の間に趣味と實益について、良結果を收めんことを期せり。さればます〳〵本書に改良を加へ、完璧たらしむべく努力を拂はんとす。幸に、師友の指摘高批を得ば、細大を論ぜず他日必ず改補を期すべし。

一、本書の編纂に當りて、實際教授者より有益なる助言を賜はり、また知友の熱心なる補助を得て、裨益したるところ頗る多し。茲に謹みて感謝の意を表す。

大正十四年一月

著者しるす

卷三目次

第十一篇　基本材料

〔一—四四〕

第一章　本裁羽織……一

一　本裁女綿入羽織……一

一地質　二普通仕立て上げ寸法

三裁ち方・積り方　四標附け方

五要所の練習　六縫ひ方

二　本裁男袷羽織……三〇

一地質　二普通仕立て上げ寸法

三裁ち方・積り方　四標附け方

五要所の練習　六縫ひ方

第十二篇　應用材料　〔四五—七八〕

第一章　本裁男綿入羽織……四五
一裁ち方・積り方　二標附け方
三縫ひ方

第二章　本裁女袷羽織……四七
一縫ひ方

第三章　中裁・小裁綿入羽織……四九
一　四つ身綿入羽織……五〇
一地質　二普通仕立て上げ寸法
三裁ち方・積り方　四標附け方・縫ひ方
二　三つ身綿入羽織……五六

一地質　二普通仕立て上げ寸法
三裁ち方・積り方
三　一つ身袷綿入羽織……六一
一普通仕立て上げ寸法　二裁ち方・積り方
三標附け方　四縫ひ方
附　各種羽織普通仕立て上げ寸法表

第四章　本裁・中裁・小裁各種羽織の裁ち方……七〇

第十三篇　絹布・毛織の仕立方　〔七七—一〇四〕

第一章　絹布・毛織單衣……七七
一絹布單衣の縫ひ方要所説明
二毛織單衣の縫ひ方要所説明

第二章　絹布・毛織の繕ひ方……八三

一接ぎ方　二繼ぎ方
第三章　本裁被布……八六
一　本裁女綿入被布……八六
一普通仕立て上げ寸法　二裁ち方・積り方
三標附け方　四要所の練習
五縫ひ方
附　各種被布の寸法及び割り出し方
第十四篇　應用材料　〔一〇五―一四八〕
第一章　中裁被布……一〇五
一　四つ身被布……一〇五
一普通仕立て上げ寸法　二裁ち方・積り方
三標附け方　四縫ひ方

第二章　小裁被布……一一
一　三つ身被布及び一つ身袴被布……一三
一普通仕立て上げ寸法　二裁ち方・積り方
三標附け方・縫ひ方
第三章　中幅・大幅物各種被布裁ち方・積り方……一六
第四章　本裁單合羽……二一
一種類・地質及び各部の名稱
二普通仕立て上げ寸法　三裁ち方・積り方
四標附け方　五縫ひ方
第五章　本裁單コート……一三八
一裁ち方・積り方　二標附け方
三要所の練習　四縫ひ方
第十五篇　ミシン裁縫　〔一四九―一九二〕

第一章　概説……一四九
一ミシンの種類　二ミシン使用法
三縫ひ方

第二章　ズボン下及びシャツ……一五七
一　本裁ズボン下……一五七
一各部の名稱及び仕立て上り圖　二種類及び地質　三各部寸法の取り方
四普通裁ち切り寸法　五裁ち方・積り方
六縫ひ方(ミシン縫)
二　中裁・小裁ズボン下……一六五
一普通裁ち切り寸法　二裁ち方
三縫ひ方
附　ズボン下普通裁ち切り寸法表

三　本裁シャツ……一六九
一各部の名稱及び仕立て上り圖　二種類及び地質　三各部寸法取り方
四普通裁ち切り寸法　五裁ち方・縫ひ方
六各部分の裁ち方　七縫ひ方
四　中裁及び小裁シャツ……一八一
一中裁普通裁ち切り寸法　二裁ち方・積り方
三小裁普通裁ち切り寸法　四裁ち方・積り方
五中裁・小裁シャツ縫ひ方
附　シャツ普通裁ち切り寸法表

第三章　各種シャツ・ズボン下の裁ち方……一八八

附錄　應用材料　〔一—二〇〕

第一章　涎掛（ミシン使用）……一
一裁ち方　二縫ひ方
三各種飾縫の圖
第二章　小兒前掛（エプロン）……四
一五・六歳用劒形前掛　二二・三歳用前掛
三四・五歳用前掛　四六・七歳用前掛
五五・六歳用前掛　六三・四歳用小兒前掛
第三章　割烹前掛……一五
一割烹前掛その一　二割烹前掛その二

目次終

現代裁縫教科書　卷三

第十一篇　基本材料

第一章　本裁羽織

羽織は、長着の上に着する短衣にして、寒暖を調節するに頗る便なり。長着と同じく、單・袷・綿入に仕立て、これに本裁・中裁・小裁等の別あり。訪問その他の外出に際して、整容のために用ひらる。また男子の紋付羽織・袴は、一般に和裝時の禮服となれり。

(1) 表地

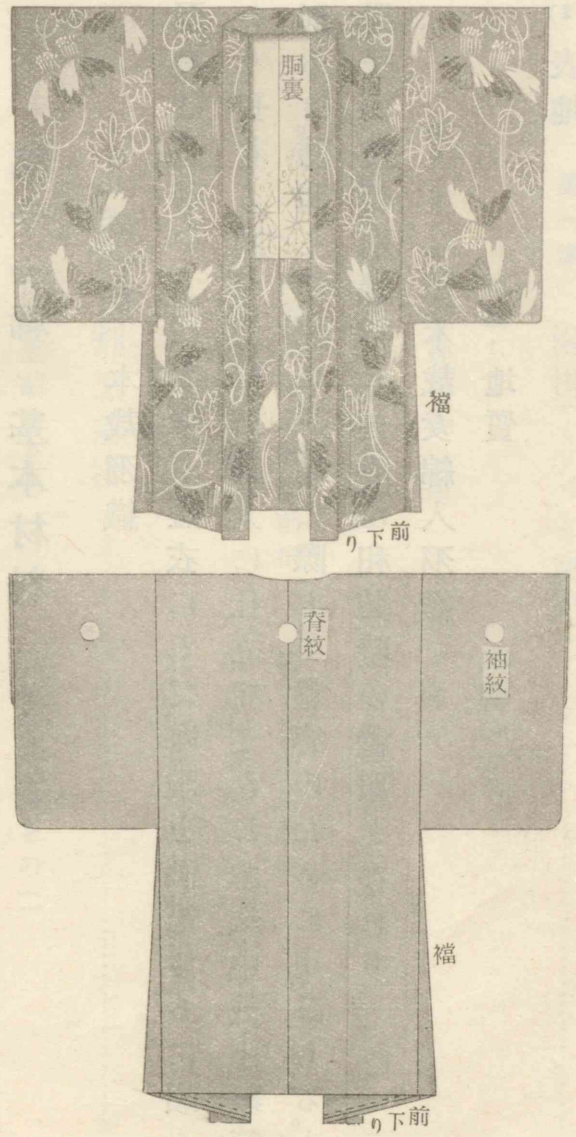
一　本裁女綿入羽織

一　地質

木綿　モスリン　紬　銘仙　斜子　綾織　縮緬　錦紗……等

(2) 裏地

木綿更紗　新モスリン　平絹　羽二重　甲斐絹　八つ橋



羽織各部の名稱
(上) 女物前　(下) 男物後

綸子　繻珍……等

二　普通仕立上げ寸法

袖丈	長着に同じ 六〇糎	袖口	長着に同じ 二三糎	袖附	長着より・五内外多く 二四—二五・五糎		
袖幅	長着より・五廣く 三三	身丈	九五—一〇〇	身八つ口	一〇		
前下り	三—四	衿肩明	長着より・五内外多く 九・二—九・五	後幅	長着に同じ 二八・五		
肩幅	二九・五	前幅	いつぱい 一七	紐附下り	肩より 三〇—三四		
襠幅	下 六・五 上 一・五	衿幅	六・五	裄	長着に同じ 六二・五		
繰越	八—二						

注意　(い) 袖丈は、地質によりて長着より増減す。身丈は、通例長着着丈の約四分の三に四糎を加へたるもの。(または十分の八内外)

(ろ) 寸法は、長着の寸法に準じ各人の體格に應じ、またその時代の風俗に從ひて適宜に定むべし。

三　裁ち方・積り方

羽織の布數

羽織は、袖・身頃・衿・襠・袖口布・紐附の六部より成る。

(1) 表

袖。　二枚(左右)
身頃。　二枚(左右)
衿。　一枚
襠。　二枚(左右)
袖口。　二枚(左右)
紐附。　二枚(左右)

(2) 裏

衿・綿入には、更に袖裏・胴裏・襠裏を要す。

一表用布。　並幅長さ十一米の布にて、本裁女羽織の裁ち方・積り方。(前後の差三十糎)

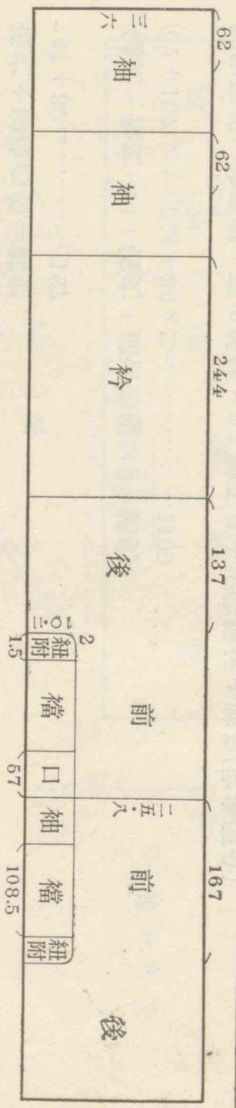
羽織の布數

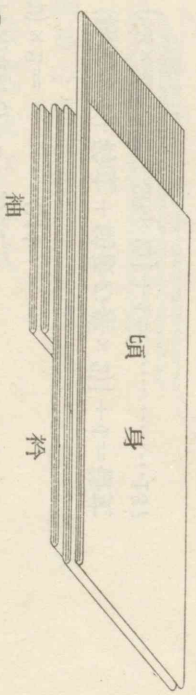
(改現裁卷三、四十五)挿圖 1

【問】羽織に前後の差をつけて裁つは何故か。またその差は何糎位を適當とすべきか。

裁ち切り寸法

袖丈	六二糎 上り袖丈 六〇	衿丈	二四四糎
前丈	一六七 前後の差 三	肩明	内廻し 一〇・二 二
繰越	一	紐附(乳)	幅 一・五
		後丈	一三七糎 上り身丈 一〇〇
		袖口	五七





注意 (い)前後の差は、二十糎以上四十糎を普通とす。

(ろ)前丈の折返しは多くとも紐附の上に出でざるを可とす。

積り方公式及び算式

(身丈(上り)＋衿附縫代)×2＝衿丈
(100＋22)×2＝……244

{總丈－(袖丈×4＋衿丈＋前後の差×2)}÷4＝後丈
{1100－(62×4＋244＋30×2)}÷4＝……137

後丈＋前後の差＝前丈
137＋30＝……167

(袖丈＋後丈)×4＋衿丈＋前後の差×2＝總丈
(62＋137)×4＋244＋30×2＝……1100

衿附縫代＝衿肩明(上り)＋肩の繰越×2＋前下り＋衿先縫代＋弛み(片身頃分)
22＝9＋1×2＋4＋6＋1

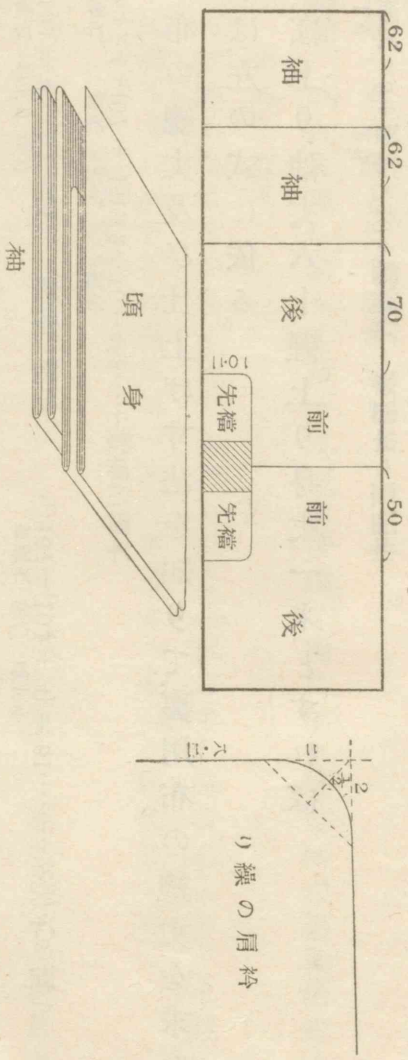
注意 (ち)衿丈の積り方は、仕立て上り身丈に、衿附縫代、即ち衿先の縫代その他を二十二糎として加へ、これを二倍せり。
(ろ)衿附縫代は二十二糎乃至三十四糎までとす。
(は)衿先縫代は五糎乃至十糎位を適當とす。

二、裏用布。

裏用布は總丈四米八十八糎以上を要す。

裁ち切り寸法(表に準ず)

袖丈	六二糎	後丈	七〇糎	前丈	五〇糎



注意 胴裏の前裁落しは、表用布と同時に裁つ。

積り方公式及び算式

袖丈×4＋(後丈＋前丈)×2＝總丈
62×4＋(70＋50)×2＝……488

以上を詳解すれば、次の如し。

袖丈 $62 \times 4 = 248$……袖總丈

身丈 $102 - \overset{返り}{35} = 67$……胴裏の後丈

身丈 $102 + \overset{前下り}{4} - \overset{返り}{61} = 45$……胴裏の前丈

袖丈 $62 \times 4 + (\overset{後丈}{67} + \overset{前丈}{45}) \times 2 + \overset{縫代}{16} = 488$……裏地の總丈

表後丈 $137 - (\overset{上り身丈}{100} + \overset{繰越+背縫代}{2}) = 35$……表後丈の返り

表前丈 $167 - (\overset{身丈}{102} + \overset{前下り}{4}) = 61$……表前丈の返り

表用布の總丈及び仕上げ寸法を知りて、裏用布の總丈を求むるときは、左の式に依る。

例へば上り袖丈六十糎上り身丈一米とすれば

$\overset{上り}{袖丈} \times 8 + \overset{上り}{身丈} \times 10 + 總縫代 - 表用布 = 裏用布$

$60 \times 8 + 100 \times 10 + 108 - 1100 = 488$

總縫代

袖下縫代　二糎の八倍……十六糎

胴接代　二糎の八倍……十六糎

【問】總縫代の積り方を述べよ。

前下り縫代　四糎の四倍……十六糎(或は五糎の四倍)

三つ衿縫代　一糎の八倍……八糎

繰越　一糎の八倍……八糎

衿附縫代　二十二糎の二倍…四十四糎

合計一米八糎として計算せり。

注意　(い)右計算に依りて袖下と胴裏接代二糎は最少限なれば胴裏總丈は五米内外を要す。

(ろ)經濟上なほ後胴接に於て七糎乃至十二糎以上を縫ひ込みおくを可とす。

(は)積り方に於ける總縫代は一米八糎以上一米二十糎内外とす。

應用問題

(一)並幅長さ十米六十糎の布にて女綿入羽織を裁つに、袖丈六十一糎・衿丈二米三十四糎とせば、前後の身丈何程なるか。但し、前後の差を二十七糎とす。

(二)同上仕立て上げ身丈を九十五糎として裏地用布の總丈を計算し、且つ表裏の裁ち方圖を示せ。

(三)袖丈六十四糎・後丈一米三十六糎半・前丈一米六十三糎・衿丈二米四十糎の寸

法にて女綿入羽織を裁たば、裏用布何程を要するか。(上り寸法普通)

四　標附け方

(一)　順序

㊀ 袖　㊁ 胴接　㊂ 後身頃　㊃ 前身頃　㊄ 襠　㊅ 衿

(二)　附け方

袖。 本裁女綿入に同じ。

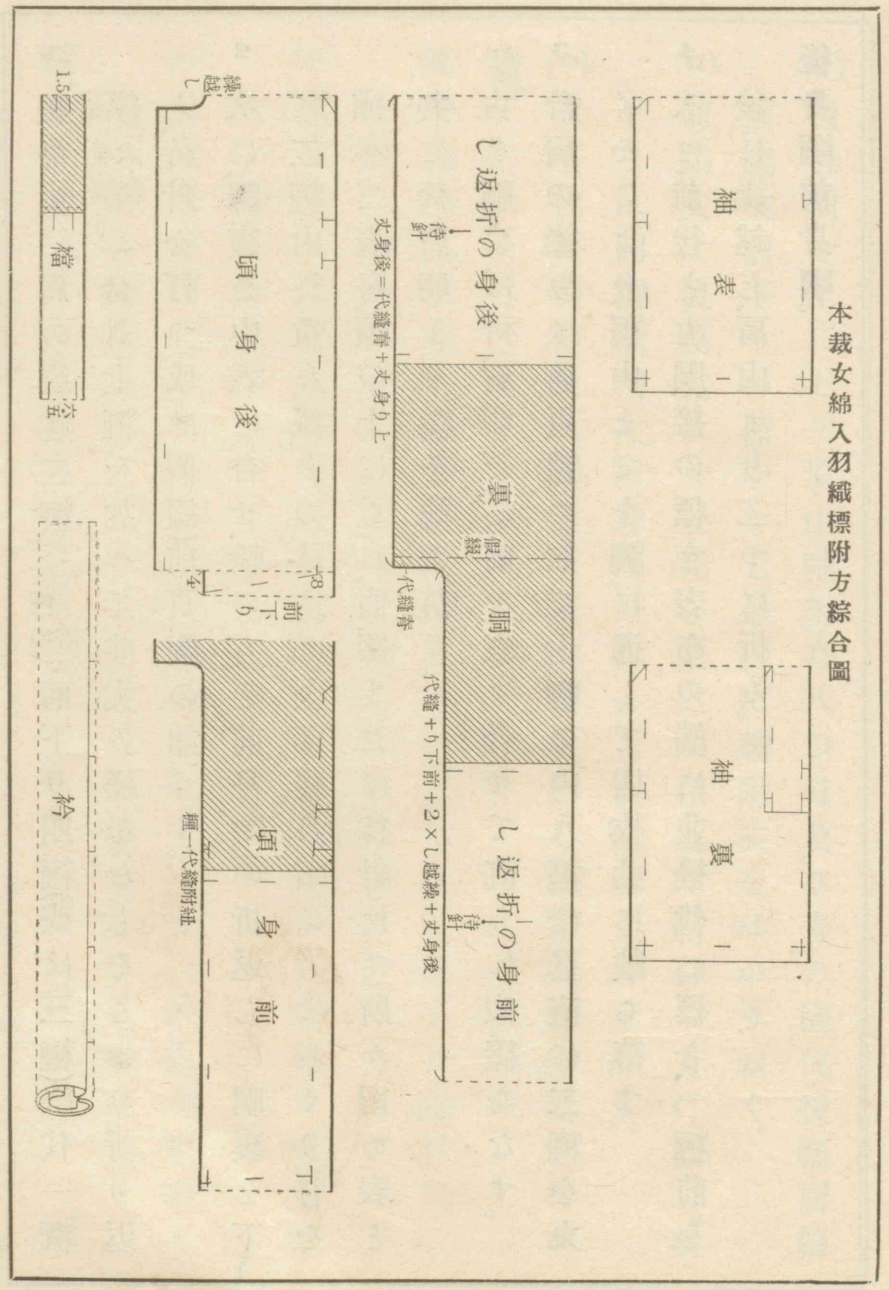
胴接。 表身頃を中表にして二枚揃へ、衿肩明のところに針を打ち、脊を手前に、後身頃を左にして正しく布をおきて身丈を定む。

(イ) 後丈。衿肩明よりはかりて仕立て上り身丈に脊縫代一糎を加へ、後丈を標す。

そこより折返し、待針を打つ(或は假綴)次頁圖の如くす。

(ロ) 前丈。

本裁女綿入羽織標附方綜合圖



1 後身丈に肩の繰越二糎(一糎の二倍)前下り四糎(或は三糎)縫代一糎(内見返り被六糎)・合計七糎を加へて前丈の標をなしそこより折り返し、待針を打つ(或は假綴)前頁圖の如くす。

2 次に、胴裏を中表に合せ、輪の方を前身頃の折返しに胴裏を下に二糎内外重ね、殘りの縫込は全部後身頃の方におくり、脊を揃へて表身頃の上に重ね、假綴または待針にて所々留め、表と共に衿肩明より襠を裁ち落す。

古き胴裏は、衿肩明及び前を表に合せて直ちに假綴をなす。

3 衿肩の繰りは前頁圖の如く十糎の内八糎は眞直に、二糎を丸くそこより裾山まで十糎に通して四枚共に裁ち落す。

4 次に前後とも胴接の標を表布の端に並縫代に標し、一糎前を後に繰越し、肩山より二つに折る。

後身頃・前身頃。

(イ) 後身頃を上にして肩山・袖附・身八つ口及び脊の縫代・後幅・肩幅前脇丈・前下りの標をなし、最後に襠附丈をはかりおく。

(ロ) 前脇丈は後脇丈より二糎と・更に八糎・長く裾口の方に標す。前下りは四糎・襠附丈は身八つ口より後裾山までを計る。

(ハ) 次に、後身頃を左に開きて前身頃を出し、前幅・紐附の標をなす。

襠。

(イ) 中表に二枚重ね、耳を手前、裾を右にしておき、左より襠附丈に一糎を加へたる寸法にはかり、襠布を折り返す。

(ロ) 襠裏布の上部を揃へ襠裏を下に表を上に重ね接代を標し、直ちに接ぎ合す。

(ハ) 襠丈を前脇丈より二糎つめ、上の縫代を中裏に折込み、中央を待針(或は假綴)にてとめおき、上下の襠幅・襠附の標をなす。

衿。

衿幅・衿丈を折り、山・丈・紐附の合標をなす。但し、丈標は

前身頃衿附丈＋衿肩廻＋弛み(一糎)……と計算す。

五　要所の練習

その一　前身頃及び襠附(左)

練習用布　半幅九十糎一枚(身頃)　四つ割七十糎一枚(襠)
　　四つ割十糎内外(襠裏布)

(一)　標附け方

身頃。

(イ)半幅九十糎の布一枚を表裏の前身頃と看做し、中表に二つに折り輪の方を右に、左を衿肩、右を裾、手前を衿附と定めて、左圖の如くおく。

(ロ)裾口より五糎計りて假定の身丈(イ)を標す。

襠附(イ)より三十五糎身八つ口(殘り五糎)前幅いつばいを標す。

身丈(イ)より八糎下りて前脇丈(ロ)を標す。

(ハ)四糎六糎下りて前丈(ハ)を標し、(ロ)(ハ)の標に尺を當てて前下りを標し、左より五糎下りて紐附の標をなす。

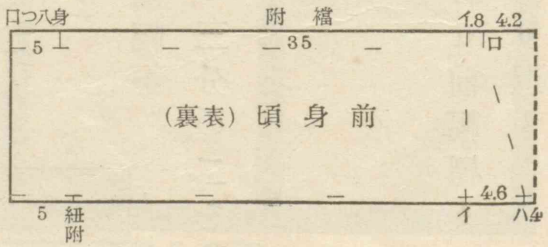
但し、裾口よりの五糎は(繰越なし)、表の見返り(被共)六糎前下り四糎縫代四糎なり。

前下り三糎のときは裾口より四糎とる。

襠。

(イ)七十糎の四つ割布を取り、耳を手前に、布の表を上にしておき、襠上より襠附丈に襠上の縫代一糎を加へ、二糎引きて三十五糎八糎(但し、襠丈を前脇丈より二糎引く)をはかりて丈を折る。

(ロ)この上に中表に襠裏を重ね、接代をいつぱいに標し、直ちに接ぎ合せ、裏布の方に折りて隱鰨をなす。



襠附の標附け方

【問】襠幅のつけ方を復演すべし。

(ハ)襠上の縫代を折り、表裏を中裏に圖の如くおきて、襠幅の中央(イ)を定め、襠幅下六糎半・上一糎半に前後の襠附の標をなす。

縫代は、まづ前襠附代(ロ)を一糎と定め、これに被の三糎を加へて、下襠幅をはかりて後幅の附代(ハ)を定む。

(襠の縫代多きときは、すべて後襠附の方に入る)

(ニ)襠上のまげ方は、仕立て上げの下襠幅より上襠幅を減じたる殘りの三分の一を後襠附の方に、その三分の二を前襠附の方にて曲ぐ。

(ニ)　縫ひ方

前下り。

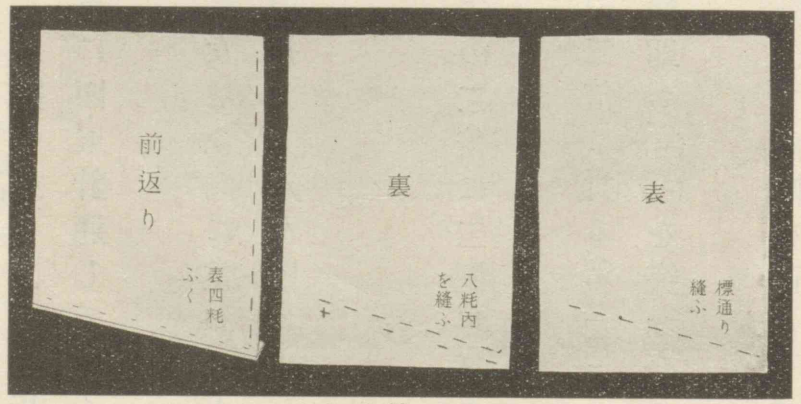
(イ)表の前下り標と、裏の前下り標の八糎内とを合せ、前幅標まで裏を稍や弛めに縫ひ、二糎の被にて裏の方へ折り返す。

(ロ)折山より約六糎上に、二糎位の針目にて隱躾をなし、表を四糎ふかせて折り返し、綿を入れて躾をなす。

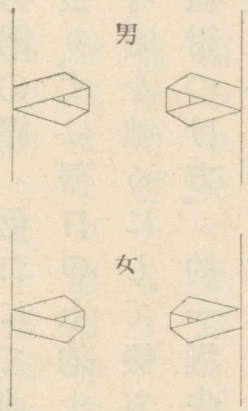
襠附け方。　前脇丈の山(前下りの縫目より四糎表によりたるところ)と、前襠附の裾山とを合せ襠布を稍や張り目にして待針を打ち、前身頃を見て縫ひ、折は身頃の方に返す。

衿附の綴。　裾口にて、前幅は表を二糎位張り、丈は裾口の上約十五糎の間にて、裏身頃を弛めにして綴ぢ合す。

紐附つけ方。　約一糎半の幅にて、長さ四糎内外の布二枚を四糎幅に折り紐附布



下りの縫ひ方



の輪を上にして上圖の如く二つに折り重ね、前身の裏に四・五針通して堅く縫ひつく。

但し、男は下向に女は上向に重ぬべし。

練習用布　並幅一米の布　一枚

その二　衿の折り方及び附け方

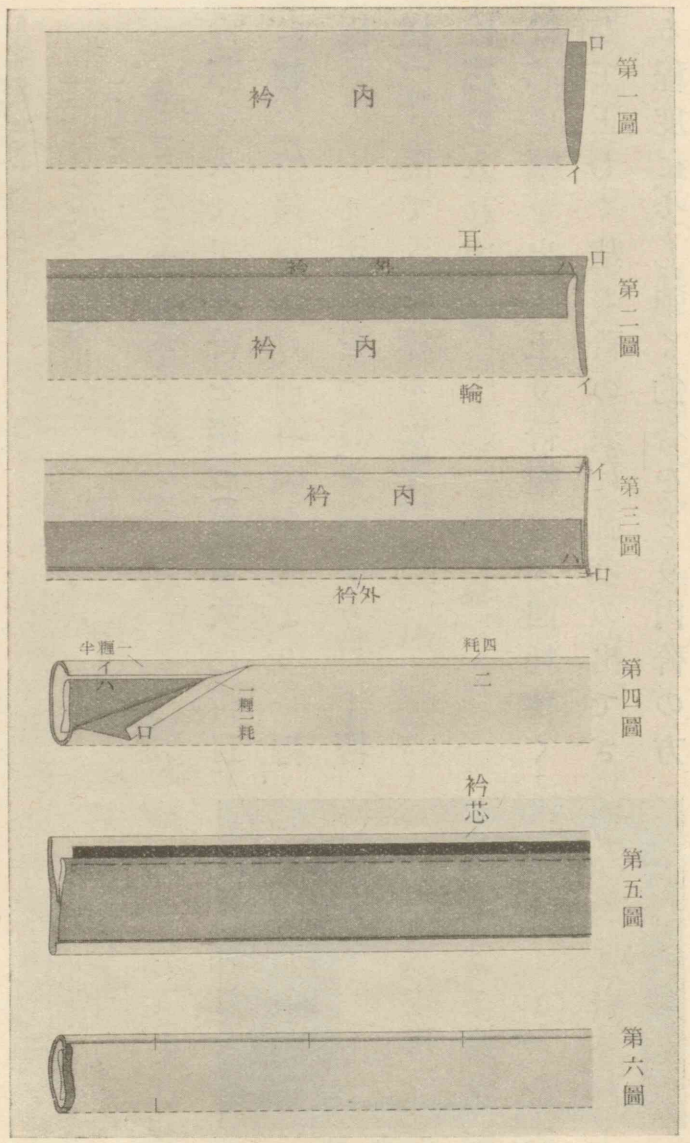
衿の折り方。

(一) 表を出し、(イ)(ロ)を仕立て上り衿幅(六糎半)の二倍に二糎二粍を加へて折る(第一圖)

(二) 内衿(イ)(ハ)を二糎二粍減きて上り衿幅の二倍に折る。(第二圖)

(三) 輪の方を一糎半折り、耳の方を一糎一粍即ち、(ロ)(ハ)を突き合せに折る。(第三圖)

(四) 内衿の(ハ)を(イ)と突き合せ、中の折山に傚ひて衿幅を正しく二



衿の折り方

つに折り合せば(ニ)の如く四粍違となる(第四圖)

注意 (い) 衿幅折り合せの差を三粍となすには輪の方を一糎四粍折るべし。

(ろ)地厚の布は内衿を衿幅の二倍より半粍位少くして折るを可とす。

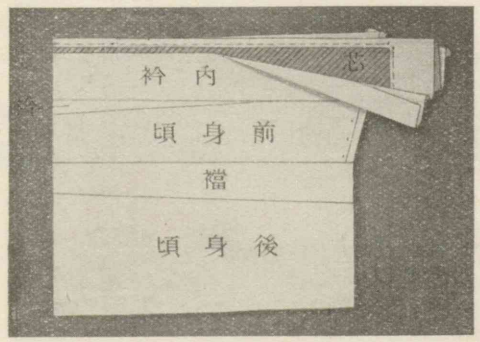
衿の折り方計算

衿幅
6.5×2＋2.2＝15.2
15.2－2.2＝13(6.5×2)
13－1.5＋1.1＝12.6
13－12.6＝0.4(衿の折合せの差)

(五)衿芯を入れて内衿を綴づ(第五圖)次に折目に輕く烙鏝をかけ、前身頃の丈より一糎程長くして丈標をつけ、それより二十糎程づゝ隔てゝ合標をなす。

(六)衿芯の入れ方。

(イ)衿芯の幅を出來上り衿幅より四粍狹くして正しく裁ち、衿の表に弛みの出でざる程度に、少し弛く釣合をとり、内衿の方



衿芯の入れ方

に入れ、荒く躾にて押へおく。

衿の附け方。 衿の輪の方を裏身頃の衿附標に合せ、衿を見て折目の約四粍上を一針貫または刺縫となし、紐附のところは返針とし、衿先の二十糎上まで平らに、それより衿先まで前身の縫代を半糎程深くし、衿先七糎程は特に返針とす。縫ひ終らば、平烙鏝をかけ、衿芯を整へ、四粍の被にて衿の方に折り返す。

衿先縫ひ方。

(イ)紒代を折り、中表に外衿を衿山より二つに折り、表衿二枚を稍や弛めにし、内衿を芯と共に開き、衿幅の兩端八粍程殘し、衿丈標の約一糎先を三枚一所に一針貫きに縫ひ、烙鏝をかく。

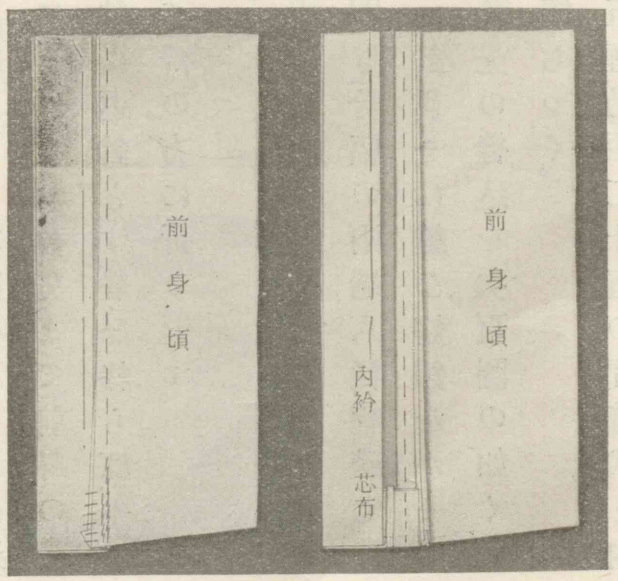
(ロ)衿先の丈限りに芯布を切り、衿先の縫込を次頁圖の如くその上に折り返し、衿附の縫目に綴ぢつく。

(ハ)衿の崩れぬやう衿先より十五糎乃至二十糎の間縫代と内衿

の端(突合せのところ)とを下圖(二)の如く纏り縫とす。紐附の縫込を綴ぢつけおく。

(二) 次に、表に返して衿先を整へ合標を合せて要所に待針を打ち布の張り弛みを程よくして、衿け始めを一針返し、一糎の針目にて衿絎をなす。

(ホ) 終つて表四糎・裏三糎位の針目にて紐附の上七糎位まで衿に躾をなす。



(一) 衿先縫ひ方　(二)

六　縫ひ方

(一) 順序

一 表裏の袖　二 胴接及び脊縫　三 前下り
四 後前襠　五 身八つ口含め綿　六 袖附
七 綿入　八 假綴(裾口・衿附・紐附)　九 紐附
十 衿附及び衿絎　十一 袖口絎　十二 縦綴

(二) 仕立て方

袖。 本裁女綿入に同じ。(但し振縫)

胴接及び脊縫。 前後の身頃の胴接をなし、折を胴裏の方に返して隱躾をなす。後身頃胴接の縫目を合せ、表身頃より裏身頃にかけて脊を縫ひ、被をかけて躾をなす。

前下り。 要所説明の如く裏を稍や弛めに前幅標まで縫ひ、裏の方に返して、隱躾をなす。

後前襠。 後脇丈と後襠附との裾山、身八つ口と襠丈との標を合せ、襠布を稍や張り目に待針を打ち、後身頃を見て縫ひ、身頃の方

【問】女綿入袖口袵の綿綴ぢ針の出し方を復演せよ

に返して躾をなす。

前襠は要所練習の如く、前脇丈と前襠附とを合せて縫ひ、前身頃の方に折を返して躾をなす。

身八つ口・含め綿。 襠の上を表裏合せて縫ひ、縫目をよく合せ、襠の上身八つ口止りに留をなし、その絲にて身八つ口を縫ひ、女綿入の如くして、綿を含めて躾をなす。

袖附。 袖附元に四つ留をなし、表裏の袖をつけ、表袖は袖の方へ裏袖は身頃の方へ折り返して躾をなす。

袖附元の留め方・附け方は、本裁女綿入に同じ。

綿入。 表裏共、身頃の裏を出し、襠幅の中央より折りて左右の前身頃を中に入れ、表の後身頃を上にして正しく伸しおき、次の順に綿を入る。

(一) 薄く眞綿を引き、裾口約十糎位を出して、後身頃に綿を入る。

(二) 別に九糎内外幅の裾綿を入れ、身丈標の二糎位下より折り返す。袖下・身八つ口・振・肩山の綿に切込を入る。

(三) また、眞綿を引き、裾口の綿を假綴となし、周圍の綿を全部前の方に折り込む。

(四) 表裏の衿肩の間より左右の手を入れて、兩襠附の裾口を綿と共に縫目を撮みて引き返し、裏の前身頃を上に出す。

(五) 裏袖を開き表袖に眞綿を引き、綿を入れて、裏袖を上に重ぬ。

(六) 前身頃及び袖に眞綿を引き、折り込みおきたる綿を返し、足し綿を入れ、また眞綿を引き、まづ袖口を表に返し、次に表身頃を表に返してよく引き伸す。

(七) 前の仕方にて、兩前身頃に綿を入れ終らば、袖・身頃共に表裏の縫目を合せ、丈・幅共よく全體の引合せをなす。

假綴。

(イ)裾口によく綿を引き寄せ、二糎程上に假綴をなす。

(ロ)衿附の表裏をよく引合せ、背縫・衿肩・紐附等に待針をなし、裾口は表前身頃の幅を二糎程張り、裾口より上約十糎の間で裏身頃を弛めにして合せ、假綴をなす。

左右の紐附を拵へ、裏より標に當て、内に向けて堅く縫ひつく。

注意　衿附のところは衿の返りをよくするため、綿を薄くすべし。

衿附及び衿絎。

(イ)まづ、衿の山標と裏身頃の脊縫とを合せ、次の如き張り合せにて、縫代の四糎内即ち、一糎一糎の縫代に待針をなし、衿を見て左衿先より一針貫または刺縫にて衿附をなす。

一、紐附より以下は、表裏の張り弛みを同じくす。

二、紐附の上十糎内外の間は、衿を稍や張り目にす。

三、衿肩廻のところは衿を弛め加減とす。

(ロ)紐附のところは返し針に、衿肩廻は小針に、脊縫にては一針返して縫ひ、右前も左前も、同じ釣合に衿をつけ、要所練習の如くして左右の衿先を縫ひ、縫込を衿附の方に返して綴ちつく。

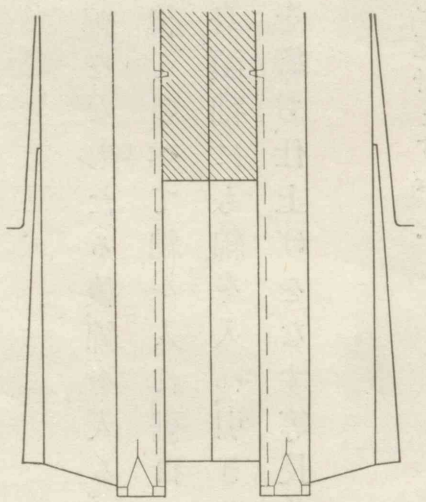
(ハ)縫ひ終らば平烙鏝をかけ、衿芯を整へ、四糎の被にて衿の方に折り衿先を縫ひ、縫込を綴ちつけて表に返す。

次に、よく合標を合せ、要所に待針をなし、布の張り弛みを程よくして衿絎をなす。終つて衿附に躾をなす。

袖口絎。　袖口を絎け、袖下・襠等に綴を入る。女綿入に同じ。

縦綴。　脊・前襠の表裏を綴づ。

仕上げ。　裏を出し、袖口・振・袖附・



衿の躾のかけ方

襠・脊・胴接等に烙鏝または火熨斗をかけ、次に表を出し、全體にかけたる後、正しく疊む。

振紬の仕方。 袖口及び振に含め綿をなしたる後、綿を入る。綿の入れ方は、裏を出し、表身頃の後をのべて綿を入れ、裾口に尺をおき、裏をその上に折り返し、前身頃・袖にも綿を入れ、引き返して袖口・振を紬け、衿をつけて、脊・襠を綴ぢ、仕上げをなす等長着綿入別法に準ず。

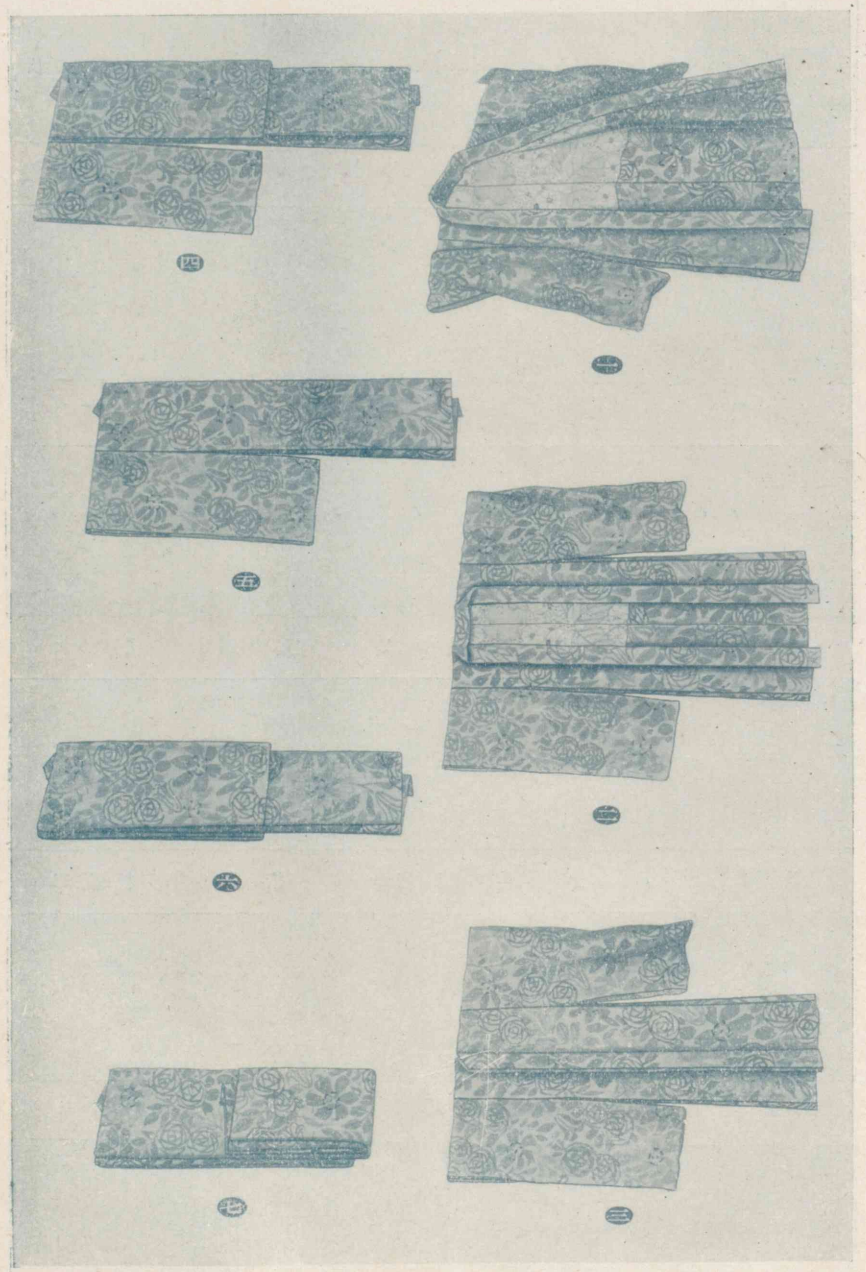
注意 (い)地厚の品は、衿先二糎内外の間を返針とすべし。

(ろ)羽織仕立直しのときは、始め衿丈を計り、身丈の寸法通り出來得るや否かに留意して後標附をなすべし。

(は)胴裏丈不足のときは、裏袖山に補布をなし、袖下を輪のまゝに縫ひおく。

七　疊み方

(1) 衿肩を左に、前身頃を上にして、左右共襠の中央より折る。



羽織の疊み方

(2) 衿の前身頃につきたる部分は表の方に、衿肩のところは裏の方に折り返し、脊縫のところより二つに折りて兩衿を合す。

(3) 襠丈を引き合せ、袖附より各後身頃の方に返す。

(4) 紋所には、柔き紙または布を當て、袖丈の十糎内外下より身丈を二つに折り疊む。

紋所の位置及び寸法

1 位置

脊紋は脊縫の中央、袖紋は袖幅の中央、抱紋は衿肩明を除きたる殘りの前幅の中央とす。

2 寸法

名稱／種類	一つ身	三つ身	四つ身	本裁女物	本裁男物
脊紋下り	脊裁ち切より五糎	五・五糎	六糎	七糎	同上糎
袖紋下り	袖山より 五・五	六	六・五	七・五	同上

抱紋下り	肩山より 一〇	一二	一三	一五	同上

二　本裁男袷羽織

一　地質

本裁男羽織の地質は大体男袷長着に同じ。

二　普通仕立て上げ寸法

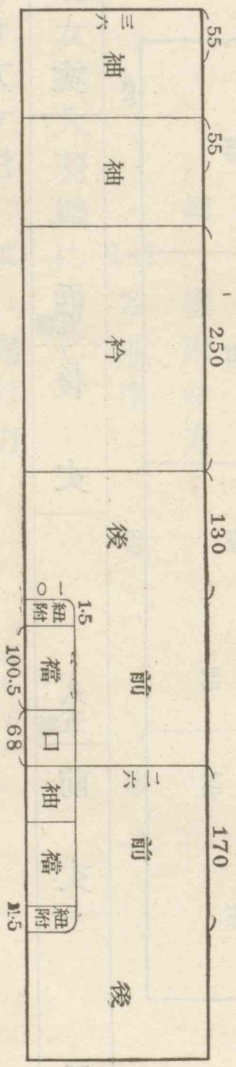
袖丈	五三糎	袖口	二八—三〇糎 長着に同じ	袖附	全部糎
袖幅	三四 長着より・五廣く	身丈	一〇二—一〇六 着丈の3/4位	前下り	四
袷肩明	九—九・五 長着より・五内外多く	後幅	三〇 長着に同じ	肩幅	三三
前幅	一九	紐附下り	三〇—三二 肩より	襠幅	下七
袷幅	七	裄	六六 長着に同じか・五多く	繰越	・五—一

三　裁ち方・積り方

一、表用布。 並幅長さ十米七十糎の布にて、本裁男羽織裁ち方・積り方。(前後の差四十糎)

裁ち切り寸法

袖丈	上り丈 五五糎 五三	袷丈	二五〇糎
前丈	一七〇	後丈	上り身丈 一三〇糎 一〇四
袷肩明	内廻し一・五 一〇	袖口丈	六八



積り方公式及び算式

{袖丈－(袖丈×4＋袷丈＋前後の差×2)}÷4＝後丈

{1070－(55×4＋250＋40×2)}÷4＝……170

後丈＋前後の差＝前丈

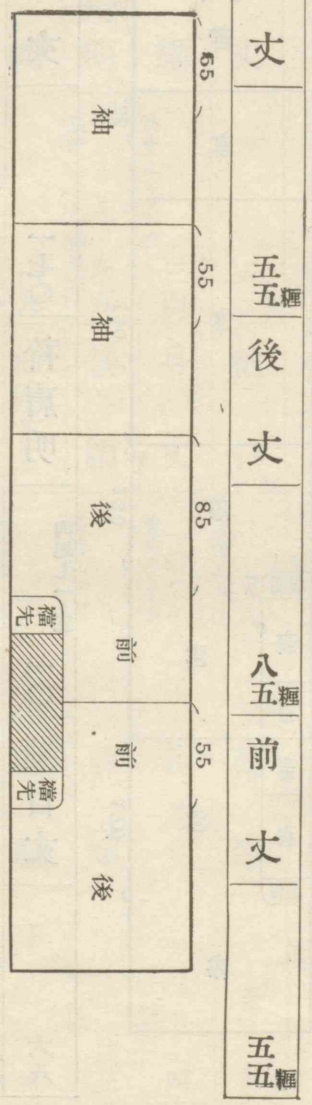
130＋40＝……130

(袖丈＋後丈)×4＋衿丈＋前後の差×2＝總丈
(55＋130)×4＋250＋40×2＝……1070
(身丈＋衿附縫代)×2＝衿丈
(104＋21)×2＝……250

二、裏用布。

並幅長さ五米の用布にて、裏用布の裁ち方・積り方。

裁ち方寸法



積り方公式及び算式

袖丈×8＋身丈×10＋總縫代－表用布＝裏用布總丈
53×8＋104×10＋106－1070＝……500

裏用布總丈－袖丈×4＝胴裏總丈

500－55×4＝280

注意　前下り四糎・繰越半糎・衿附縫代四十二糎として計算す。

應用問題

(一)幅七十六糎長さ五米四十糎にて本裁男羽織を裁たんとす身丈何程となるか。裁ち方圖をも示せ・裁ち切り後丈一米三十五糎。(前後の差三十糎とす。)

(二)同上並幅にて裏用布の裁ち方・積り方を問ふ。

四　標附け方

(一)　順序

本裁女綿入羽織に同じ

(二)　附け方

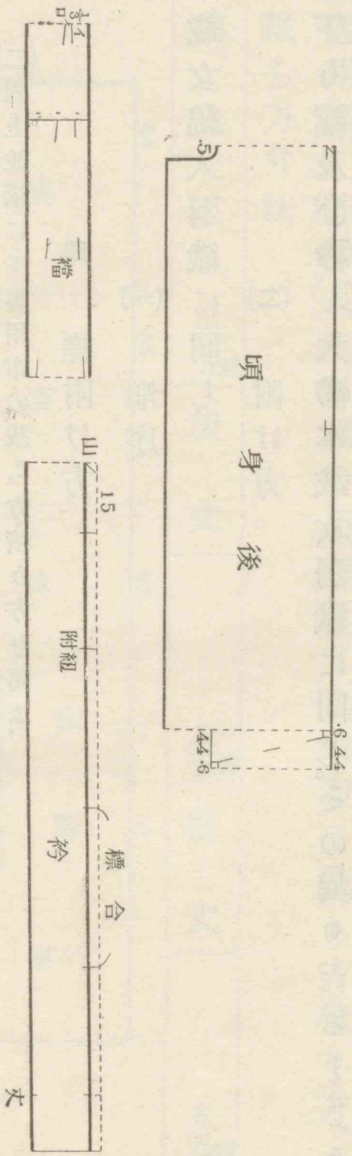
前下り・襠及び衿。　大體本裁女羽織に同じ。その異りたるところは次の如し。

(イ)前下り。肩の繰越一糎(半糎の二倍)・前下り四糎・返り縫代一糎(見返し被の分四糎を含む)を加へ前丈を後丈より六糎長くし

て標をなす。

(ロ) 袖附。袖丈いつぱいとす。

(ハ) 襠。縫代及び縫込の取り方等すべて要所練習の如くす。



(ニ) 衿。袋附とす。折り方・合標等は要所練習の如くす。

五　要所の練習

練習用布 半幅九十糎二枚(身頃)　四つ割七十糎一枚(襠)
並幅一米一枚(衿)　四つ割二十糎一枚(襠裏布)

(一) 標附け方

前身頃(左)

(イ) 九十糎の練習用布二枚を中表に縫ひ合せ、一方に衿肩明を作りて前身頃となす。

(ロ) 女綿入羽織の要所練習のときに準じて左の寸法に標をつく。

前下り(四糎)　脇明(四十糎)　紐附(二十糎)

襠幅(下七糎 上四糎)

襠。

(イ) 四つ割七十糎の練習用布と同二十糎とを接ぎ合せ、中裏に二つ折とし、女綿入羽織の如く襠上の縫代を裏に折り、表裏を合せ、躾をかけ、眞中に假綴をなして、襠の標附けをなす。

(ロ) まづ前襠附の方に並縫代を取り、これより襠幅に四糎加へて計り、殘りを後襠附の縫代となす。

(ハ)襠の上部にて、幅の縫込三分の一を後襠附上部の縫代として(イ)を標し、被の四粍を取りて(ロ)を標し、殘りを前襠附上部の縫代となす。

(ニ)後・前の襠幅に尺をあて襠附の標をなす。

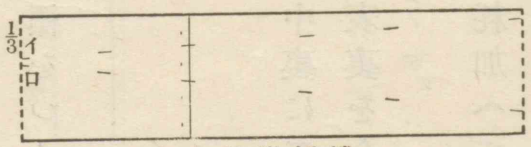
注意　襠の上部餘りに狹くなるときは、十糎内外のところにて、少しくふくらみをつけて標すべし。

衿。　並幅一米の練習用布を衿とし、本裁女綿入羽織の如くして折る。但し、輪の方を一糎四粍に折りて三粍違ひに折り合せ、合標を特に明確になす。

紐附。　女物と反對に折り重ねて紐附を作る。

(ニ)縫ひ方

前下り。　表は標の通り、裏は標より八粍内を前幅標まで縫ひ、裏の方へ折りて、隱躾をなし、引き返して表を四粍ふかせ、一束に躾をなす。



襠標附け方

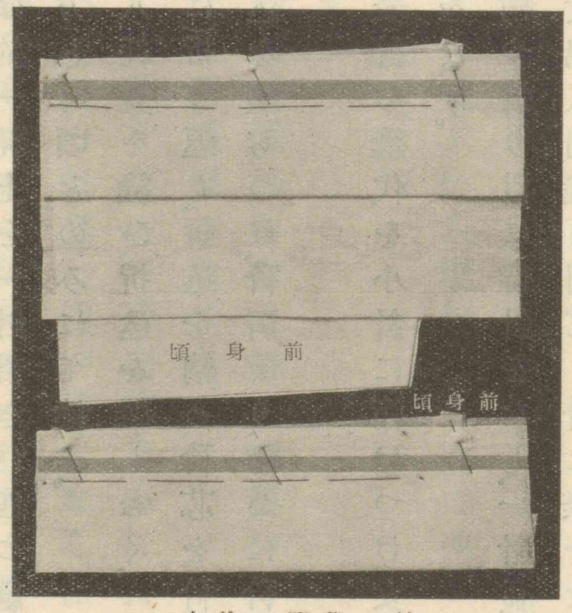
【問】袋附の仕方を問ふ。

衿附の綴。　女羽織に準じて表裏の前幅を揃へ、裏身頃を見て裾口より淺く荒く衿附を綴ぢ、紐附をつく。

衿の附け方。　袋附

(イ)前身頃の裏に衿の表を合せて前身頃を三つ或は四つに折り、その中に疊み込み衿の表裏にて前身頃を挾む。

(ロ)女綿入羽織衿附の如き加減に布を張り合せ衿先より始め、衿山より十二糎程手前まで衿の折角より輪



衿の袋附の仕方

の方は三粍上を、一枚の方は約一粍上を一針貫きに四つ縫とす。それより上は衿の輪の方と身頃とのみにて縫ふ。

(ハ) 衿先は、丈標のところより八粍先を縫ひ、折込を離しおく。

(ニ) 表衿の方に(身頃いつぱいに)折り返し、折込を納め、衿芯を衿先の折目いつぱいに切り、縫込を綴ちつけ、衿肩より靜かに衿を引返し、衿先を正す。

(ホ) つけ殘せしところを整へ、表衿の縫代を小針に絎けつけ、女綿入羽織の如くして衿に躾をなす。

(ヘ) 前襠を前身頃に合せ、襠を稍や張り目に待針をなし、一針貫に四つ縫とし、堅く留をなし、女綿入羽織に同じく衿に躾をなす。

六　縫ひ方

(一) 順序

㊀ 袖　㊁ 胴接・前下り　㊂ 脊縫　㊃ 後襠　㊄ 衿附の假綴　㊅ 紐附　㊆ 衿附　㊇ 衿先　㊈ 表衿の衿肩絎　㊉ 前襠　㊊ 袖附

(二) 仕立て方

袖。 裏袖に袖口布をかけ、表裏の口明を縫ひ合せ、袖口元に四つ留をなし、その絲にて袖口下より袖下の八糎程手前まで四つ縫にし、それより先は、表裏別々に縫ふ。

袂丸を整へ、表に返し躾をなす。

胴接及び前下り。 標の通り、表裏の胴接をなし、折を胴裏の方へ返して躾をなす。前下り縫は要所練習の如くす。

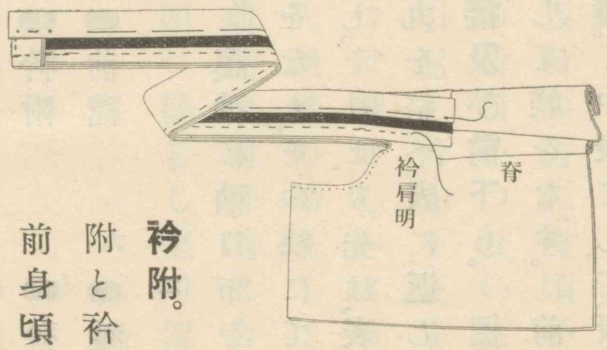
脊縫。 中表にして、表を手前に、胴裏を向ふに衿肩明を右に持ちて胴接の縫目を合せ、裾を揃へ、脊を一針貫に四つ縫になし、裾のところ八糎程は表裏別々に縫ひ、布または眞綿を入れおく。折は

表布の方に折り返す。

後襠。 後身頃にて後襠を包み、裾山を合せ、裾約四糎を返し針に、他は一針貫に四つ縫になし、上端を抄留として表身頃の方へ折り返す。

衿附の假綴。 本裁女羽織に準じて表幅を稍や張り目に表裏の衿附を綴ち合す。

紐附。 男の紐附を拵へ、前身頃の裏に堅く綴ちつく。



衿を袋附にしたる圖

衿附。 要所練習のときの如く、裏身頃の脊縫の衿附と衿の山とを合せて待針をなし、衿の表裏にて前身頃を挾み、衿先より一針貫きに縫ひ、紐附のところはよく針留をなし、衿山より十二糎位手前の

合標のところにて一針返して留め、それより衿肩明までの間は、左右共衿の輪の方と、身頃とのみを縫ひ合せ、平烙鏝をかく。

衿先及び表衿の衿肩絎。 要所練習に同じ。

表衿の衿肩絎は小針に丁寧になすを要す。

前襠。 前身頃にて前襠を挾み、裾を揃へて標を合せ、一針貫に四つ縫とし、平烙鏝をかけて表に引き返す。

袖附。

【問】袖附の待針はどこに打つべきか。

(イ) 表袖。 表身頃に合せ、山に待針を打ち、袖下に四つ留をなし、留め元より約六糎の間は、身頃の幅標より二糎先を斜に折りて小針に返縫にし、その他は開きて合縫になし、袖の方に折りて、表より躾をなす。

縫代多きものは、折り附とす。

(ロ) 裏袖。 表袖と同じく四つ留をなす。(身頃にて袖を包む)

留元は袖の方を斜に折り、後身頃の方よりつけ初め、前身頃の方に二十糎程を殘しおき、このところより引き返して小針に紵けつけ、折は身頃の方に返す。

仕上げ。 衿及び袖に飾緞をなし、火熨斗をかけて正しく疊む。

疊み方。 本裁女綿入羽織に同じ。

注意

袖附別法(袖の開き附)

(い) 袖の全體を縫はず、袖口のみ表裏合せおき、後襠及び衿をつけたる後、表袖と表身頃との山標を合せ、始終を二糎程縫ひ殘して袖附をなし、袖の方に折り、次に裏袖と裏身頃との山標を合せ、雙方共縫込を開きたるまゝ、前袖附け標

仕立て上りの圖

より約十五糎のところまで縫ふ。

(ろ) 身頃の方へ折り、引き返して表を出し、衿の如く袖口に四つ留をなし、袖口下を縫ひ、袖附を七つ留になし、袖下及び袂の丸みを縫ふ。前襠を表身頃にて挟み、一針貫に縫ひ、表身頃の方へ折り、引き返して前裏袖附の縫殘しを紵く。

(は) 七つ留。表の前身頃より始め、表袖の内外・後身頃・裏の外袖・後身頃・内袖(裏の前身頃を除く)の順に七枚を抄ひ、結留をなす仕方をいふ。

【問】一、女綿入羽織の標附け方順序を問ふ
二、衿の折り方を述べよ。

【問】男袷羽織の襠の標附け方を述べよ

第十二篇　應用材料

第一章　本裁男綿入羽織

一　裁ち方・積り方

地質・普通仕立て上げ寸法及び裁ち方・積り方は、すべて本裁男袷羽織に同じ。

二　標附け方

順序・方法は、大體女綿入羽織(身八つ口を除く)に同じ。

但し前・後・襠附の標は、男袷羽織の如く標す。

三　縫ひ方

(一)　順序

㊀袖　㊁胴接及び前下り　㊂脊縫　㊃後・前襠

㊄袖附　㊅含め綿　㊆綿入　㊇假綴

【問】四つ留の仕方を問ふ。

㊾ 袖口絎　㊿ 衿附及び衿絎　(二) 縱綴

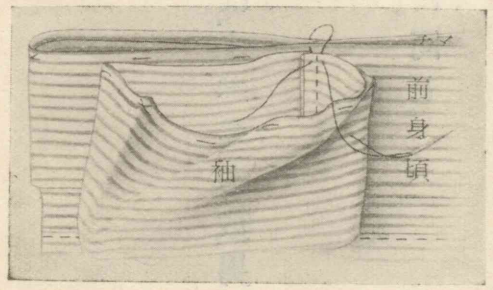
(二) 仕立て方

袖。袖を全部つけ、振を除くのみにて、他は、すべて女綿入羽織に同じ。

袖附。

(イ) 表の袖山と肩山その他の標を合せて待針を打ち、袖にて身頃を挾み、袖附標のところを四つ留になし、袖を見て縫ひ、袖附の始め終りと、袖山とは一針返し、その他は小針につけ廻し、淺き被にて袖の方に折り返す。

(ロ) 裏袖も表袖と同じく標を合せ、身頃にて袖を挾み四つ留をなし、つけ終りて身頃の方へ折り返す。



袖附けの仕方

綿入。 綿の入れ方は、本裁女綿入羽織の別法(振絎けの仕方)に同じ。綴方・衿附・衿絎・仕上げその他は、すべて女綿入羽織に同じ。但し、紐附は女物羽織と反對になす。

第二章　本裁女袷羽織

普通仕立て上げ寸法・裁ち方・積り方及び標附け方等は、大體本裁女綿入羽織に同じ。但し、前下り衿の標附け方は、男袷羽織に同じ。

一　縫ひ方

(一) 順序

㊀ 表裏の袖　㊁ 後前の胴接・前下り　㊂ 脊縫　㊃ 襠接・後襠及び後身八つ口　㊄ 衿附の假綴・紐附　㊅ 衿附及び衿先　㊆ 表衿の衿肩絎　㊇ 前襠及び前身八つ口

【問】一、女袷羽織の縫ひ方順序を述べよ。二、衿の折り方・つけ方を問ふ。三、普通仕立て上げ寸法を問ふ。

九　表裏の袖附

(二)　仕立て方

袖。表裏共に本裁女袷に同じ。

身頃。胴接・前下り等男袷羽織に準ず。

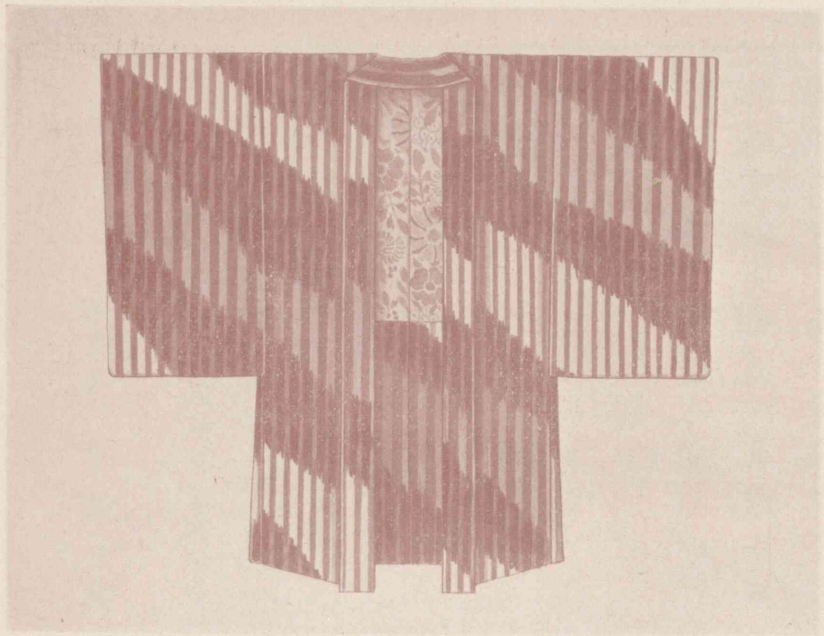
脊縫。本裁男袷羽織に同じ。但し四つ縫になさぬことあり。

襠接・後襠及び後身八つ口。襠裏を接ぎて、襠の上部を表裏縫ひ合せ、眞中を綴ぢおき、後身にて後襠を挾み、一針貫に四つ縫になし、後身八つ口標のところにて絲留をなしその絲にて身八つ口を縫ふ。

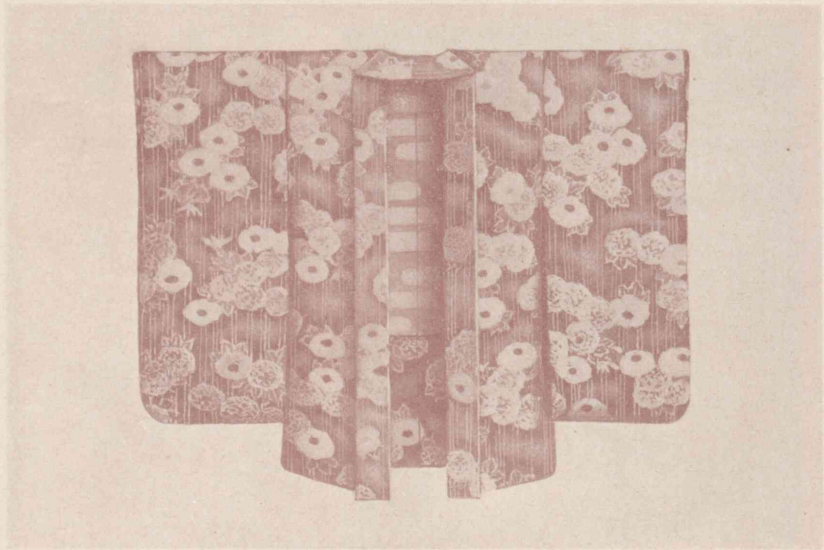
衿附の假綴・紐附。衿附を綴ぢ、紐附を綴ぢつく。

衿附及び衿先。男袷羽織の如く、衿を袋附となす。

前襠及び前身八つ口。前身にて前襠を挾み、後襠と同樣に身八つ口まで縫ひ躾をなす。



本裁女袷羽織



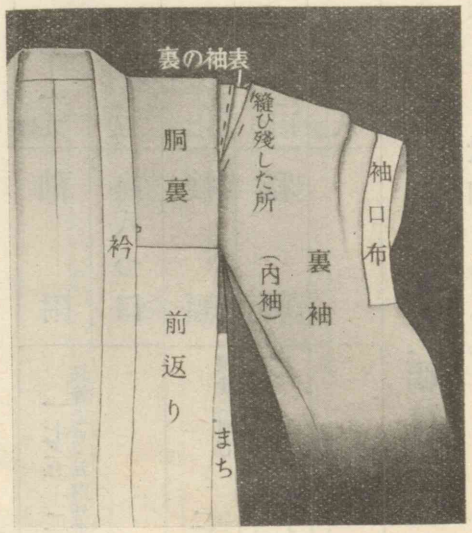
中裁女綿入羽織

袖附。

(イ) 袖附は、本裁女袷の如く四つ留をなし、表袖を縫ひつけて袖の方に折り返す。

(ロ) 裏袖を前身の袖附留の約十糎上まで縫ひ、一針留めて身頃の方に折る。

(ハ) 縫ひ殘しより引き返してその部を絎けつく。



注意 (い) 便宜衿を袋附となさゞる時は長着女袷の如く袖附をなすべし。

(ろ) 四つ留の仕方を袖身頃・身頃・袖の順になす仕方もあり。

第三章　中裁・小裁綿入羽織

一　四つ身綿入羽織

(一)　地質

大體中裁・男女長着用に同じく種類・柄・模様等豐富なり。

(二)　普通仕立て上げ寸法

(い)　袂袖。

袖丈	五三―六八糎（長着に同じ）	袖口	一七―一九糎（長着に同じ）
袖幅	二七・五―三〇・五（長着より・五内外廣く）	身丈	八五（長管より一〇内外短く）
前下り	二・五	衿肩明	六―七（内一・五廻し）
前幅	いっぱい	紐附	二五―二七（肩より）
衿幅	五・五（着物より一多く）	繰越	八

袖附	一七・五―二〇糎（長着より・五内外多く）	身八つ口	八
後幅	二五（長着に同じ）	襠幅	下 六　上 一・五―二

(ろ)　元祿袖及び筒袖。

【問】元祿袖及び筒袖の長着の寸法を問ふ。

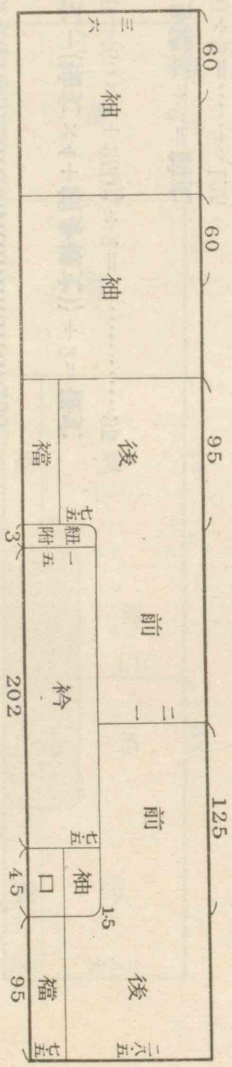
袖丈は長着より一糎内外長く、幅は半糎内外廣き方よし。他は袖丈短きのみにて袂袖に同じ。

(三)　裁ち方・積り方

一、並幅長さ六米八十糎にて、四つ身羽織袂袖の裁ち方・積り方裁ち切り寸法（前後の差三十糎）

袖丈	六〇糎	身丈（前後）	一二五・九五糎
前幅	二一	後幅	二八・五糎
衿幅	一五	衿丈	二〇二

前幅	七・五	袖口丈	四五
紐附	三		



積り方公式及び算式

四つ身羽織の積り方公式は、まづ衿丈を見積り、それに袖口丈及び紐附を加ふれば左右の前丈となる、故に次の如き式を得べし。

(上り身丈＋衿附縫代)×2＝衿丈
(85＋16)×2＝……202

衿丈＋袖口丈＋紐附＝前身總丈(左右)
202＋45＋3＝……250

(總丈－(袖丈×4＋前身總丈))÷2＝後丈
{680－(60×4＋250)}÷2＝……95

前身總丈÷2＝前丈
250÷2＝……125

前丈－後丈＝前後の差
125－95＝……30

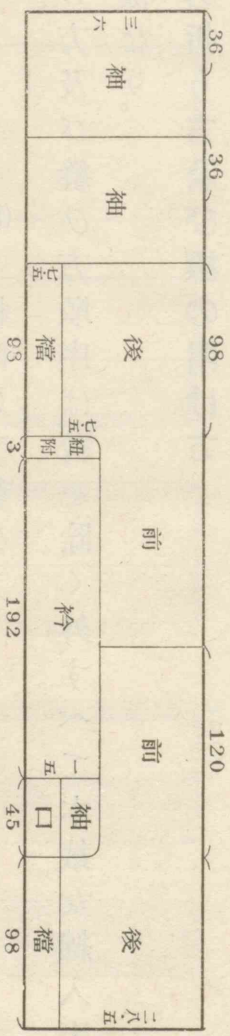
(袖丈＋後丈)×4＋前後の差×2＝總丈
(60＋95)×4＋30×2＝……680

{總丈－(後丈×4＋前後の差×2)}÷4＝袖丈
{680－(95×4＋30×2)}÷4＝……60

二、並幅長さ五米八十糎の用布にて、四つ身羽織元祿袖の裁ち方。

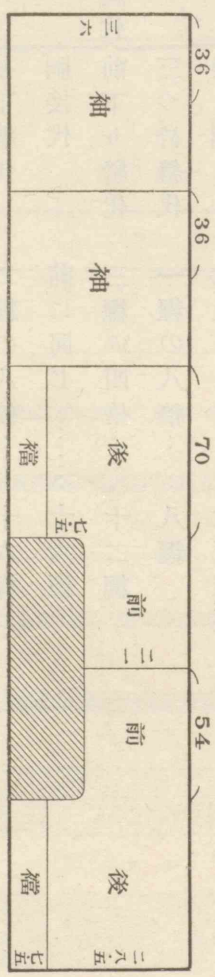
【問】裁ち方一、上り袖丈五十八糎上り身丈八十五糎の裏用布を公式により計算せよ

(前後の差二十二糎)



積り方　前題に同じ(但し、上り身丈八十糎)

三、同上裏用布の裁ち方・積り方。



積り方

(上り袖丈＋上り身丈)×8＋總縫代－表用布＝裏用布の總丈
(34＋80)×8＋60－580＝……393

注意　(い)衿丈の計算に於て、衿附縫代を約十六糎とす。

即ち衿肩明＋三つ衿縫代＋肩の縫越＋前下り＋衿先縫代の合計なり。

袖下縫代　二糎の八倍……十六糎
胴接代　前に同じ……十六糎
(ろ)總縫代
前下り縫代　三糎の四倍……十二糎
三つ衿縫代　一糎の八倍……八糎
繰り越し　八糎の八倍……六糎四糎

合計五十八糎四糎故に約五十九糎(或は六十糎)として計算す。

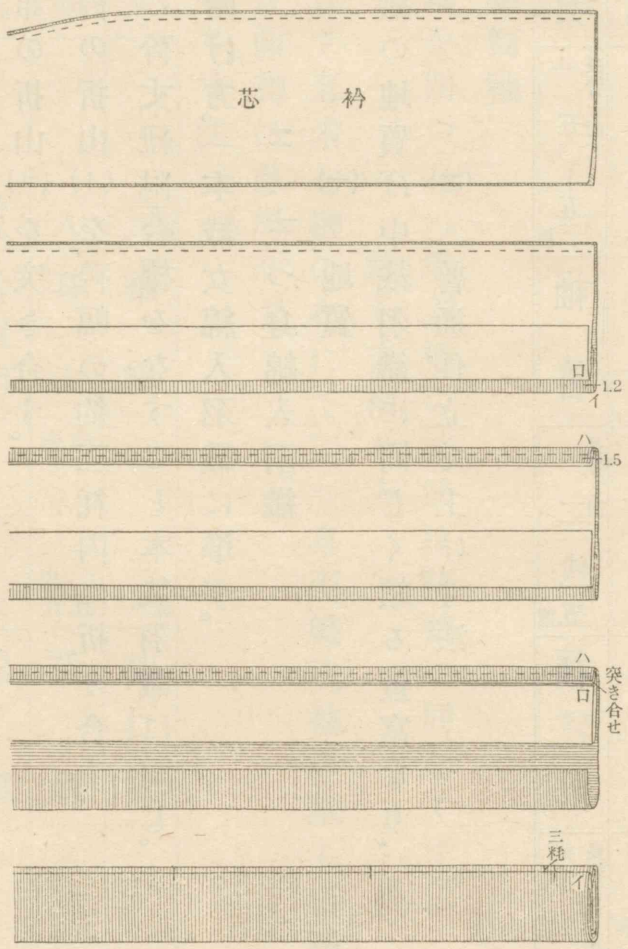
(四)　標附け方・縫ひ方

標附け方及び縫ひ方順序は、衿を除く外、すべて本裁女綿入羽織と同様なり。

一　衿の折り方及び標の附け方

(イ)まづ表衿布に正しく裁ちたる約半幅の芯布を綴ちつけ、衿

【問】本裁女綿入羽織の縫ひ方順序を述べよ。



衿の折り方

幅の二倍に一糎半を加へて、内衿(イ)を折る。(右圖)

(ロ)次に、その幅より約一糎二糎を引きて、芯布(ロ)を折る。(一糎一

糎を引けば折り合せの差四糎となる）

(ハ) 外衿を一糎半(ハ)折り返す。

(ニ) 芯布の折山(ロ)を突き合す。

(ホ) 内衿の折山(イ)を、衿幅の約三糎内に折り合す。

(ヘ) 次に、衿丈・紐附・合標をなすこと本裁羽織に同じ。

(ロ) 衿の附け方。 本裁女綿入羽織に準ず。

二　三つ身綿入羽織

(一) 地質

小裁羽織の地質は中裁羽織に同じく頗る豐富なり。

(二) 普通仕立て上げ寸法

(イ) 袂袖。

袖丈	五〇—五三糎（長着と同じ）	袖口	一三—一五糎（長着と同じ）
袖幅	二五—三〇（長着より・五廣く）	身丈	六〇—六五
袖附	一六糎（長着より・五内外多く）	身八つ口	八

前下り	二	後幅	いつぱい
襠幅	下 五 上 二	衿幅	四・五
紐附	二〇（肩より内外）	衿肩明	五—五・三・六（繰越）

(ロ) **元禄袖・筒袖**

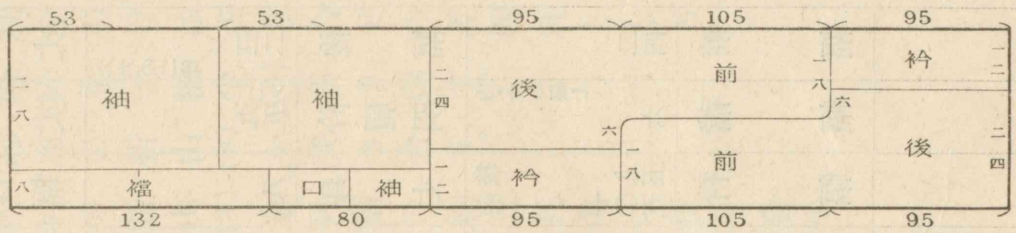
袖丈・袖幅を四つ身に準じ、他の寸法は袂袖に同じくす。

(三) 裁ち方・積り方

一、並幅長さ五米七糎の布にて、三つ身羽織袂袖の裁ち方・積り方。（但し、片面物に應用せず）

裁ち切り寸法

袖丈	五三糎	袖幅	二八糎
袖口幅	八	身丈	前 一〇五 後 九五
衿丈	九五 二ツ	衿肩明	六（内・六の廻し）
襠丈	六六の二倍 一三二	後幅	二四
		前幅	一八
		襠幅	八
		衿幅	一二
			四〇糎



積り方公式及び算式

{總丈－(袖丈×4＋前後の差)}÷3＝後丈

{507－(53×4＋10)}÷3＝……95

後丈＋前後の差＝前丈

95＋10＝……105

袖丈×4＋後丈×3＋前後の差＝總丈

53×4＋95×3＋10＝……507

{總丈－(後丈×3＋前後の差)}÷4＝袖丈

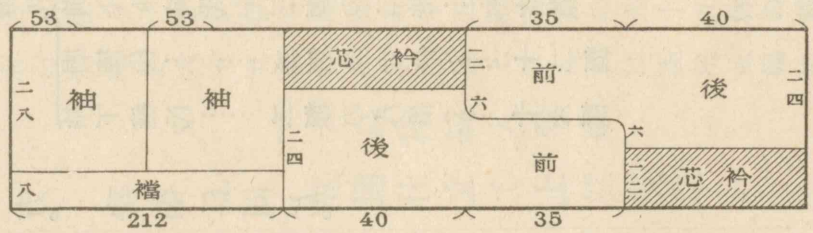
{507－(95×3＋10)}÷4＝……53

(身丈(上り)＋衿附縫代)×2＝衿丈（紐附を取りて殘布を出す）

(65＋14)×2＝……158

注意 袖口丈は、普通に袖口明に十糎内外を加ふ。

二、同上裏用布の裁ち方積り方。（片面物に應用せず）



積り方

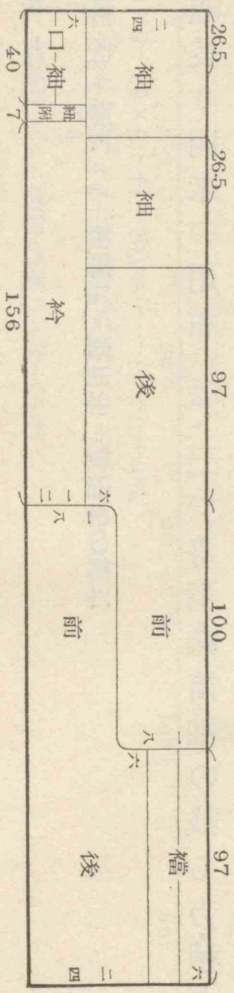
袖丈(上り)×8＋身丈(上り)×6＋總縫代－表用布＝裏用布の總丈

50×8＋65×6＋44－507＝……327

三、並幅長さ四米の用布にて、三つ身羽織筒袖の裁ち方・積り方。裁ち切り寸法。（片面物に應用せず）

袖丈	三六・五糎	後丈	九七糎	前丈	一〇〇糎

襠幅	六糎	後幅	二四糎
袖口布	四〇	衿丈	一五六
		衿幅	一二糎



積り方。袂袖に同じ。

注意

(い) 総縫代
- 袖下縫代……二糎の八倍……十六糎
- 胴接代……二糎の六倍……十二糎
- 前下り縫代……三糎の二倍……六糎
- 三つ衿縫代……一糎の六倍……六糎
- 繰り越し……八糎の四倍……三糎二糎

合計四十三糎二糎故に約四十四糎として計算す。

(ろ) 身頃の裁ち落しは衿の芯布として用ふるもよし。

應用問題

(一) 並幅長さ五米十五糎の用布にて、三つ身羽織袂袖を裁つには如何なる裁ち方に依るべきか。但し、袖丈五十五糎・前後の差十九糎の裁ち切りとす

(二) 右の羽織を六十五糎の身丈に仕上げんには、裏地並幅にて何程を要するか。

三　一つ身袴綿入羽織

(一)　普通仕立て上げ寸法

身丈	五五糎 内外	身幅	いつぱい	脇明	二三—二五糎
前下り	八—一 (つけざるもあり)	紐附	肩より 一九	襠幅	上 三・五 下 五・五
衿幅	四	紐丈	約一・二糎の丸紐 二三	衿肩	四 繰越 内外 五・五

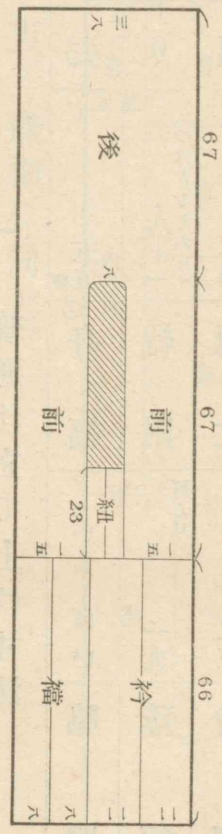
(二)　裁ち方・積り方

一、幅三十八糎長さ二米の用布にて、袴羽織の裁ち方・積り方。

裁ち切り寸法

後丈	六七糎	前丈	六七糎
衿幅	一一	襠幅	一枚の幅 八
紐丈	二三	繰越	五

衿丈	山接 六六糎	衿肩明	内一の廻し 四



積り方公式及び算式

身丈(上り)＋(衿附縫代＋衿山接代)＝衿丈
55＋11＝……66

(總丈－衿丈)÷2＝前後丈
(200－66)÷2＝……67

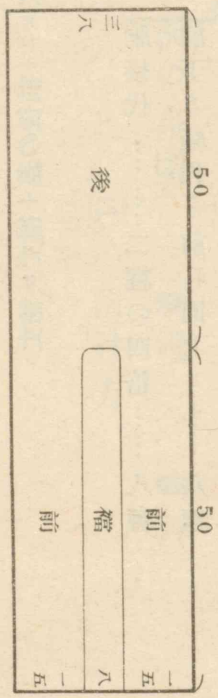
身丈×2＋衿丈＝總丈
67×2＋66＝……200

後丈×2＋前後の差＋衿丈＝總丈(前後に差あるとき)

67×2＋6＋66＝……206

二、幅三十八糎・長さ一米の用布にて、裏用布の裁ち方・積り方。

後丈	五〇糎	前丈	五〇糎

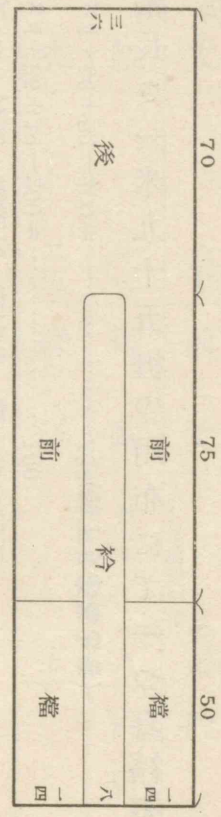


積り方公式及び算式

身丈(上り)×4＋衿丈＋總縫代－表用布＝裏用布の總丈
55×4＋66＋14－200＝……100

55×4＋66＋22－200＝……108(前下りあるとき)

三、並幅長さ一米九十五糎の用布にて一つ身袴羽織の裁ち方・積り方。



積り方公式

身丈（上り）＋三つ衿縫代－脇明＋裾折り返し＝襠丈

後丈×2＋前後の差＋襠丈＝總丈

注意

胴接代……二糎の四倍……八糎

總縫代
- 前下り縫代…前に同じ……八糎
- 三つ衿縫代…一糎の四倍……四糎
- 繰り越し……半糎の四倍……二糎

合計二十二糎または二十四糎として計算す。

應用問題

並幅長さ一米九十糎の用布にて、一つ身袴羽織の裁ち方及び裁切り寸法を示せ。また裁ち方圖をも示せ。但し、前後の差は、七糎とす。

三　標附け方

(一)　順序

❶後前の身頃　❷襠　❸衿

(二)　附け方

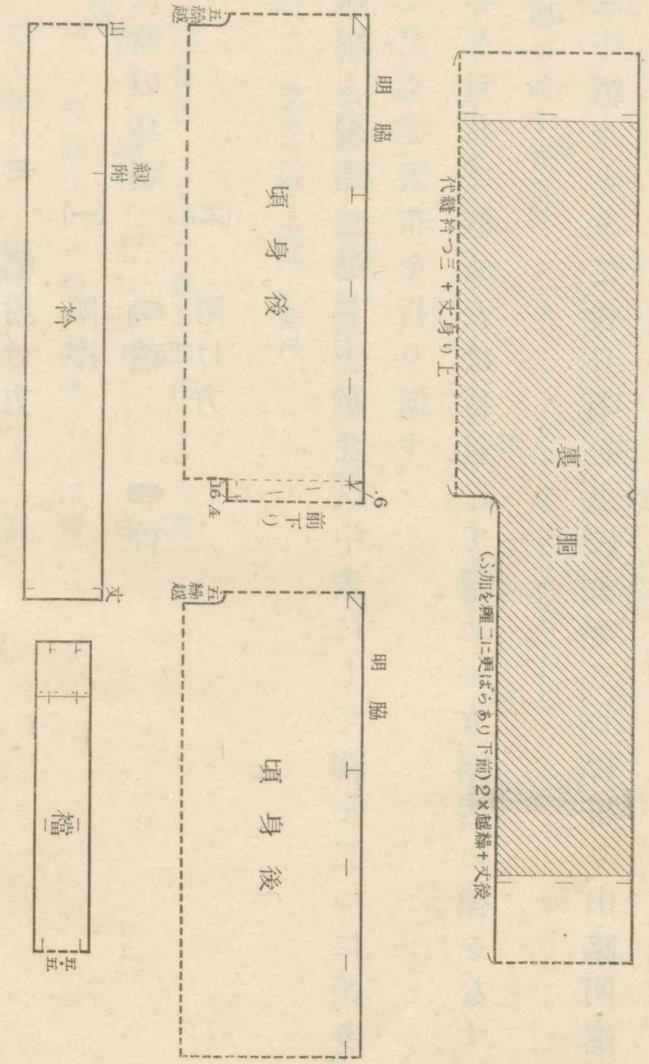
身頃。

(イ) 中裁綿入羽織に準じ、表裏共に中表にして幅を二つに折り、身丈を定めて、表布を折り返す。

(ロ) 裏布を重ねて、躾または待針にて留めおき、胴接の標をなす。（次頁上圖の如く計る。）

(ハ) 繰越半糎をとりて後身頃を上に丈を二つに折り、山・脇明・襠附を標す。但し、前下りあらば二糎を標す。

一つ身袴羽織標附け方綜合圖



(二)後身頃を開きて紐附の標をつく。

襠。四つ身羽織の如く襠裏を接ぎ、中表に二枚重ねて二つに折り、裾山・丈・幅を定め、後・前襠附の曲りを同じにして標をつく。

衿。衿の山接をなし、四つ身羽織に同じ仕方にて衿を折る。

四　縫ひ方

(一)　順序

㊀胴接・前下り　㊁襠附　㊂脇明

㊃綿入・假綴・前襠綴　㊄紐附　㊅衿附・衿紮　㊆肩揚

(二)　仕立て方

胴接・前下り・襠附。すべて、本裁女綿入羽織に準ず。

脇明。

(イ)脇明の表裏を揃へ、脇明標より四糎許りは自然にして、表布の幅標の四粍外と裏布の幅標の四粍内とを合せて待針を打つ。

(ロ)脇明に四つ留をなし、襠の上部及び脇明を縫ひ合せ、裏の方へ折り、隱躾をなす。

【問】一、袴羽織に肩入をなすことあり。如何なる順序に仕立つべきか。二、袴羽織の表を、友禪モスリンと裏を無地モスリンとして、これに要する綿・絲代共總計何程を要するか。三、出來上り身丈六十二糎の袴羽織に要する表裏の用布を計算せよ。

(ハ)脇明の表布と襠の上部とに含み綿を入れて縫目に綴ぢつく。

但し、この含み綿は幅を五糎位とし、厚さを加減して入るべし。

綿入。 縫裏を出しおきて、本裁女綿入羽織の如く後身頃より前身頃へと、順次に綿を入る。

綿の入れ方注意等本裁女綿入羽織のときに準ず。

假綴・前襠綴。 本裁女綿入羽織に同じ。

紐附。 並の縫代にて紐を縫ひ、引き返して躾をなし、中に眞綿を入れ、一端を五行留とし、他の一端は、その縫目を紐裏の中央として、前裏身頃の紐附標に返針にて確と縫ひつく。

衿附衿紬。 すべて中裁四つ身綿入羽織に準ず。

仕立て上り圖

仕上げ。 仕立て終らば、火熨斗をかけ、脊守をつけ、肩揚をなし、丈を二つ折に疊む。

各種羽織普通仕立て上げ寸法表

各部名稱＼種類	袴羽織	三つ身	四つ身	本裁女物	本裁男物
袖丈	—糎	五〇—五三糎 長着と同じ	五三—六八糎 同上	六〇糎 内外 同上	五三糎
袖口	—	一三—一五 長着と同じ	一七—一九 同上	二三 同上	二八—三〇
袖附	—	一五・五 長着より・五内外多く	一七・五 同上	二四—二五・五 同上	全體
袖幅	—	一一五・五 長着より・五内外廣く	二七・五 同上	三三 同上	三四 同上
身丈	五五 内外	六〇—六五	八五 長着より一〇内外短く	九五—一〇〇	一〇二—一〇六 着丈の3/4位
身八つ口	—	八	八	一〇	—
脇明	二三—二五	—	—	—	—
前下り	八—一 つけざるもあり	二	二・五	三—四	四

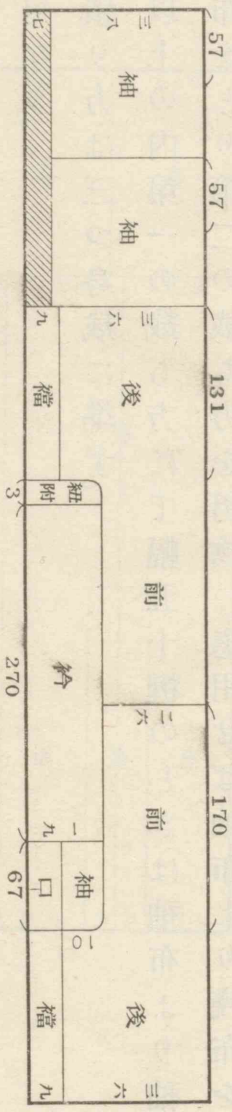
衿肩明	繰越・五内外　四	繰越・八　五―五・三	内一・五廻し　六―七	内二廻し　九・二―九五	同上　九―九・五
後幅	いつばい	いつばい	長着に同じ　二五	同上　二八・五	同上　三〇
肩幅	いつばい	いつばい	いつばい	二九・五	三二
前幅	いつばい	いつばい	（一五―一七）いつばい	一七	一九
紐附	一九　肩より	同上　二〇　内外	同上　二五―二七	同上　三〇―三四	同上　三〇―三二
襠幅	下　五・五　上　三・五	下　五　上　二	下　六　上　一・五―二	下　六・五　上　一・五	下　七　上　〇
衿幅	四	四・五	着物より一多く　五・五	六・五	七
裄	―	長着より・五長く　三・四　内外	同上　四五・六　内外	長着に同じ　六二・五	同上　六六
脊紋下り	脊裁ち切りより　五	五・五	六	七	七
袖紋下り	袖山より　五・五	六	六・五	七・五	七・五
抱紋下り	肩より　一〇	一一	一三	一五	一五

第四章　本裁・中裁・小裁各種羽織の裁ち方

【問】二圖の裁ち方に對する裏地の積り方を問ふ。

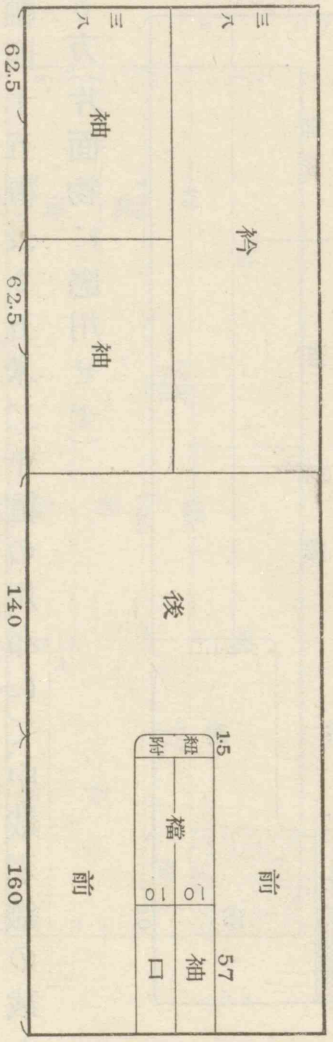
【問】積り方公式算式を問ふ

一、幅四十五糎・長さ八米三十糎の布にて、本裁男袷羽織の裁ち方



積り方は四つ身に準ず。

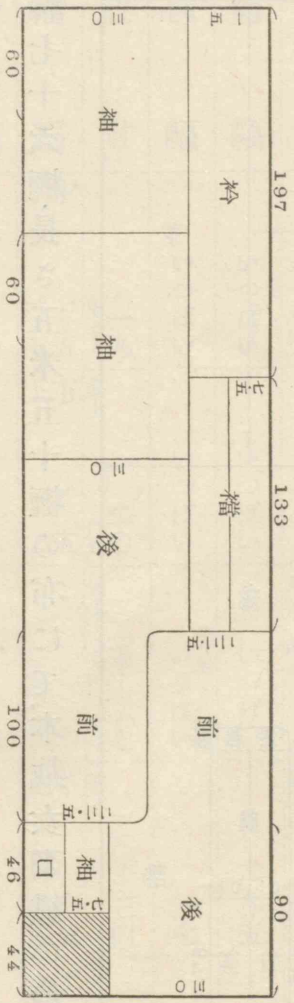
二、幅七十六糎・長さ五米五十糎の布にて、本裁女羽織の裁ち方



第四章　本裁・中裁・小裁各種羽織の裁ち方

【問】片面物幅四十五糎半長さ四米三十九糎にて中裁羽織元祿袖の裁ち方竝に裁ち切り寸法を記せ。

三、幅四十五糎・長さ五米二十糎の用布にて、中裁羽織の裁ち方・積り方。（片面物に應用せず）



右の裁ち方にては袖口布充分なれば縦にとりて二分するも可なり。

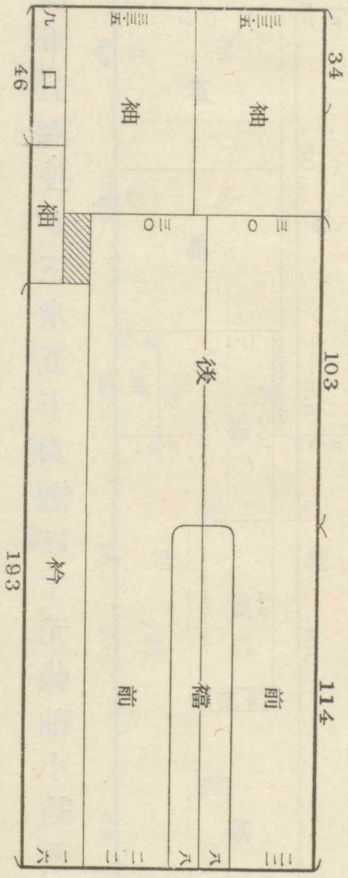
積り方は三つ身裁に準ず。

以上の内第一の裁ち方にて幅五十糎のときは袖布より袖口布をとり第二の裁ち方を男物に應用せば袖布より殘布を出すべく、第三の裁ち方は袖口布より殘布を出す。

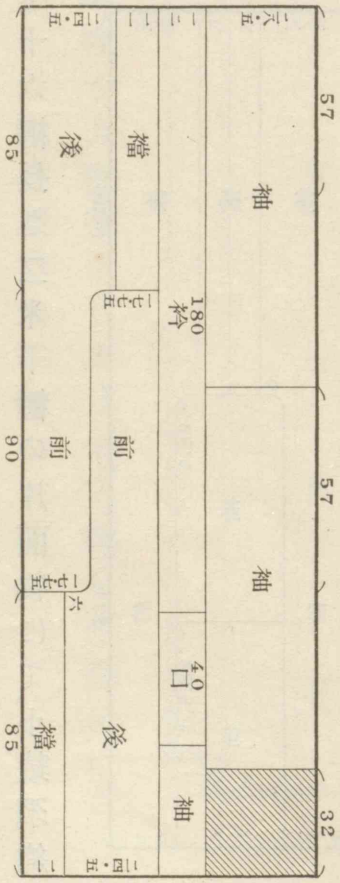
【問】各自に各部寸法を變じ或は丈・幅を變化して裁ち方圖を作り、且積り方を練習すべし。

【問】四問以下の各裁ち方の内二種を選びて積り方の公式を作れ。

四、幅七十六糎・長さ二米八十五糎にて、中裁羽織元祿袖の裁ち方。

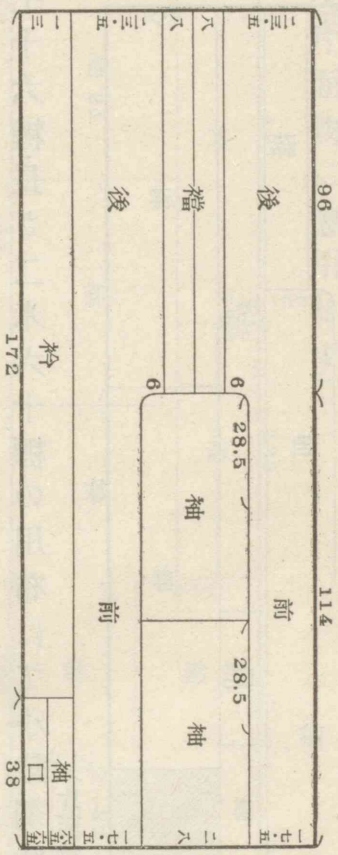


五、幅七十六糎・長さ二米六十糎の用布にて、小裁羽織の裁ち方。（片面物に應用せず）

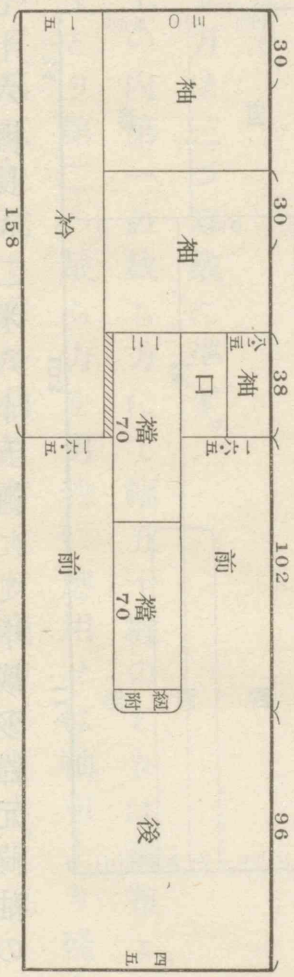


【問】五間の裁ち方公式を作れ。
六間　同上

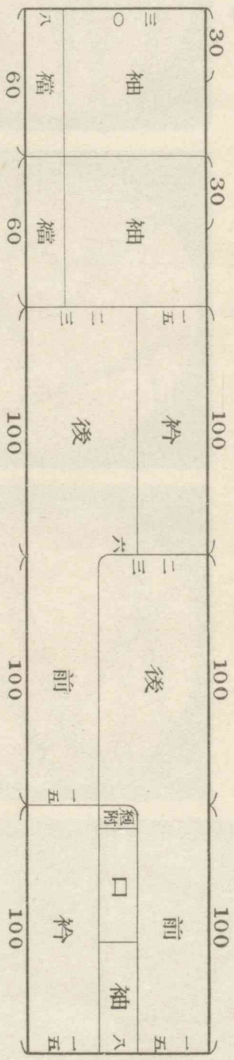
六、幅七十六糎・長さ二米十糎の片面物にて、小裁羽織の裁ち方。



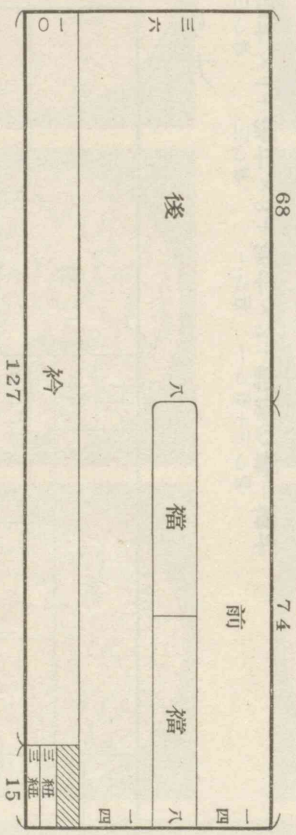
七、幅四十五糎・長さ三米五十六糎にて、元祿袖小裁羽織の裁ち方。（片面物）



八、幅三十八糎・長さ四米二十糎の片面物にて同上裁ち方。

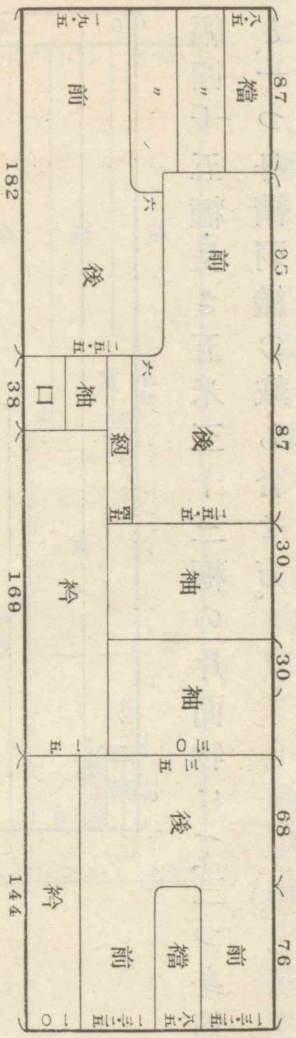


九、中幅縮緬にて一つ身袴羽織の裁ち方。



一〇、幅四十五糎・長さ五米三十三糎の片面物にて、三つ身筒袖羽織と、一つ身袴羽織の裁ち合せ方。

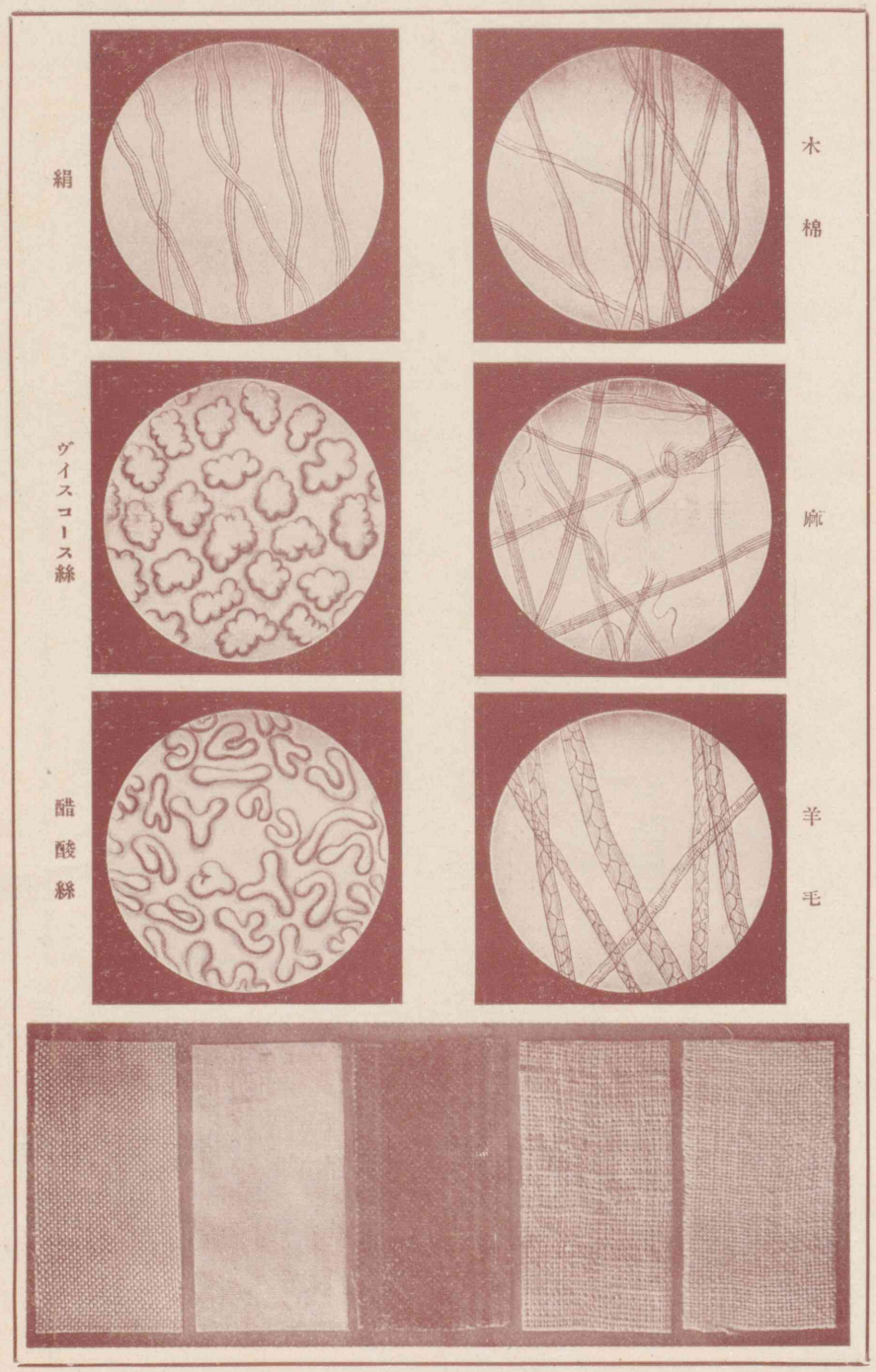
【問】各問の内一つを選びて其の裏地裁ち方・積り方及び裁方圖を示せ。



積り方

袖丈（三つ身）×4＋後丈（三つ身）×3＋後丈（一つ身）×2＋前後の差＝裾丈（一つ身＋三つ身）

30×4＋87×3＋68×2＋16＝……533



第十三篇　絹布・毛織の仕立方

第一章　絹布・毛織單衣

一　絹布單衣の縫ひ方要所説明

絹布は、寸法・標附け方・裁ち方・積り方・縫ひ方順序等綿布に同じ。特に次の如きことに注意すべし。

一　地直し。

(イ)耳の稍や張りたるは、烙鏝にて伸す。

(ロ)強く張りたるは、耳に鋏を入れて全體に火熨斗をかく。

(ハ)耳の弛めるは、白布を敷きてその上に布をおき、弛める部に濡れたる布を當つるか、または直ちに霧を吹き、布を縮ませて後、火熨斗をかく。

二　標附け方。

(イ)絹布は、裁ち板の上に必ず布または紙を敷きて、標をなす。

(ロ)絹布は地薄なれば、筅の使用方に特に注意を要す。車筅・チョーク等用ふるもよし。

三　縫ひ方。

(イ)總體に、綿布よりは針目を細かくし、(約三粍)縫目に烙鏝をかく。

(ロ)脇・衽・袖及び身八つ口の縫込を折紉とす。

(ハ)衽の褄先は、額縁となす。

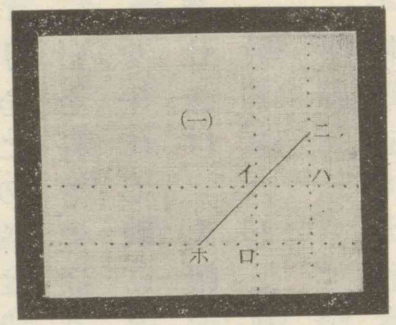
(ニ)肩當・居敷當のつけ方も特に丁寧になす。肩當は三つ折紉とし、幅は、袖附の縫込に紉けつく。但し、ごく薄物の場合には、肩當・居敷當を用ひず小さき共布にて三つ衿にあて、また脊の縫代を包みて紉けつく。

(ホ)袖口布を用ふるときは、表より二粍引きて袖口を標し、兩端を二つに折りて伏縫をなし、標を合せて縫ひ、毛抜合せとし、袖口

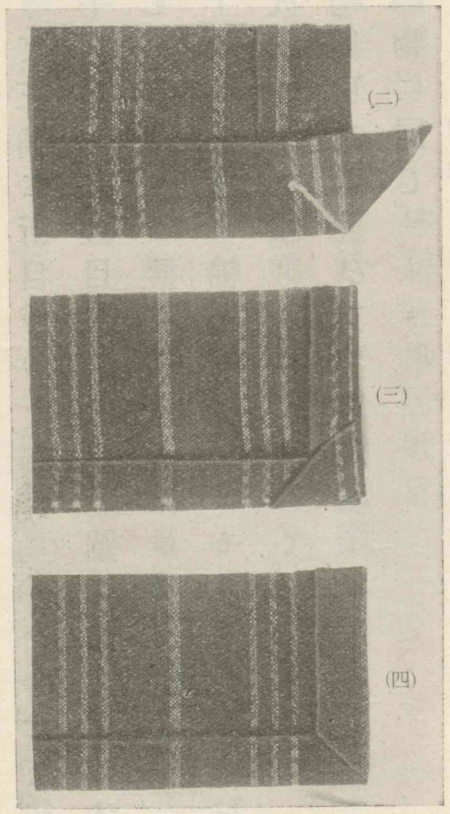
元に四つ留をなす。袖口下を表裏別々に縫ひて縫代を割り、袖口布の奥を紉けつく。袖口の三つ折紉は、木綿物よりは細く折りて小針に紉けつく。但し品により、四つ折紉または縒紉とす。

(ヘ)針は細或は絹針、絲は絹絲または絹小町、麻は絹の麻絲を用ふ。

(ト)額縁の仕方。衿下及び裾紉の標をなし、(イ)(ハ)の幅を計りて(ロ)(ホ)に移し、(イ)(ロ)を計りて(ハ)(ニ)を標し、(イ)點を通じて(ニ)(ホ)の線を



額縁割り出し方



【問】一、絹布單衣縫ひ方にて綿布と異るところを述べよ。二、額縁の仕方を説明せよ。三、アイロンの掛け方を問ふ。

引き、この線に沿うて三角に折目をつく。次に、(ホ)(ニ)を合せて待針を打ち、標通り半返縫とし、縫目を割りて三圖の如く折り込を平にし表に返して、常の如く衿下・裾口を絎けつく。

四、仕上げ。 大幅七十六糎許りの綿ネルまたはモスリンの布を敷き、その上より火熨斗またはアイロンをかく。

二　毛織單衣の縫ひ方要所説明

毛織單衣も、大體木綿物に同じ。

一　地直し。

(イ) 毛織の特徴として、濕氣に遇へば多少收縮す。故に、まづ布地の兩端を輪に縫ひ合せ、數時間水または微溫湯に浸しおき、取り上げて竿にかけ、時々上下に廻しながら陰乾とす。

(ロ) 生乾きの内に、烙熨または火熨斗にて伸縮を平にし、然る後裁ち方に移る。

【問】木綿物との差を述べよ。

(ハ) 前の手數を省き、たゞ全體に霧を吹き乾かして後、裁つこともあり。モスリンの如き地薄のものは、普通この方法による。

二　標附け方。 袖は、内袖を約半糎引き二つに折り、兩袖を重ね標をつく。標附けにはチーク等を用ひ絲標をなす。

三　縫ひ方。

(一) 順序

㊀ 袖　㊁ 脊縫　㊂ 肩當・揚・居敷當
㊃ 脇縫　㊄ 衽附　㊅ 衿下絎及び裾絎
㊆ 衿附　㊇ 衿絎　㊈ 袖附

(二) 仕立て方

袖。 半返に縫ひ、折を内袖の方に返し、袖口を纏り縫に、袖下・口明下は、千鳥縫とす。

脊縫。 半返に縫ひ、烙鏝をかけて縫目を千鳥縫とす。

【問】一、纏り縫千鳥縫の仕方を練習せよ。二、毛織物の仕立て方にて特に絹布と異るところを述ぶべし。

肩當・揚・居敷當。 男物は脊縫のところ・揚の縫込・居敷當の兩側を、千鳥縫または纏り縫とす。但し、細かく絎けつくるも可なり。

脇縫。 半返に縫ひ、縫目を開きて烙鏝をかけ、縫込の兩端に千鳥縫をなす。

衽附。 衽をつけて躾をなし縫込に千鳥縫をなす。

衿下絎及び裾絎。 褄先を額縁とし、衿下及び裾絎の三つ折を纏り縫とす。

衿附及び衿絎。 木綿物と同じく、衿附・衿絎をなす。

袖附。 半返にて袖をつけ、縫目を開きて烙鏝をかけ、袖の縫込及び振・身八つ口を千鳥縫となす。

仕上げ。 裏より霧を吹き、アイロンをかけて仕上げをなし、後、本疊となす。

注意 (い)ネル・セル地等の地厚のものは、袖口・衿下・裾絎等を二つ折とし、すべて千鳥縫をなす。

(ろ)ネル・セル地等は、脇・衽・袖下・振等の縫込は、その端を折りて、千鳥縫または纏り縫をなす。

(は)モスリン類の地薄のものは、絹布の如くす。

【問】各種接ぎ方の用途を問ふ。

第二章　絹布・毛織の繕ひ方

一　接ぎ方

接ぎ方に、左の數種あり。針は繼針の細きものを用ひ、絲は共絲または解絲を用ふ。また生絲・菅絲等をも用ふ。

(一)片接。 針目を細かくなす外綿布に同じ。

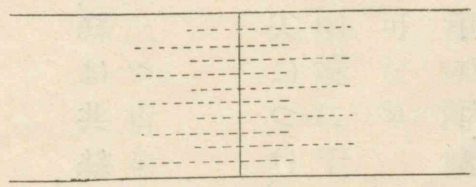
(二)割接。 縫目を割り、姫糊または續飯を薄くして針尖につけ、裏より接目に引き、表裏より烙鏝をかく。

(三)掛接。 綿布と同法なり。

縮緬の如き伸縮する地質は、幅約一糎の布または西の内・厚美

濃の如き紙を縦に二糎内外に裁ち切り、これを接代の折角に塡めて躾をなし、掛針にて張り、地絲を一本づゝ抄ひて接ぐ。終らば、紙を除き、割接のときの如くす。

㊃ **寄接**。地厚の毛織物に、多くこの仕方を用ふ。まづ、よく毛並・縞目等を見て、裁ち目を奇麗にして、突き合せになしおき、雙方共約一糎乃至一糎半織地を刺し、裁目のところには、交互に針をかけて接ぎ、裏より烙鏝をかけ、後刷毛にて毛並を正す。



寄せ接

二　繼ぎ方

繼ぎ方にも、左の數種あり。何れも大體は綿布の仕方に同じ。

㊀ **色紙繼・刺繼**。針目を三目落しに細くなす外は綿布に同じ。

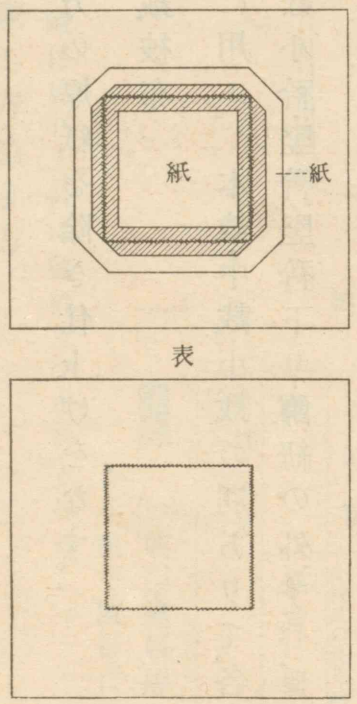
㊁ **孔繼**。

(イ) 損所より稍大なる厚紙を用ひ、損所の形に應じて、圓形または方形に切り拔く。

(ロ) 布の損所を同形に切り去り、厚紙を裏より當て、周圍を躾にて抑へおき、損所の周圍に半糎位の切込を入れて裏に折る。その端に少しく糊をつけて、烙鏝にて厚紙に貼る。

(ハ) 前に切り拔きたる厚紙を繼布の裏に貼り、切込を入れ、縞目・布目を正して、周圍をこの厚紙に貼りつく。

(ニ) 縞目・布目を合せて、繼布を損所に塡め込み、廻りを躾にて確と抑へおき、雙方の折角を、極めて細かに



穴繼の仕方

纏り縫となす。

(ホ) 繼ぎ合せ終らば、雙方の厚紙を除き、仕上げをなす。

第三章　本裁被布

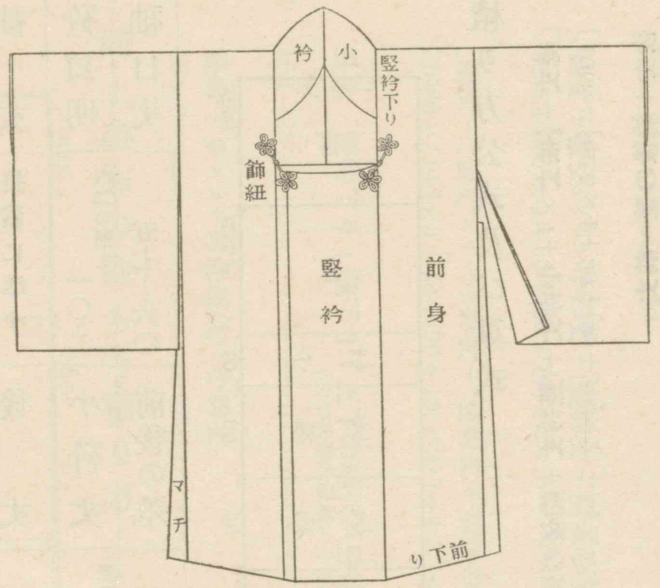
被布は、主として女子に用ふ。本裁・中裁・小裁の別ありて、各衿と綿入とあり。各部名稱は小衿・竪衿・竪衿下り・飾紐の外すべて羽織に同じ。

一　本裁女綿入被布

地質は表裏共大體羽織に同じ。

一　普通仕立て上げ寸法

袖丈	長着に同じ	六〇糎	袖口	同上	二三糎
袖幅	長着に・五増し	三三	身丈	着丈の8/10内外	一〇〇
前下り		三—四	衿肩明	長着より・五内外多く	九・二
袖附	羽織に同じ	二四—二五・五糎	身八つ口	長着より二内外少く	一〇
後幅		二八・五			



被布各部の名稱

肩幅		二九・五糎
前幅		一九
竪衿下り	袵下りに同じ 子供物は二多く	二三
竪衿幅	下袵幅に同じ 上合稜に同じ	一五 一三・五
襠幅	下 上	六・五 一・五
小衿丈	竪衿下りの凡そ二倍	四五—五〇
小衿幅	小衿丈の凡そ四分の一	一一内外
衩	長着に同じ	
小衿と竪衿との間		九・五内外

(ろ) 被布の布數は大體羽織に同じく、衿は竪衿及び小衿となる。

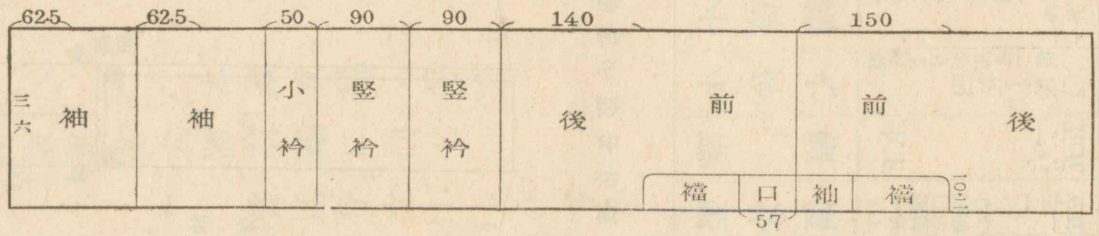
二　裁ち方・積り方

注意　(い) 前幅・襠幅等は羽織より稍や廣目になす。

一、並幅長さ十米六十糎の用布にて、本裁被布の裁ち方・積り方。

裁ち切り寸法

袖丈	長着に準ず糎	後丈	一四〇糎	前丈	一五〇糎（内外）
衿肩明	一〇・二（内二の糎し）	小衿丈	五〇（竪衿下りの二倍）	竪衿丈	九〇
袖口丈	五七―六〇	前後の差	一〇		



積り方公式及び算式

〔總丈－{袖丈×4＋小衿丈＋(竪衿丈＋前後の差)×2}〕÷4＝後丈

〔1060－{62.5×4＋50＋(90＋10)×2}〕÷4＝……140

後丈＋前後の差＝前丈

140＋10＝……150

(袖丈＋後丈)×4＋小衿丈＋(竪衿丈＋前後の差)×2＝總丈

(62.5＋140)×4＋50＋(90＋10)×2＝……1060

〔總丈－{後丈×4＋小衿丈＋(竪衿丈＋前後の差)×2}〕÷4＝袖丈

〔1060－{140×4＋50＋(90＋10)×2}〕÷4＝……62.5

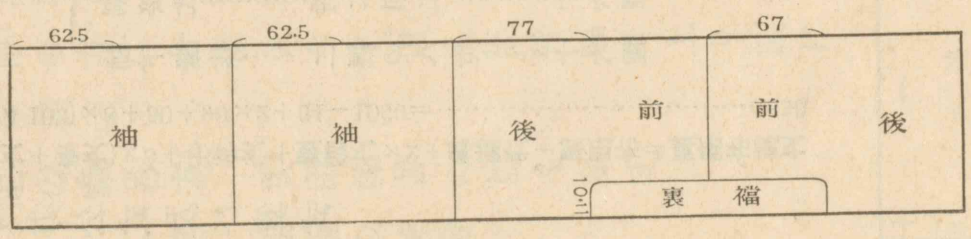
身丈（上り）－竪衿下り＋前下り＋上下の縫代＝竪衿丈
（三つ衿縫代繰越の分を含む）

103－23＋4＋6＝……90

竪衿下り×2＋衿先縫代＝小衿丈

23×2＋4＝……50

二、同上裏布の裁ち方・積り方。



【問】胴裏總丈を知りて胴裏後丈を算出せよ。

積り方公式及び算式

(袖丈＋身丈)×8＋小衿丈＋竪衿丈×2＋總縫代－表用布＝裏用布總丈

(60＋103)×8＋50＋90×2＋64－1060＝……538

總縫代
- 袖下縫代……二糎の八倍……十六糎
- 胴接代……前に同じ……十六糎
- 前下り縫代…四糎の四倍……十六糎
- 三つ衿縫代…一糎の八倍……八糎
- 繰越……一糎の八倍……八糎

合計六十四糎として計算す。

應用問題

(一)並幅十米八十三糎の用布にて、本裁被布を裁つ、袖丈六十二糎竪衿丈八十六糎とせば、後丈何程となるか。(前後の差、十四糎・小衿丈は、四十九糎とす。)

(二)並幅十米八十糎にて本裁被布を裁つに、身丈一米三糎・袖丈五十七糎の仕立て上げとせば、裏用布何程を用するか。また、その各部寸法如何。

(三)以上、二問題の裁ち方圖を示せ。且つ、それに各部の寸法を記入すべし。

三　標附け方

(一)　順序

一 袖　二 胴接　三 後身頃　四 前身頃

五 襠　六 竪衿　七 小衿

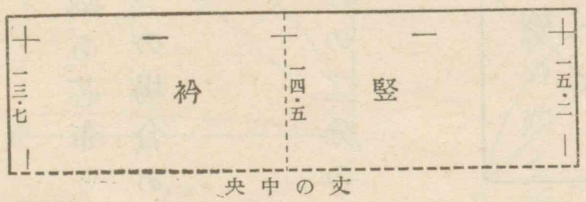
(二)　標附け方

袖・胴接・身頃・襠。 すべて、羽織に同じ。前身頃は、紐附の代りに、竪衿下りの標をつく。

竪衿。 中表に二枚合せ、更に縦二つ折とし、輪を手前、裾を右にして裾縫代(二糎)丈・上下幅・縫代の順に標し、附の方に合標をなす。但し竪衿幅は上り幅に二糎を加ふ。

小衿芯の裁ち方。 要所練習の如くなす。

四　要所の練習



竪衿標附け方

【問】一、本裁被布の表裏の裁ち方積り方を記せ。二、同上普通仕立て上げ寸法を問ふ。

練習用布（半幅……九十糎一枚　並幅……五十糎一枚（但し晒木綿・二枚に裁ち、芯布とす。）

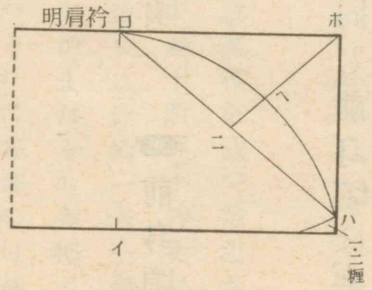
一　小衿芯の裁ち方。　小衿幅の廣狹により、次の二つの場合ありて多少裁ち方を異にす。

(イ)　身頃にて小衿を挾む場合。（小衿幅狹く八糎内外）

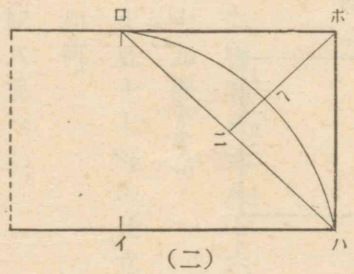
一枚芯。幅は仕立て上げに一糎・丈は仕立て上げの二分の一に一糎を加へ、二つに折りて左圖の如くおく。

(イ)(ロ)は衿肩明(ハ)は端から上に一糎二粍(ハ)から(イ)に向つて自然に丸みをつく。

次に、(ロ)(ハ)の中點(ニ)を標し、(ニ)(ホ)の三分の一に、(ヘ)を標す。（子供物は五分の二）(ロ)(ヘ)(ハ)の三



(一)



(二)

【問】一、子供物は何故に五分の二となすべきか。二、第一圖と第二圖の異るところを上げよ。

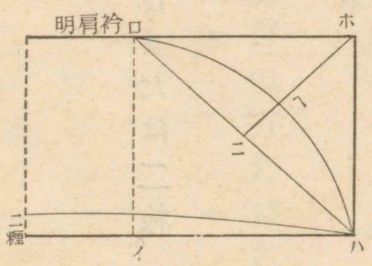
點を通して、程よく丸みをつけ、標通りこれを裁ち切る。二枚芯。前に裁ちたるを内芯として他の一枚の芯布に綴ち合せ、衿附の方は一糎他は一糎三粍内外に大きく周圍を裁ち切りて外芯とす。

小衿幅稍や狹く、(一)圖にて着工合惡しきときは、(二)圖の如く附の方を眞直に裁つべし。

(ロ)　小衿にて身頃を挾む場合。（小衿幅廣く十糎内外）

(三)圖の如く月形に裁つ。まづ、芯布を上り幅より二糎廣く裁ち、これを二つ折にし、折目の方、衿肩明の寸法まで眞直に、(イ)(ロ)を標し、衿肩明の間を二糎、それより(ハ)點に向つて月形に丸みをつく。その他は前法に同じ。

注意　小衿芯は、二枚を普通とすれども、ゴムフランネ



(三)

ル等は一枚を用ふ。

(ハ) **芯布。**

(一) 天竺金巾・晒木綿・ゴム芯・フランネル等一枚または二枚。

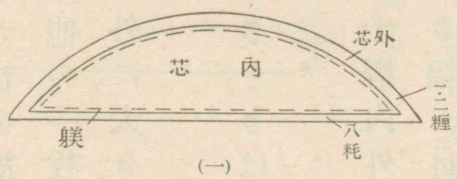
(二) 丈は、小衿丈と同樣。

(三) 幅は、仕立て上りより約一糎二粍廣くす。

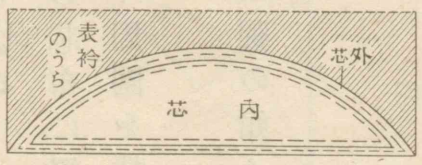
(二) 小衿の標附け方及び縫ひ方。

(イ) 標附け方。(二枚芯の場合)

まづ表衿の裏に外芯を下に、附の方を揃へて布をおき、外芯の廻りを綴ち、次に中表に裏衿の方を折り返し、待針にて留め内芯の六粍外廻りに標をなし、更に合標をつけおく。(二圖參照)



(一)

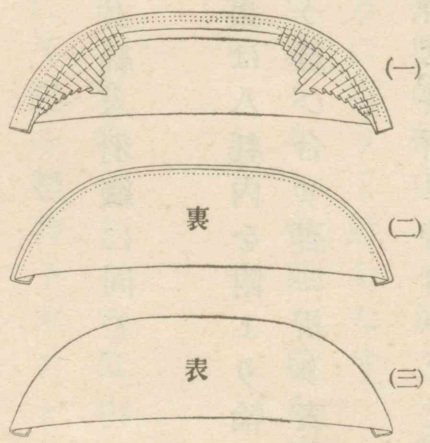


(二)

(ロ) 縫ひ方。表衿は、標通りに、裏衿は、標より八粍内側を合標によりて細かく待針をなし、芯の方を見て縫ひ合す。

折は裏に返し、丸みのところを縫ひ、平烙鏝をかけ、裏の方に折り、元祿袖の如く丸みを整へ(一圖參照)表の方に芯を入れて表に返し、隱躾をなし、裏を四粍引きて、一束に縫目の方だけに躾をなす。(二圖參照)

衿附の方は、表側を少し弛めにして綴ちおく。



出來上り

五　縫ひ方

(一) 順序

一 表裏の袖　二 胴接　三 脊縫　四 前下り
五 後前襠　六 竪衿附　七 身八つ口及び表裏の袖附
八 含め綿　九 綿入　〇 裾口の假綴　一 袖口絎
二 竪衿下り及び竪衿絎　三 小衿及び小衿附
四 縦綴　五 飾紐附

(二) 仕立て方

表・裏の袖。 綿入羽織に同じ。

胴接・脊縫・前下り及び後・前襠。 本裁女綿入羽織に同じ。

竪衿附。

(イ) 竪衿布の裾の縫込は表は標通り、裏は八粍内を附より輪の方へ自然に竪衿先を褄形になるやう縫ひ合せ、裏に折り、表を出し、縫目に隱躾をなす。

(ロ) 竪衿の幅を折りて前身頃の表に合せ、要所に待針をなし、竪衿

を縫ひつけ、(地質により芯を入る)、裏側は裾山より約二十糎上まで縫ひ、始・終を抄留にし、竪衿の方に折りて躾をなす。

身八つ口及び袖附。 身八つ口に四つ留をなし、後・前を縫ひ、裏に綿を當て縫目に綴ぢつく。

袖附。 女羽織に同じ。

含め綿及び綿入。 大體羽織に同じ。但し、竪衿のところは、山に薄く縁綿を入れ、その綿を前身頃の綿にて包み、竪衿下りのところは、布の裁目に沿ふて鈎なりに入る。

裾口の假綴及び袖口絎。

綿入れ終らば、裾に假綴をなし、袖口絎をなす。(方法、羽織に同じ)

竪衿下り及び竪衿絎。

(イ) 竪衿の表裏を綴ぢ合せ、竪衿下りにて表に綿を含めて躾をなし竪衿の表裏にて前身頃を挾み、四つ留をなす。

【問】一、小衿型の作り方を問ふ。二、小衿下の絎け方と衿下とは如何に異るか。

(ロ) 竪衿の上は、裏を稍や引目に縫ひ、裏の方に折を返し、竪衿の表に綿を含めて幅を折り襞をかけて後、絎けつく。

小衿及び小衿附。

(イ) 小衿にて身頃を挾む場合。

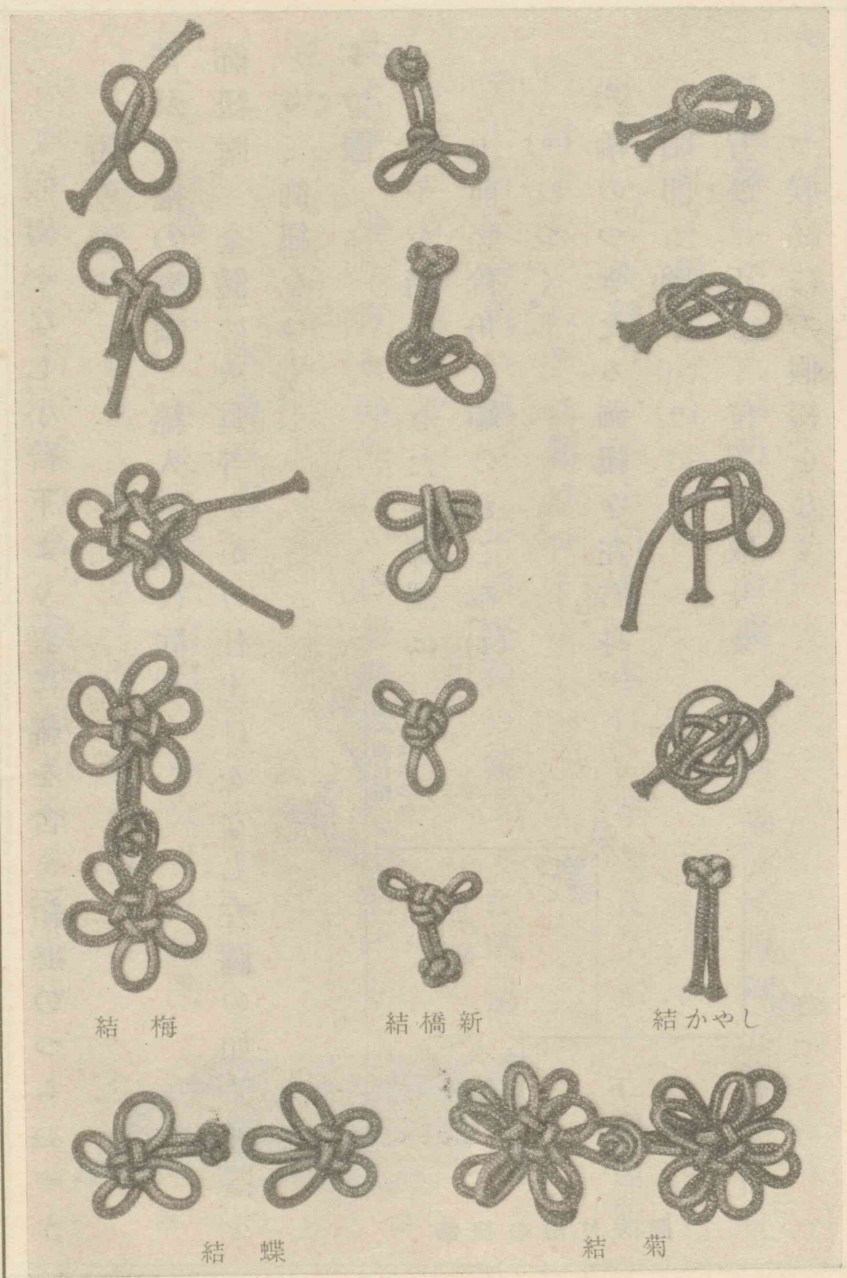
(1) まづ、要所練習のときの如くして小衿を作る。

(2) 身頃の小衿下を絎け、衿附の表裏を合せて綴ぢ、小衿表を衿肩廻にて弛め、裏身頃に細針または一針貫に縫ひつけ衿の方へ返し、裏衿の縫代を稍や深くして、表身頃に絎けつく。

(ロ) 身頃にて小衿を挾む場合。

(1) 小衿附のところは、綿を表身頃に綴ぢおき、小衿の表中央を裏身頃の脊に合せ、衿肩廻は稍や弛めに縫ひつけ、身頃の方へ折り返す。

(2) 身頃の折込に鋏を入れて落ちつけ、その上に表身頃を載せ



て假綴をなし、小衿下より(表に綿を含め)絎絲のつらぬやう絎け廻す。

脊及び襠の縱綴。 綿入羽織に同じ。

飾紐附。 全體に火熨斗をかけ、仕上げをなし、左圖の如く位置をとりて飾紐をつく。

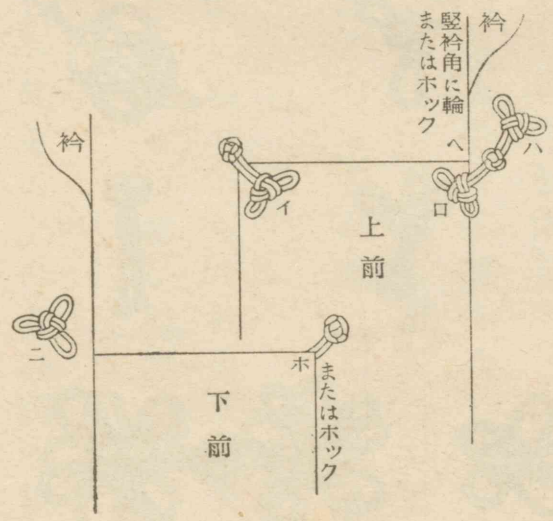
(イ) **位置。**

(1) しやか結のつきたる飾紐は上前竪衿角と端のところ、(イ)

(ロ) につく。

(2) 輪のつきたる飾紐を左右身頃、卽ち圖中(ハ)(ニ)に。

(3) 互ひに正しく位置を取りまづ躾絲にて假綴をなす。



飾紐の附け方圖

【問】一、被布の竪衿下りは何を標準とすべきか。二、小衿丈及び幅を定むるには如何にすべきか三、小衿裁ち方二種を説明せよ。

(ロ) 附け方。

(1) 縫絲二本にて、(結方により裏に三角または四角・五角形に針を出す)綴ぢつく。

(2) 次に、二本絲の一本を切り、一本にて花瓣及び芯を二・三箇所針の見えぬやう絎けつく。

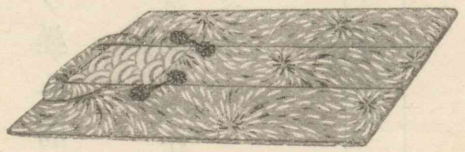
(3) 上前竪衿角の裏(ヘ)と、下前竪衿の端(ホ)とに、飾紐またはホックをつく。

仕上げ。 縫ひ方を終りたらば羽織の如く仕上げをなす。

(三) **疊み方**

(イ) まづ羽織の如くおき、下前を襠幅の中央より折り、上前も同じく折りて重ね、打ち返し脊を出す。

(ロ) 兩袖を附より折り重ね、次に脇縫目を脊まで折り



疊み上げの圖

返す。

(ハ) 左右共、かく折りて、後身丈を二つまたは三つに折り疊み、前頁圖の如く前身頃を上に出しおく。

注意　被布は子供服として多く用ひらる故に中裁または小裁を先きに仕立つるときは寸法割り出し方により本裁被布に準じて仕立つべし。

各種被布の寸法割り出し方

名稱＼種類	一つ身	三つ身	四つ身	本裁	割り出し方
前幅	いつぱい 糎	同 糎 上	同 糎 上	一九—二二 糎	
竪衿下り	一一	一三	一七	二三—二五	衽下り二增(中・小裁) 衽下りと同じ(本裁)
竪衿幅	下 一〇・五 上 九・五	下 一一・五 上 一〇・五	下 一三・五 上 一二・五	下 一五 上 一三・五	下 衽幅に同じ 上 凡そ一詰め(合褄幅と同じ)
小衿丈	二三	三〇	三四	四五—五〇	竪衿下りの凡そ二倍
小衿幅	八 内外	九・五	一〇 内外	一一 内外	小衿丈の凡そ三分の一(中・小裁) 四分の一(本裁)

其の他羽織に同じ。

衿被布標附け方・縫ひ方順序は大略綿入に同じ。

(1) 袖は着物に同じ。

(2) 身頃は胴接をなし、脊縫・前下り・竪衿下りを縫ひ、次に竪衿の表裏にて身頃を挾み、一針貫に四つ縫とす。

(3) 竪衿先を縫ひ、裏に返して縫込を綴ぢつくる。

(4) 次に前襠・後襠を入れ、袖を附け、次に綿入被布と同じ仕方にて小衿をつく。

第十四篇　應用材料

第一章　中裁被布

一　四つ身被布

一　普通仕立て上げ寸法

(い) 袂袖。

袖丈	五三—六八糎 長着と同じ	袖口	一七—一九糎 同上	袖附	一七・五—二〇糎 長着より・五内外多く
袖幅	二七・五—三〇・五 長着より・五内外廣く	身丈	八五 内外 羽織に準ず	身八つ口	八
前下り	二・五	衿肩明	六—七 内一・五廻し	後幅	いつぱい (二五)
前幅	いつぱい	竪衿下り	一七—一九	竪衿幅	上一詰む 下一三内外 衽幅に同じ
襠幅	上二 下六	小衿丈	三四 竪衿下りの凡そ二倍	小衿幅	一一 内外
小衿と竪衿との間	六・五	袂丸	—		

(ろ) 筒袖及び元祿袖。

袖丈	筒袖 二六—二八糎 元祿袖長着より一内外長く 三一—三五	袖口	一五—一七糎
		袖附	一七—一九糎

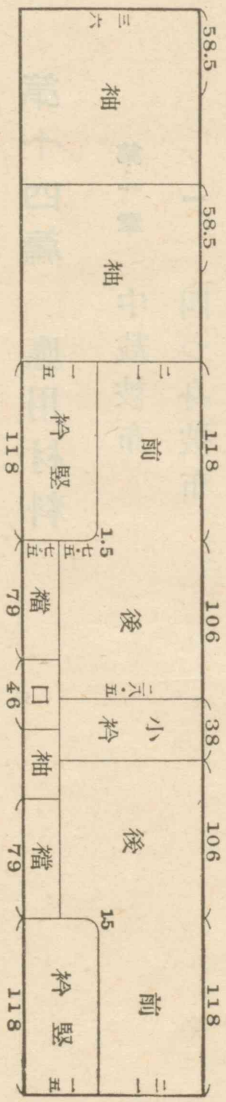
右寸法の外すべて袂袖に同じ。

二　裁ち方・積り方

一、並幅長さ七米二十糎の用布にて、四つ身被布の裁ち方・積り方。

裁ち切り寸法

袖丈	長着に準ず 五八・五糎	後丈	上り身丈八四内外 一〇六糎
衿肩明	内一・五の廻し 七・五	竪衿幅	一五
袖口丈	四六	袖口幅	七・五
		前丈	一一八糎 内外
		小衿丈	三八



積り方公式

竪衿下り×2＋縫代＝小衿丈

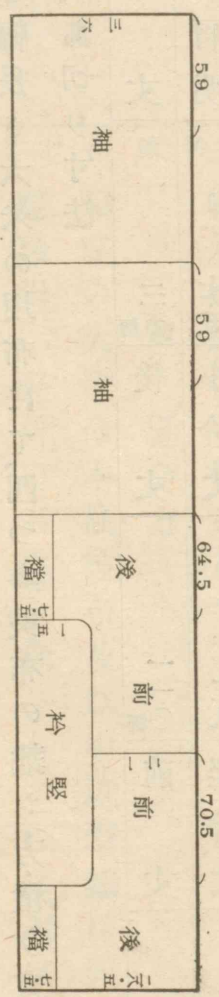
{總丈－(袖丈×4＋小衿丈＋前後の差×2)}÷4＝後丈

後丈＋前後の差＝前丈

(袖丈＋後丈)×4＋前後の差×2＋小衿丈＝總丈

注意　表は小衿丈だけ長く、裏は羽織に同じ。布幅狹きときは褄・衿の幅を減ず。

二、並幅長さ五米六糎の用布にて、同上裏布の裁ち方・積り方。



積り方公式及び算式

{總丈－(袖丈×4＋前後の差}÷4＝裏後丈

後丈＋(前後の差÷2)＝裏前丈

【問】四つ身被布元祿袖の裏地積り方を問ふ。

(袖丈＋身丈)×8＋小衿丈＋總縫代（羽織同樣）－表用布＝臺總丈
(57＋84)×8＋38＋60－720＝……506

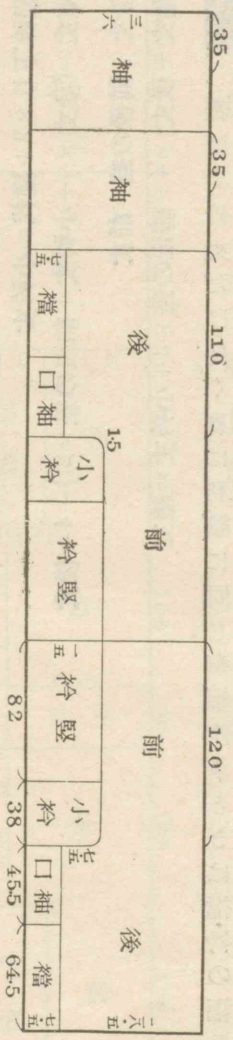
注意　總縫代見込は、四つ身羽織と同じく合計五十九糎(或は六十糎)とする。

三、並幅長さ六米の用布にて、四つ身被布の裁ち方・積り方。(元祿袖)

裁ち切り寸法

袖丈	三五糎	後丈	一一〇糎
衿肩明	七・五（内一・五の廻し）	小衿丈	前丈
竪衿幅	一五	三八	竪衿丈
			一二〇糎
			八二（内外）

積り方公式



【問】一、小裁被布の普通仕立て上げ寸法を問ふ。二、中裁被布表裏の裁ち方及び縫ひ方順序を問ふ。

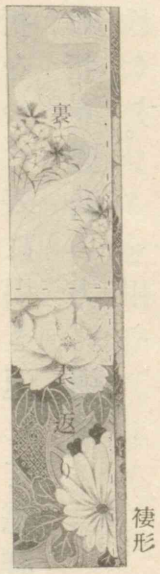
{總丈－(袖丈×4＋前後の差×2)}÷4＝後丈
後丈＋前後の差＝前丈
(袖丈＋後丈)×4＋前後の差×2＝總丈

三　標附け方

すべて、本裁被布に準ず。但し、竪衿の標をなすに、まづ裏布に接ぎて中表に二つに折り、上圖の如く丈幅及び縫代の標をなす。

四　縫ひ方

順序の大體は本裁被布及び中裁羽織に同じ。竪衿附。竪衿の表裏を縫ひ合すには、表は標通り、裏は標の八糎内を縫ひ合せ、竪衿先の三糎程上よ



裾形

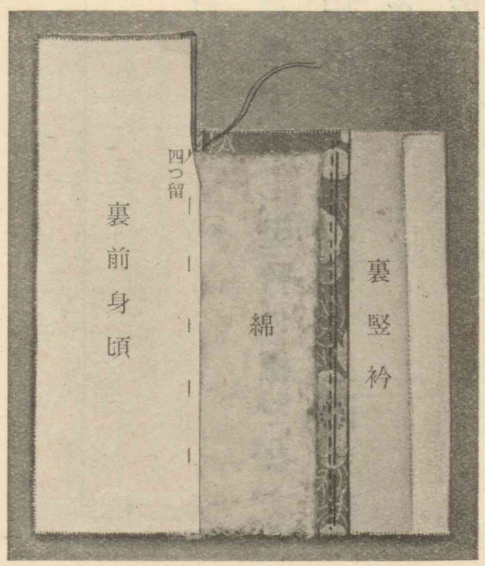
り竪衿先を褄形に縫ひ、裏の方へ折をつけ表に引き返して隱躾をなす。竪衿附を身頃に縫ひつけ、折を竪衿の方に返す。竪衿芯を入るゝときは、本裁に同じくす。

竪衿綴及び絎け方。

(イ) 羽織の如く綿を入れて後衿肩明及び竪衿下りを整へ(綿は表に含む)、竪衿下りの角を四つ留となす。縫目を綴ぢて、幅標の通りに折をつけ綿を整へ竪衿の上を縫ひ、折は裏に返して、竪衿の裏を細針に絎けつく。

小衿附。

(イ) まづ、本裁の如くして小衿を



竪衿綴ぢ方

【問】本裁被布の小衿附につきての注意を述べよ。

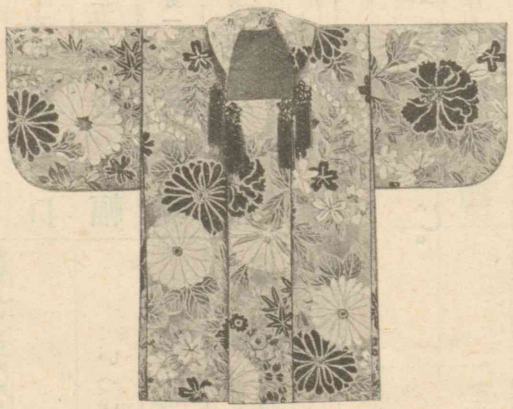
作る。

(ロ) 表の中央を裏身頃の脊縫に合せ、衿肩廻その他本裁被布の小衿附の如き注意にて待針をなす。

(ハ) 一針貫に縫ひ、綿を平になして、表身頃を當て、待針をなし、下前の竪衿止りより絎け始め、小衿の始め終りにて一針返し、上前の竪衿止りにて絎け終る。

(ニ) 他は羽織に同じ。

(ホ) 飾紐は本裁よりは派手にし、總(ふさ)のつきたるを用ひてよし。



仕立て上り圖

第二章　小裁被布

一　三つ身被布及び一つ身褙被布

一　普通仕立て上げ寸法

(い) 袂袖。

袖丈	五〇—五三糎（長着と同じ）	袖口	一四糎
袖幅	二三—二五・五（長着より・五内外廣く）	身丈	五七—六五
前下り	二	衿肩明	五—五・五（内一・二廻し）
前幅	いつぱい	竪衿下り	一三・五（一ッ身一一）
襠幅	上二 下五	小衿丈	二七（一ッ身二三）（竪衿下りの凡そ二倍）
小衿と竪衿との間	五・五（位）	袂丸	—

袖附	一六糎（長着より・五内外多く）		
身八つ口	八	後幅	いつぱい
竪衿幅	上一を詰む 下一一内外	小衿幅	九・五（小衿丈の凡そ⅓内外）

(ろ) 筒袖及び元祿袖。

袖丈を長着より八粍内外多くす。他は袂袖に同じ。

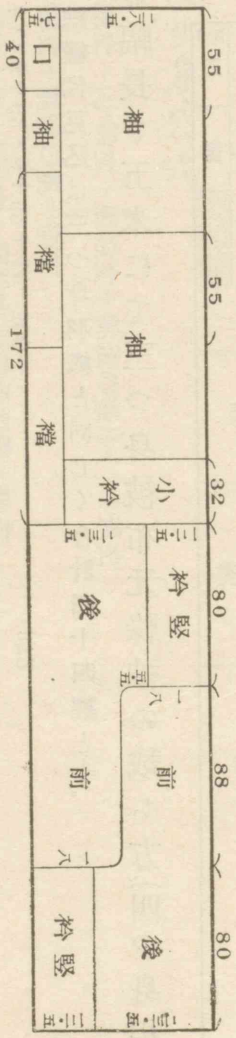
二　裁ち方・積り方

一、並幅長さ五米の用布にて、三つ身被布の裁ち方・積り方。(袂袖)

【問】五米三十糎の用布にて三つ身被布の裁ち方及び積り方を示せ。

裁ち切り寸法(但し片面物に應用せず)

袖丈	五五糎	衿肩明	内一・二の廻し 五・五糎
身丈	前後 八八 八〇	小衿丈	三二
		竪衿幅	一二・五糎



積り方公式

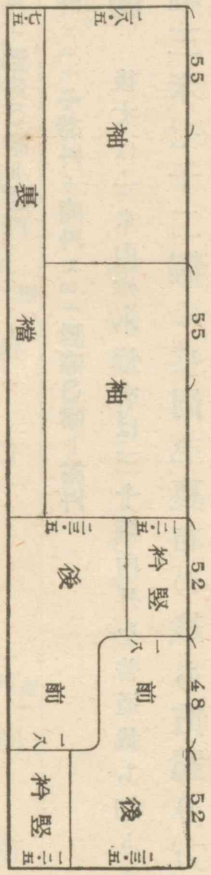
{總丈−(袖丈×4＋小衿丈＋前後の差)}÷3＝後丈

後丈＋前後の差＝前丈

袖丈×4＋小衿丈＋後丈×3＋前後の差＝總丈

注意　後丈は一米内外・小衿丈は三十糎内外を普通裁ち切りとす。

二、並幅三米七十二糎にて同上裏布の裁ち方・積り方。



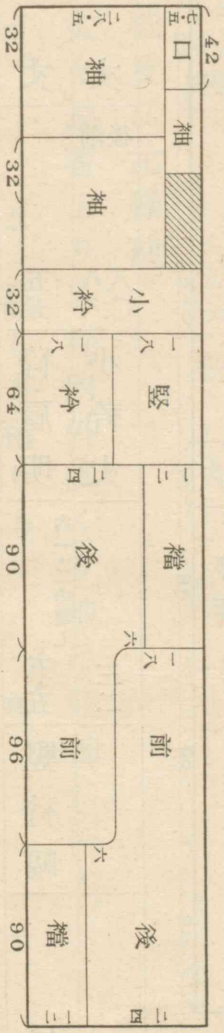
積り方公式及び算式

袖丈（上り）×8＋**身丈**（上り）×6＋**小衿丈**＋**總縫代**－**表用布＝裏總丈**

53×8＋62×6＋32＋44－500＝……372

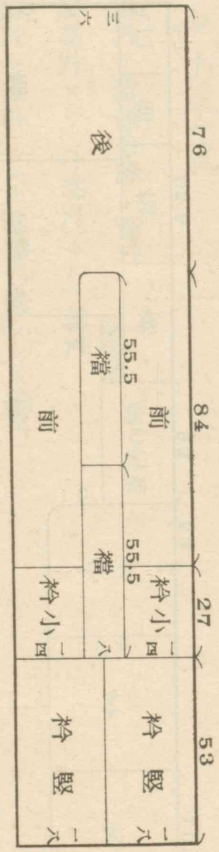
總縫代見込は三つ身羽織と同じく合計四十四糎とす。

三、並幅長さ五米にて、三つ身被布元祿袖の裁ち方（四つ身相當）



四、並幅長さ二米四十糎の布にて、一つ身褄被布の裁ち方・積り方。

【問】裏の裁ち方圖を描き各部寸法を記入せよ。



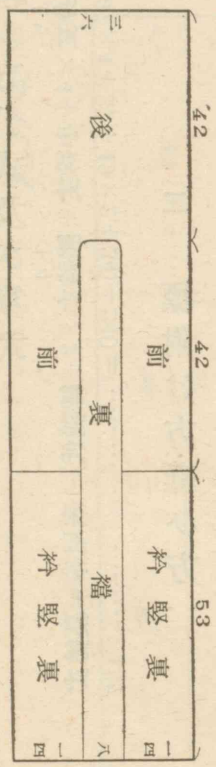
積り方公式

{總丈－(小衿丈＋堅衿丈＋前後の差)}÷2＝後丈

後丈＋前後の差＝前丈

後丈×2＋**小衿丈**＋**堅衿丈**＋**前後の差＝總丈**

五、並幅長さ一米三十七糎の用布にて同上裏布の裁ち方・積り方。



積り方公式及び算式

(身丈×4＋小衿丈＋堅衿丈×2＋總縫代)－表用布＝裏總丈

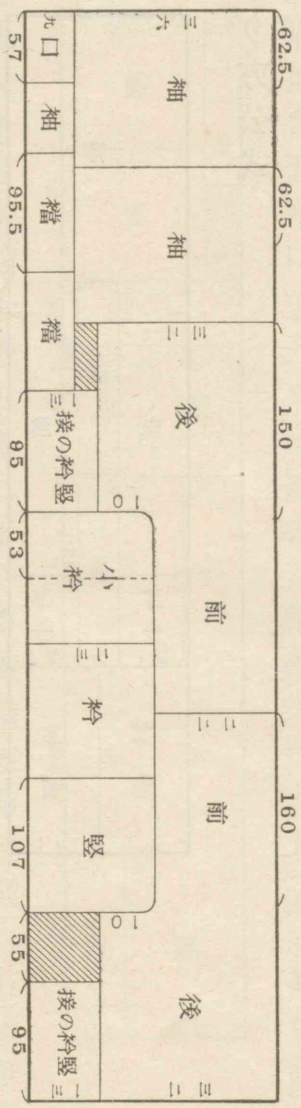
(57×4＋27＋49×2＋24)－240＝……137

三　標附け方・縫ひ方

標附け方縫ひ方は四つ身に準じ脇明は袴羽織に同じ。

第三章　中幅・大幅物各種被布裁ち方・積り方

一、幅四十五糎・長さ八米七十糎にて、本裁被布の裁ち方・積り方。



積り方公式

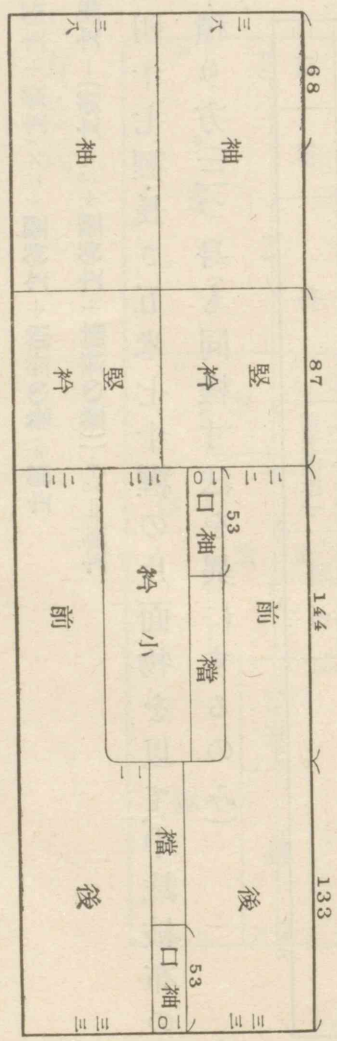
前丈－前後の差＝後丈

(堅衿丈×2＋小衿丈)÷2＝前丈

(袖丈＋後丈)×4＋前後の差×2＝總丈

{總丈－(後丈×4＋前後の差×2)}÷4＝袖丈

二、幅七十六糎・長さ五米の用布にて、本裁被布の裁ち方・積り方。



積り方公式

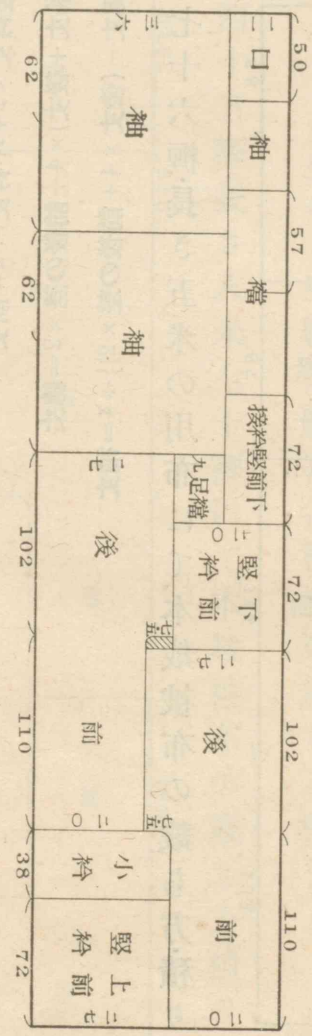
{總丈－(袖丈×2＋竪衿丈＋前後の差)}÷2＝後丈

後丈＋前後の差＝前丈

(袖丈＋後丈)×2＋竪衿丈＋前後の差＝總丈

{總丈－(後丈×2＋竪衿丈＋前後の差)}÷2＝袖丈

三、幅四十七糎・長さ五米七十糎の片面物を以て、中裁被布の裁ち方・積り方。(二つ身も同樣、寸法を異にするのみ)



積り方公式

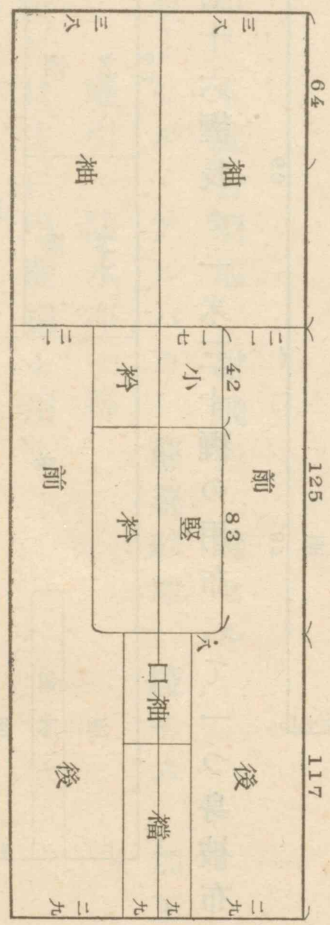
總丈－(袖丈×4＋前後の差×2)}÷3＝後丈

後丈＋前後の差＝前丈

(袖丈×4＋後丈×3)＋前後の差×2＝總丈

{總丈－(後丈×3＋前後の差×2)}÷4＝袖丈

四、幅七十六糎・長さ三米七十糎の用布にて、中裁被布の裁ち方。



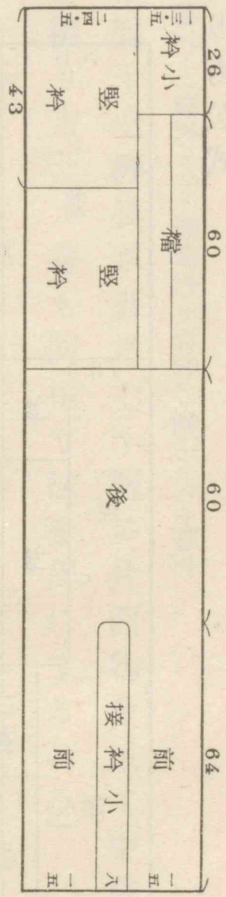
積り方公式

總丈－(袖丈×2＋前後の差)÷2＝後丈

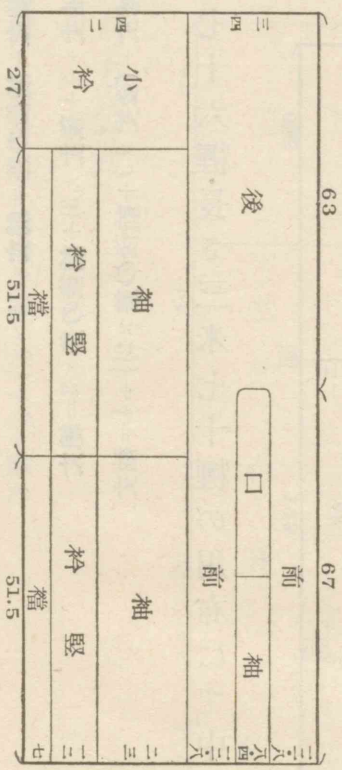
後丈＋前後の差＝前丈

袖丈×2＋後丈×2＋前後の差＝總丈

五、幅三十八糎・長さ一一米十糎の用布にて、一つ身褄被布の裁ち方。



六、幅七十六糎長さ一米三十糎の用布にて、一つ身被布の裁ち方。



第四章　本裁單合羽

種類。中裁・本裁、共に道行・被布・折衿仕立て等あり。單または袷に仕立つれども、單を普通とす。

地質。

綿布＝木綿合羽地　紺飛白　綿セル

毛布＝セル　アルパカ　薄羅紗地　綾モス　加工布

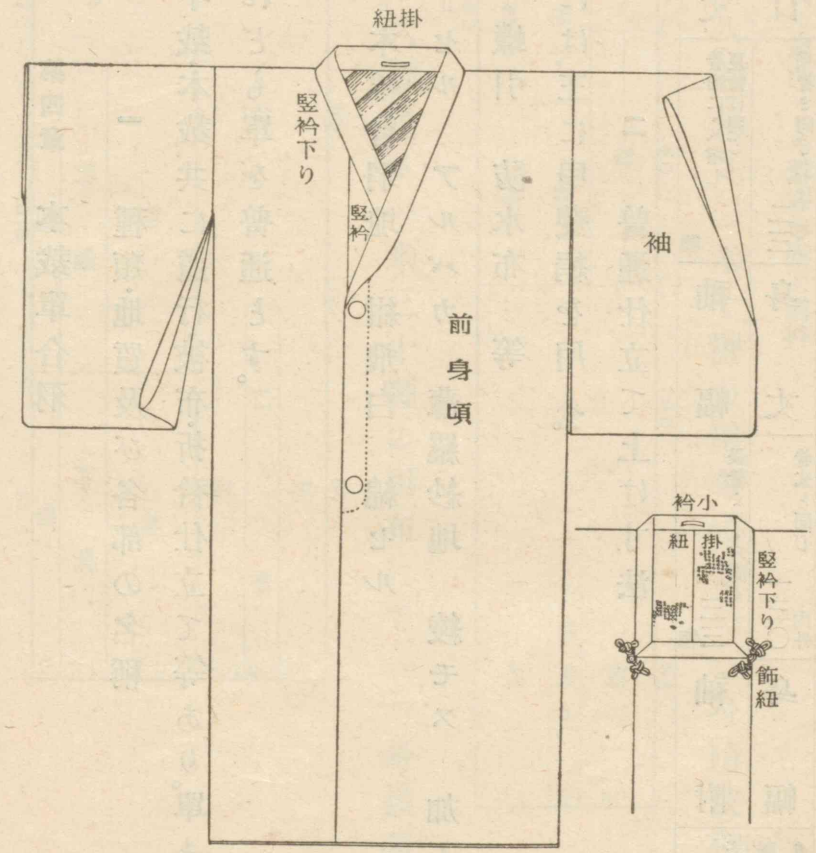
蠟引　防水布…等

肩滑には、主に甲斐絹を用ふ。

二　普通仕立て上げ寸法

袖丈	着物に・八増し 夏物は同じ　糎	袖幅	長着より・六廣く　三三糎
袖口	長着と同じ　二三	身丈	着丈と同じ　一三〇 内外
身幅		袖附	長着より一内外増し　二六糎
			裾口にて二廣く 身八つ口止りは抱幅と同じ

【問】一、合羽に用ふる地質を問ふ。
二、コートと合羽との相違を述べよ。



各部名稱

【問】合羽小衿の形につき知れるところを述べよ。

肩幅	三〇	竪衿下り	二五
身八つ口	九・五—一一	小衿丈	一〇六
裄	六三	繰越し	一—二 内外
		衽下りに二増	切上げ
		下上或は上下同じ	一四・五
		道行	六・五二
			二

注意　前幅は、竪衿幅と合せて、裾口にて三十八糎・抱幅にて三十四糎内外とす。寸法は、人々の體格に應じて、適宜取捨すべし。

三　裁ち方・積り方

用布。　表＝並幅物一反約十一米。

大幅物〈七十六糎幅……五米三十糎内外
　　一米三十六糎幅二米六十五糎内外〉

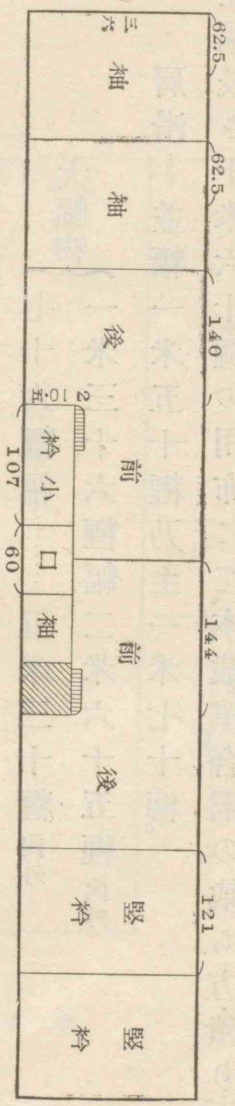
肩滑＝並幅一米五十糎乃至一米七十糎。

一、並幅長さ十米六十糎の用布にて、本裁單合羽の裁ち方・積り方。

裁ち切り寸法（道行仕立）

袖丈	六二・五糎	後身丈	一四〇糎
		前身丈	一四四糎

竪衿丈	一二一糎	袖口丈	六〇糎
衿肩明	一〇·五（内丸み二）	隱口布	三〇（残布よりとる）
		繰越	一
		小衿幅丈	一〇七糎 一〇·五



積り方公式及び算式

(衿肩明(上り)＋竪衿下り(上り)＋竪衿幅(上り))×2＋縫代＝小衿丈

(9·5＋25＋15)×2＋8＝……107

前丈－(竪衿下り＋繰越)＝竪衿丈

144－(21＋2)＝……121

{總丈－(袖丈×4＋繰越×6)＋竪衿下り×2}÷6＝後丈

{1060－(62·5×4＋2×6)＋21×2}÷6＝……140

後丈＋繰越×2＝前丈

【問】肩滑りの裁ち方圖を記せ。

140＋2×2＝……144

袖丈×4＋(後丈＋繰越)×6－竪衿下り×2＝總丈

62.5×4＋(140＋2)×6－21×2＝……1060

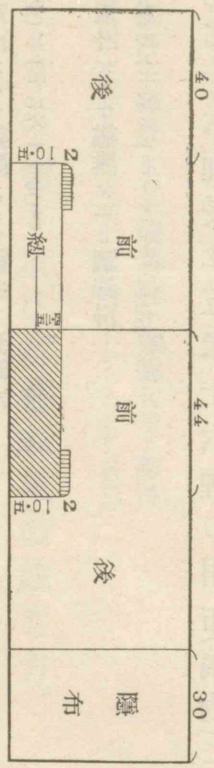
{總丈－(後丈＋繰越)×6＋竪衿下り×2}÷4＝袖丈

{1060－(140＋2)×6＋21×2}÷4＝……62·5

並幅長さ一米九十八糎の用布にて、肩滑の裁ち方・積り方。

裁ち切り寸法

後丈	四〇－五〇糎	前丈	後丈に繰越の二倍增
衿肩明	一〇五糎（内丸み二）		



表の殘布を利用せば、隱布の三十糎を省く。

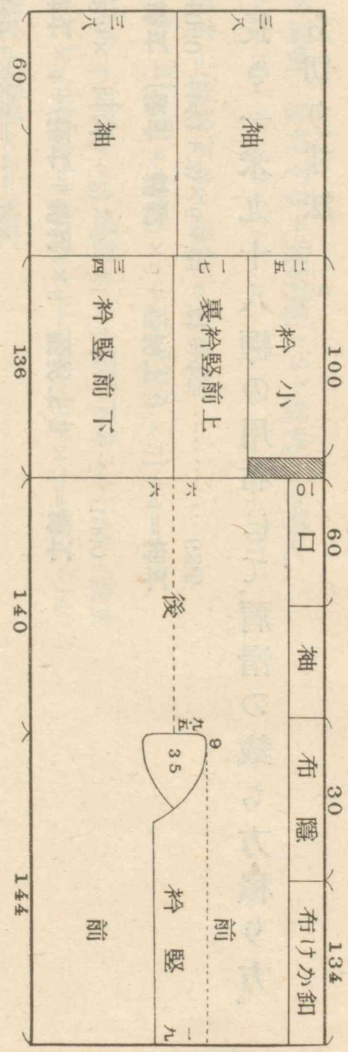
積り方公式及び算式

【問】隱布を省きしときの後丈總丈の出方公式如何

(1) {總丈－(隱布＋繰越×4)}÷4＝後丈
{198－(30＋2×4)}÷4＝……40
後丈×4＋繰越×4＋隱布＝肩滑丈
40×4＋2×4＋30＝……198

(2) 後丈×4＋繰越×4＝肩滑丈
40×4＋2×4＝……168

二、幅七十六糎・長さ五米十六糎の用布(縞物)にて折衿仕立て、合羽の裁ち方・積り方。



【問】一、七十六糎幅物にて普通寸法による合羽の裁ち方圖を記ふ。

積り方公式及び算式

(衿肩明＋竪衿下り＋縫代及び餘裕)×2＝小衿丈
(9.5＋34＋6.5)×2＝……100

前丈－(竪衿下り＋繰越＝竪衿丈
144－(34＋2)＝……108

{總丈－(袖丈×2＋竪衿丈＋繰越×2)}÷2＝後丈
{(516－(62×2＋108＋2×2)}÷2＝……140

後丈＋繰越×2＝前丈
140＋2×2＝……144

(袖丈＋後丈)×2＋竪衿丈＋繰越×2＝總丈
(62＋140)×2＋108＋2×2＝……516

竪衿下りの刳り及び折衿(絲瓜)の裁ち方。

(1) 衿肩明十一糎の内九糎は眞直ぐ二糎の丸みをつく。

(2) 竪衿下り(イ)のところは五糎位眞直ぐにして竪衿下り(ロ)まで

の中央にて凡そ一糎刳る。(一)圖

小衿丈を計るには竪衿下りの形に從つて計り、小衿の標(丸みに合せ四分の一と三分の一との間にて(二)圖の如く裁つ。

注意 (い)第一の裁ち方にても被布仕立てになし得べし。

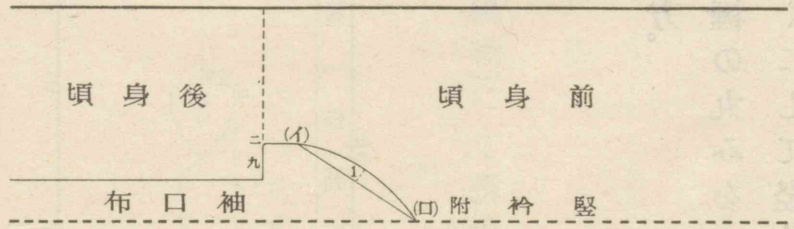
(ろ)用布無地のときは本裁女コートと同じ裁ち方によるを可とす。

四　標附け方

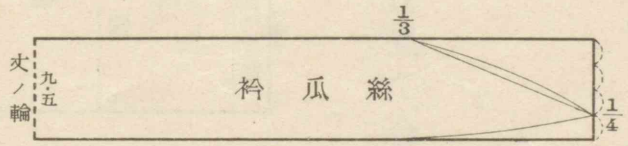
(一)　順序

一 袖　二 身頃　三 肩滑

四 竪衿　五 小衿



第一圖



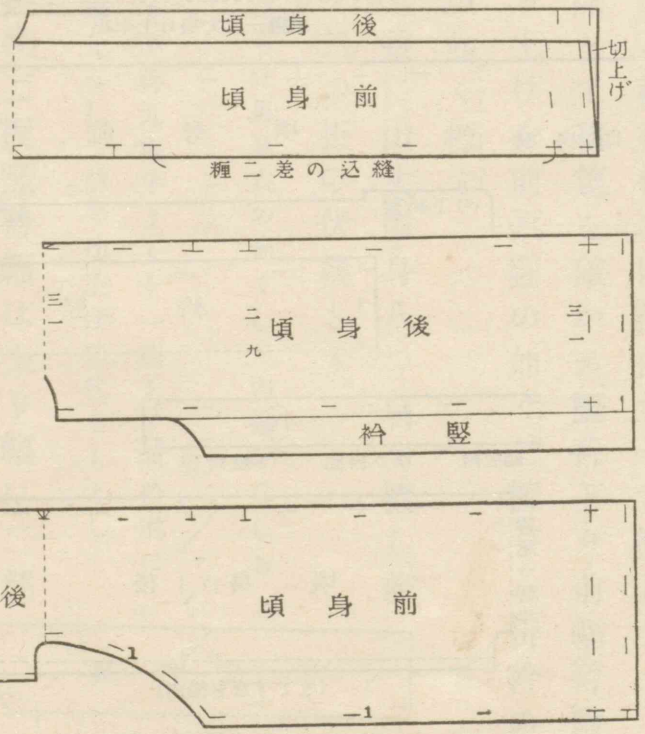
第二圖

(二)　附け方

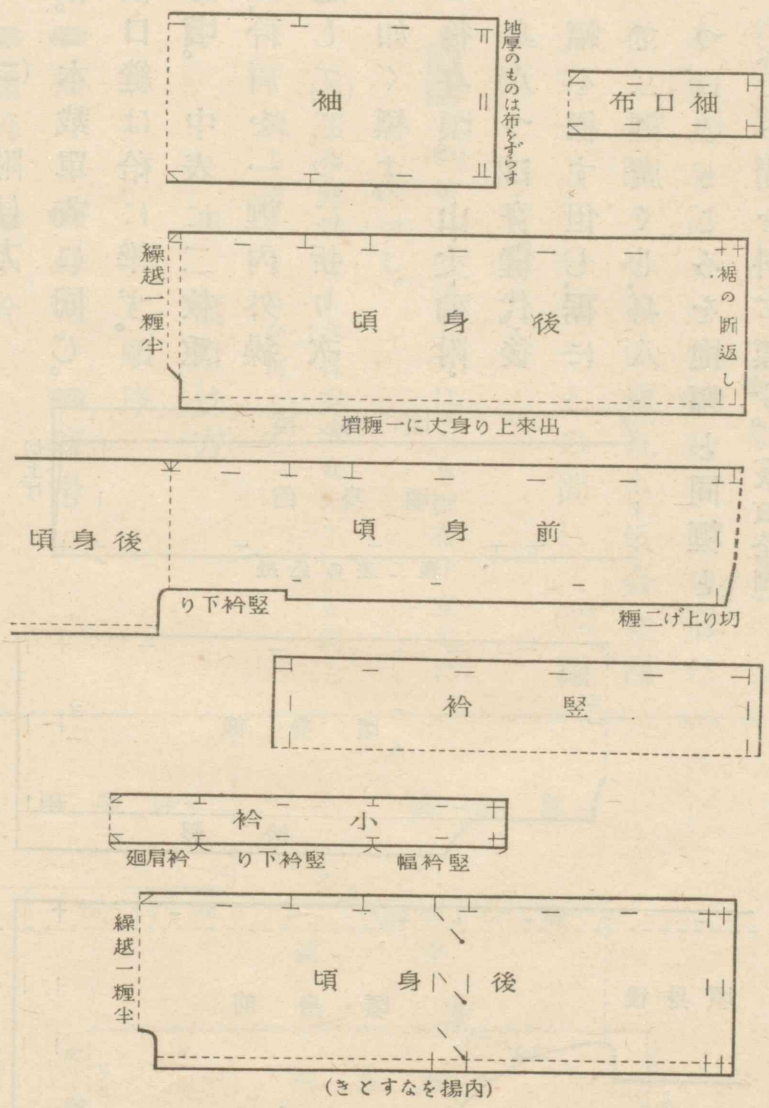
袖。 本裁單衣に同じ。袖口縫は袷に準ず。

身頃。 中表に二枚重ね、衿肩を一糎内外繰越して二つに折り、次の如く標す。

(イ)後身頃。　山・丈・袖附・身八つ口・脊縫代・後幅を標す。但し、裾にて二糎廣くし、身八つ口のところを抱幅と同糎とし、その間を斜に標す。(次頁全圖)



本裁單合羽標附け方



本裁單合羽(道行仕立)標附け方

【問】脇の縫込にて裾口と八つ口止りのところは如何になすか。

折衿仕立も同じ。(三圖(一)裾絎代は四糎内至十九糎とす。

(ロ)前身頃。後身頃を開きて移箆を確かめ、竪衿下り・前幅・衿附(八糎を標し、裾にて切り上げを前頁圖の如く二糎つく。折衿のときは一二九頁(三)圖の如く標す。

肩滑。表身頃に倣ひて、後に山・丈・附・身八つ口を標し、前に竪衿下りを標し、裾を二つ折の伏縫とす。

注意 (い)身を長く取りたらば、男單衣の如くして内揚をなしおくべし。

(ろ)揚の位置は脇明より下、約九糎半より十一糎とす。前衿附にて一糎後より深く揚をなして前の切上げに代るもよし。

竪衿。被布に同じ。裾縫代二糎・竪衿幅は上り幅に二糎を加へ、道行仕立は上下の幅を同糎として標す。折衿仕立は下圖の如く縫代一糎として標す。

竪衿(折衿仕立)標附け方

【問】竪衿の縫代と仕立て上り丈は如何に定むべきか。

小衿。

(イ) 被布仕立。幅狹きのみにて被布に同じ。(下圖(一))

(ロ) 道行仕立。

(1) 小衿角、撮み縫。中表に二つに折り、輪を左、附を向ふにして、山・丈・附・幅を標す。

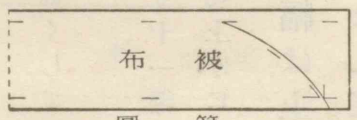
小衿丈の計り方

衿肩廻＋竪衿下り＋竪衿幅＋弛み＝小衿丈

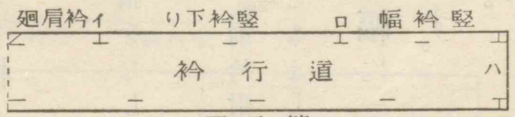
(2) 小衿角額縁。單コート要所練習の如くなすべし。(一四一頁—一四六頁)

(ハ) 折衿仕立(絲瓜衿)

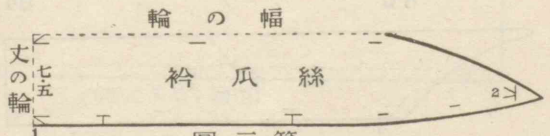
(1) 中表に(三)圖の如く布をおき山(1)衿肩廻・竪衿下り・弛み・斜の寸法を加へて小衿丈(2)を標す。



第一圖



第二圖



第三圖

小衿標附け方

(2) 衿先に丸みをつけ、所謂絲瓜形に小衿附代(一糎)を標す。衿附と衿先の丸みは前身頃小衿附の斜によく引合すべし。

五　縫ひ方

(一) 順序

一 袖　二 身頃　三 竪衿　四 脇縫　五 裾絎
六 小衿　七 袖附　八 紐附　九 飾紐

(二) 仕立て方

袖。 本裁單衣に同じ。但し、袖口は、袷の如く縫ひ合せ、口明元に四つ留をなす。

口明元より袖口布の端までは、返し針に四つ縫とす。袖下袋縫・袂丸を縫ひて袖口布の奥を絎けつく。

身頃。

(イ) 單衣の如くに脊縫をなし、肩滑をつく。

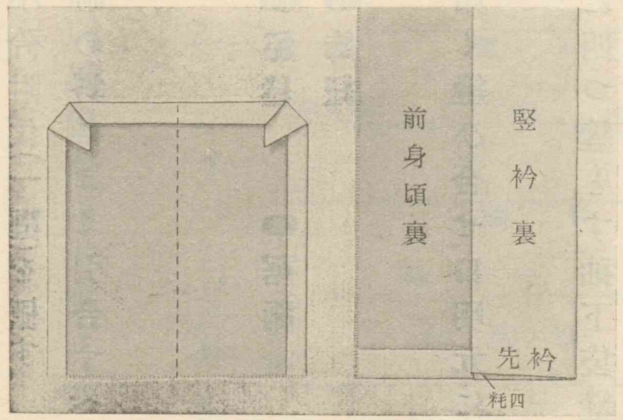
(ロ)道行仕立のときは裁目を揃へて假綴をなし、また前身頃の裾も三つ折にして假綴をなす。

(ハ)被布仕立になすときは竪衿下りのところは、肩滑の幅を少しく引きて縫ひ合せ、肩滑の方に折を返す。

竪衿。

(イ)前身頃竪衿附の縫代を八粍とし、表裏の竪衿にて挾み、袷羽織衿附の如く前身頃を疊み込み、丈及び合標を合せ裾より一針貫きに三つ縫とし、次に衿先を縫ふ。

(ロ)竪衿先は、表を眞直に、裏は附の方にて約半糎引き上げ、(二圖)竪衿の折山より斜に縫ひ、裏の方へ折り、縫込を竪衿附の縫代に綴ぢつけ、引き返し折を正す。



(一)竪衿先の仕方　(二)竪衿上の折り方

(ハ)竪衿のつけ止りに少しく鋏を入れ、竪衿上の縫代を、三角に折り込む。(前頁圖(二))

(ニ)竪衿の上を小針に絎く。

(ホ)道行衿・絲瓜衿共に、竪衿上は、躾にて抑へおく。

脇縫・裾絎。　單衣に同じ。

注意　裾廻布をつくるときは、裾廻布と身頃とを中表に表を稍や弛めに縫ひ合せ、折は裏に返し、躾をなし、裾廻布の奥を絎けつく。

小衿。

(イ)道行仕立。小衿の幅を折り、合標を合せ、脊・衿肩明・竪衿下りの角等に待針をなす。

下前の竪衿端よりつけ始め、竪衿下りのところにて抄留をな

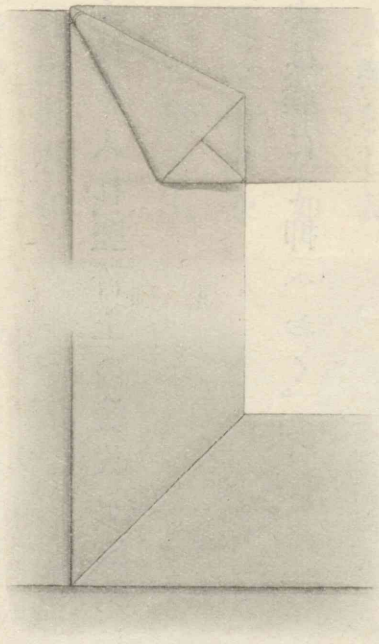
し、上前の竪衿端まで一針貫とす。折は、小衿の方に返し、衿先を縫ひて綴ぢつけ、引き返して細針に衿を絎けつく。脊のところに掛紐をつく。

(ロ) 折衿仕立(絲瓜衿)　被布仕立の小衿附け方に準ず。

(ハ) 被布仕立。表の方に芯を入れて、小衿を縫ひ、小衿の表を身頃の表に合せて、衿肩廻を稍や弛めにして一針貫に縫ひつけ、小衿の方に折を返し、身頃の裏に絎けつく。

小衿角の撮み縫。

兩竪衿角のところは、小衿を三角に撮みて返し縫とし下圖の如く三角を開き、烙鏝にて強く抑へ、竪衿の

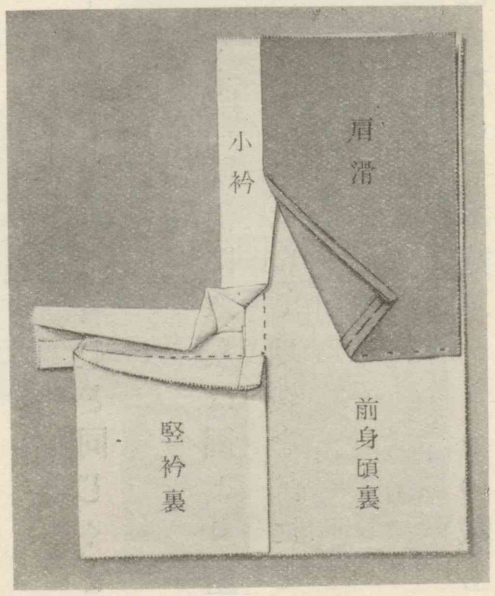


小衿角撮み縫出來上り圖(裏・表)

裏にて細かに纏りつく。

小衿の裏は肩滑布を上にして稍張り目に細く絎けつくるもよろし。

注意　竪衿下り小衿角の額縁縫・隱し附は單コートの如くす。竪衿附の角は眞直になるやう特に注意すべし。



小衿額縁縫內部の圖

袖附。　單衣と同じく左右の袖をつけ、振及び身八つ口を絎け、肩滑を袖附縫目より半糎引きて絎けつく。

紐附及び飾紐。

(イ) まづ、仕上げをなし、左脇裏の縫目及び、右竪衿裏の端にて、竪衿丈の中央より二糎上に幅約一糎丈三十糎位の絎紐をつく。

【問】被布の疊み方を述べ且實習せよ。

(ロ)小衿及び竪衿前に飾紐をつく。

(ハ)外紐は同じ高さにて、上前竪衿にしやか結を、下前身幅にて竪衿附より約五糎半入りたる位置に輪をつく。仕上げ、疊み方、被布に同じ。

第五章　本裁單コート

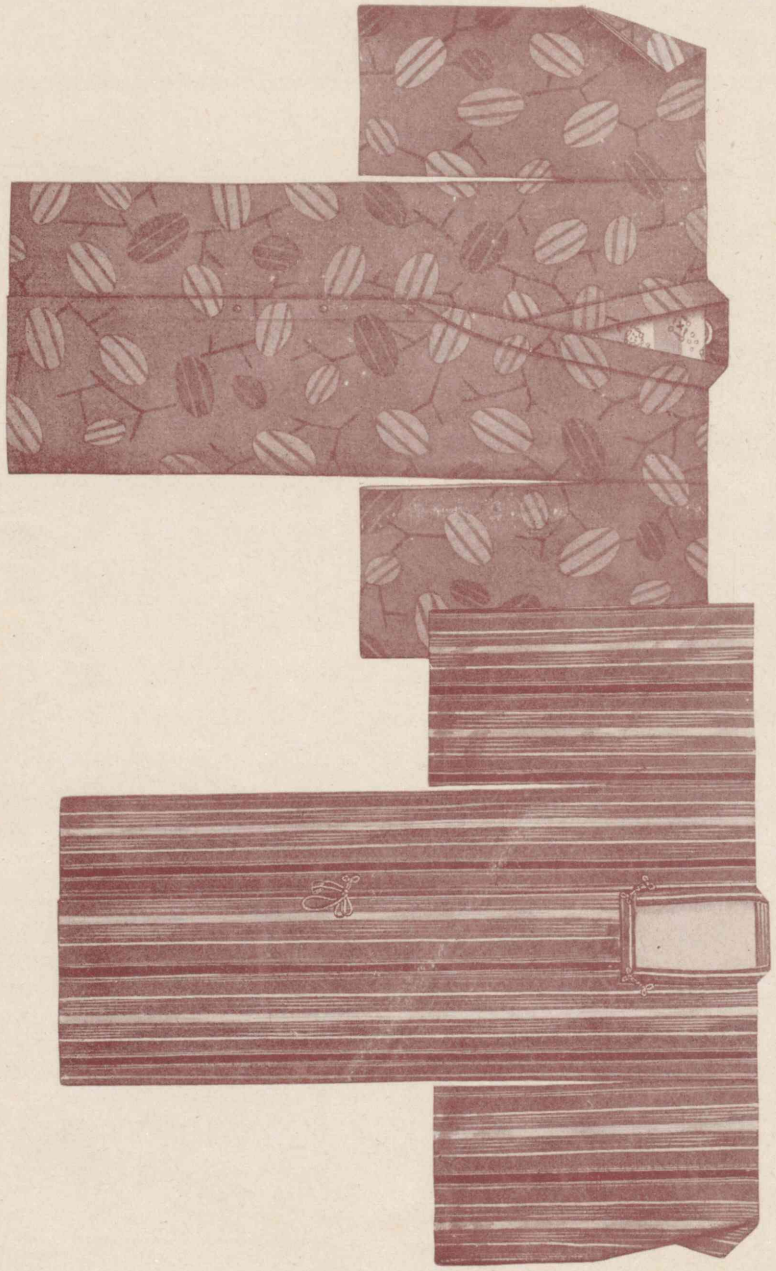
仕立て上げ寸法は、單合羽に準ず。但し身丈は着丈と同じく、または約三糎短くす。

合羽は防濕を主とすれども、コートは防濕・防寒用は固より塵除けとして外出のときに用ふ故に合羽とは自ら地質を異にせり。

一　裁ち方・積り方

大體單合羽に同じ。今廣幅物の裁ち方を次に擧ぐ。

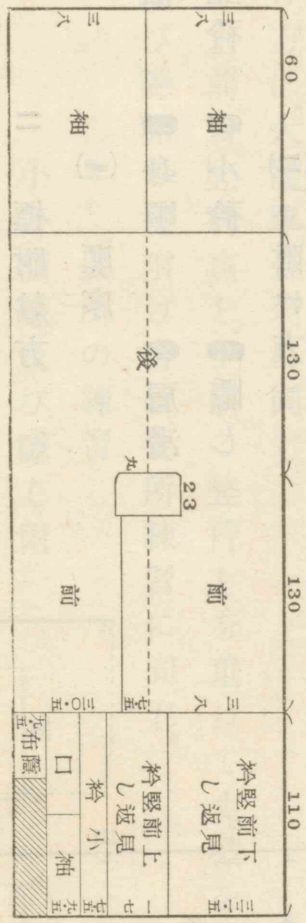
一、幅七十六糎長さ四米九十糎の布にて、本裁單コートの裁ち方。



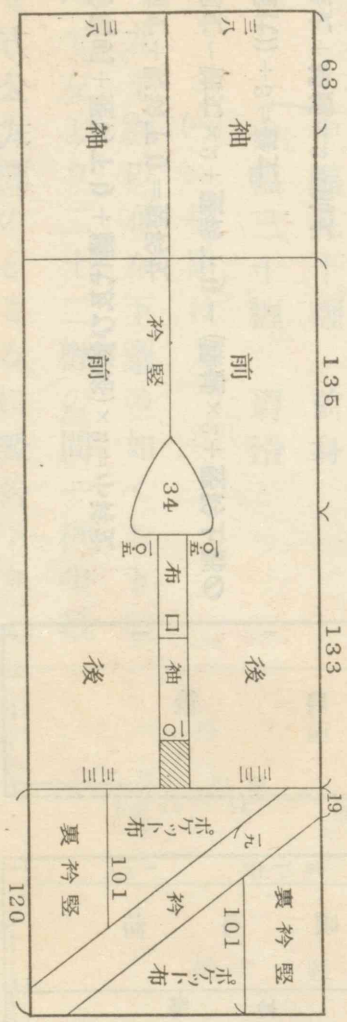
本裁　女　單　羽合（改行道）　同（杓瓜絣）

（改現裁卷三、一三八―一三九）　5

【問】幅七十五糎長さ五米二糎にて本裁コートの裁ち方・積り方及びその裁ち方圖・裁ち切り寸法を記入せよ。



二、幅七十六糎長さ五米十二糎の用布(無地)にて本裁女コート絲瓜衿の裁ち方・積り方。



積り方公式

(衿肩明＋竪衿下り＋縫代及び餘裕)×2＝小衿丈

前丈－竪衿下り＝竪衿丈

{總丈－袖丈×2＋竪衿下り－(繰越×2＋竪衿上部の縫代)}÷3＝後丈

後丈＋繰越×2＝前丈

袖丈×2＋後丈×3－竪衿下り＋繰越×2＋竪衿上部縫代＝總丈

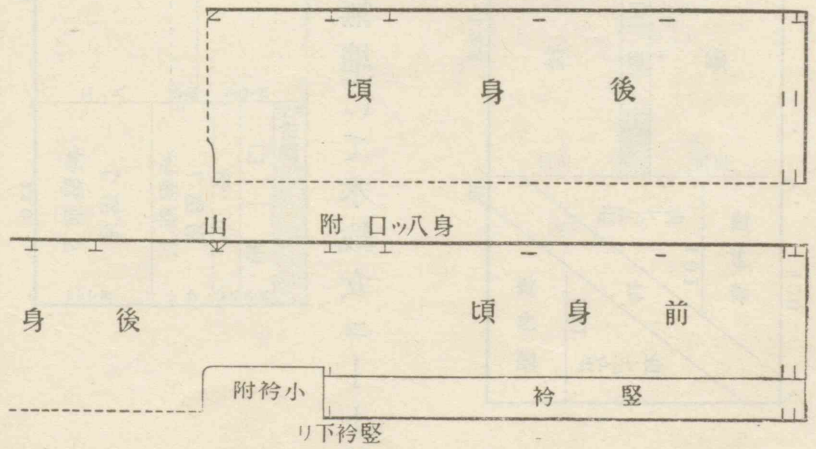
二　標附け方

(一)　順序

❶ 袖　❷ 身頃　❸ 肩滑

❹ 竪衿　❺ 小衿　❻ 隱し

(二)　附け方



本裁單長コート標附け方

標附け方は、大體單合羽に同じ。

竪衿。上前の竪衿裏と、下前の竪衿とを重ねて丈標をなす。

小衿及び隱布の標附け方は、要所練習に同じ。

三　要所の練習

小衿(額縁)及び隱し附

並幅一米　竪衿

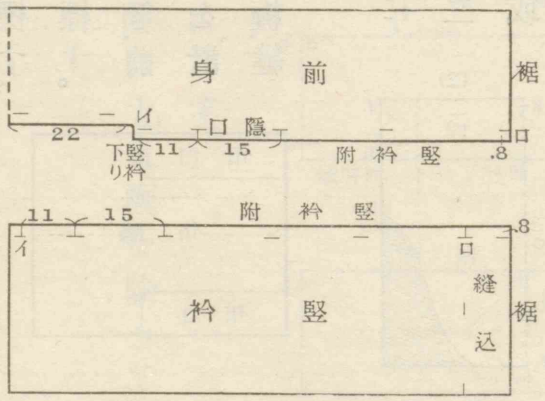
練習用布　幅二十八糎　丈三十糎　隱布　幅六十糎　丈二十糎(隱口布)

半幅九十糎　前身

半幅三十糎　肩滑

(一)　標附け方

前身。九十糎の布を下圖の如くおき、竪衿附にて、左より二十二糎の間一糎半裁ち落し、二十三糎のところに竪衿下り、(イ)



前身及び竪衿の標附け方

それより十一糎下りて、隱口の十五糎を標す。

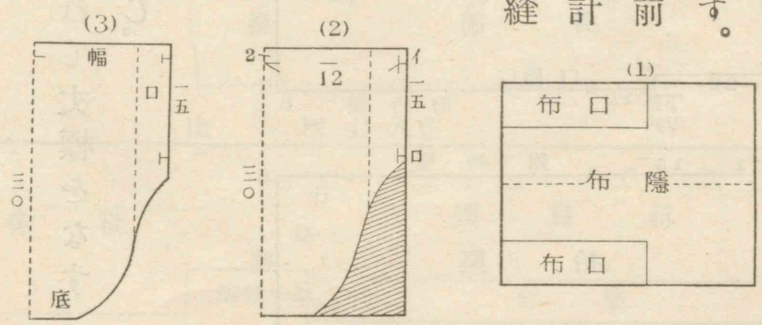
次に竪衿附及び小衿附の縫代を八粍に標す。

竪衿。　竪衿の裾を右、附を向ふにしておき、前身の竪衿下り(イ)より前丈(ロ)までの寸法を計りて竪衿丈を標し、附の方に隱口を十五糎、縫代を八粍と標す。(前頁圖)

隱し。　まづ、口布をつけ、中表に縫二つ折にし、上部(イ)を二糎と標し輪の方より幅十二糎、口明十五糎(イ)(ロ)を標し、底を丸く裁つ。(或は丸みをつけず)(下圖)

小衿。

(イ)中表に次頁(一)圖の如くおき衿肩廻・竪衿下りと竪衿幅を加へて小衿丈を標す。



隱口布附　　底を裁つ

【問】單合羽の縫ひ方順序を問ふ。

【問】竪衿丈の計り方を問ふ。

(ロ)竪衿幅(一)圖中(3))を標し、衿附代(4)を一糎内外として衿幅(5)を標す。

(ハ)(二)圖の如く、竪衿幅(3)より折り、輪のところ(ロ)より衿幅だけ入りて(ハ)を標し、(ロ)(ハ)(イ)(ハ)をつなぎて額緣の標をなす。小衿先を隅切りになすときは(2)にても同樣に額緣の標をなす。

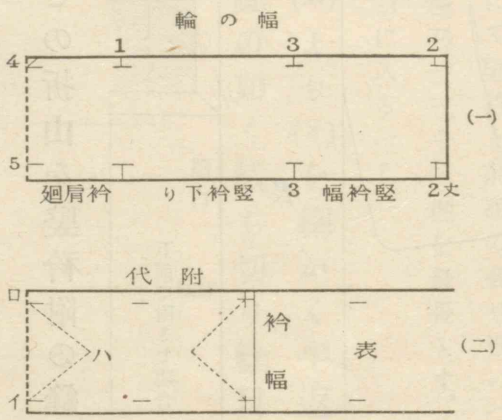
(ニ)衿肩明及び竪衿下りの合標をなす。

(ニ)縫ひ方

(イ)**竪衿。**　肩滑布の下端を二つ折の伏縫になす。

(ロ)竪衿と前身頃との標を合せ(裾口より隱口十五糎を除きて)半返に縫ひ、縫目を割りて烙鏝をかく。

(ハ)**隱し。**



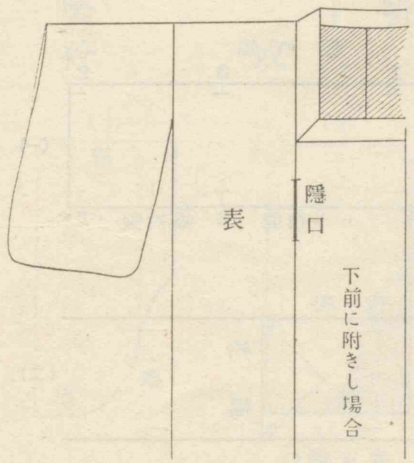
小衿標附け方

(1) 口明を中表に合せ、隱しの方は標通り、前身の方は口明標より半糎内に合せて一針貫または半返に縫ひ、折を隱しの方に返す。

(2) 口の一方を中表に竪衿の口明標より半糎内に合せて縫ひ、隱しの方に折を返す。

(3) 竪衿を半糎ふかせて烙鏝をかけ、この折山を、竪衿附の縫目に合せて上下をよく留め隱口の上の竪衿を縫ひつく。

(4) 二本絲にて隱しの底と上部を縫ひ、上部を竪衿裏に、返縫または千鳥縫にて綴ち、下部を竪衿附の縫込に綴ちつく。



注意 (い) 隱しは普通下前につくされど下前竪衿に縫目なきときは上前の竪衿裏にて竪衿と前布の合せ目につく。

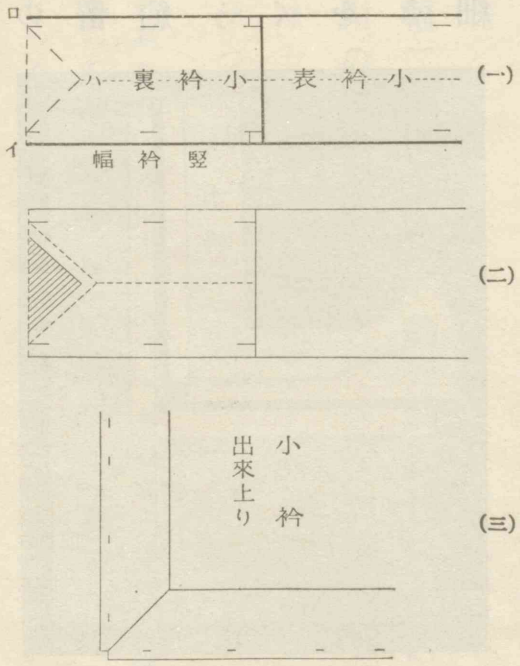
(ろ) 隱布丈は餘り深きときは不便なり。三十糎乃至三十四糎を最長とす。

(は) 小衿に芯を入るゝときは角を殘して左右に入るべし。

(二) **小衿**。(額縁仕立) 額縁の標(ロ)より(ハ)・(ハ)より(イ)を細かく半返に(ハ)を抄留とし、縫代六糎位殘して(二)圖の如く裁ち切り縫目を割りて裏より烙鏝をかけ、表に返す。

前身の竪衿下りに切り込を入る。

次頁(一)圖の如く、身頃の方を四角に正し、竪衿下りと竪衿上の幅とを折りて輕く烙鏝をあて、小

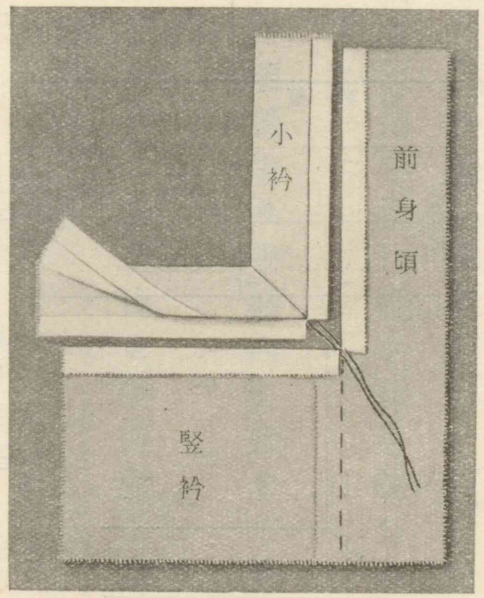


圖一

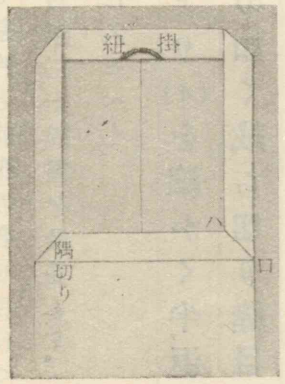
衿額縁の角と、竪衿下りの角とを抄ひて堅く四つ留をなし、絲の先を撚りて約八粍に切る。(下圖)

(ホ) 小衿と竪衿との角をよく突き合せ、縦横三糎内外を掛接とし、縫代の折を開き縫ひ殘りは小衿を見て細かく一針貫または半返にてつけ廻し縫ひ目を割り烙鏝をかく。

(ヘ) 肩滑と竪衿裏とをその縫込に綴ぢつく、小衿先は下圖(左)の如く、角または隅切りに縫ひ、裏を纏る。



(一)小衿額縁角四つ留圖



(二)仕立て上り圖

【問】千鳥縫または纏り縫となす箇所をあげよ。

四　縫ひ方

(一) 順序

單合羽に同じ。但し、隱しは、竪衿附のときになす。

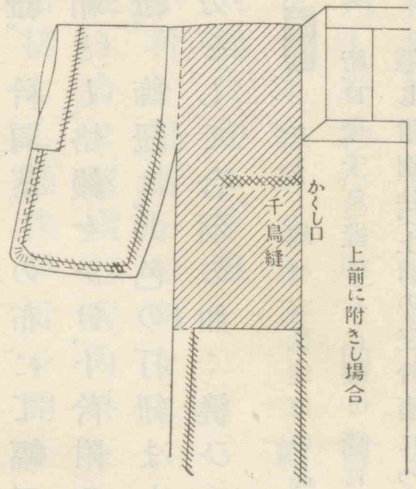
(二) 仕立て方

袖・身頃・竪衿附・袖附、共に單合羽に同じく、小衿附は、要所練習の如くして額縁縫となす。

掛紐。 衿肩落しの布にて幅二糎内外・長さ約六糎斜に裁ち、四つ折紵とし、烙鏝をかけ、小衿附の際、脊縫の左右に堅く縫ひつく。

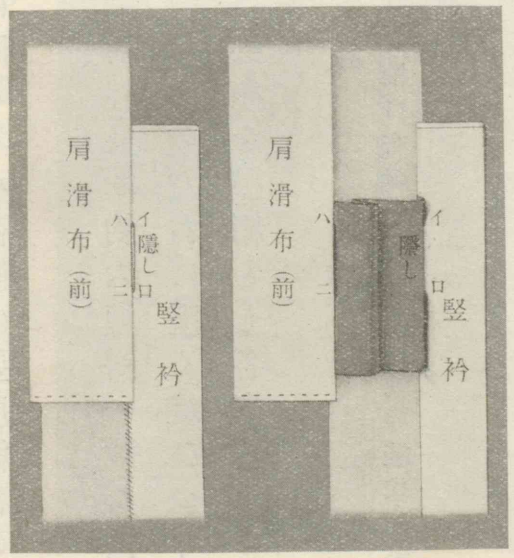
飾紐。 飾紐は、共色の打紐または共布を撚紵とし、各自好みの結び方をして合羽の如く縫ひつく。

注意 コート地は大抵地厚の品なれば袖口布の奥袖下その他の縫代・裾等を紵けず千鳥縫または纏り縫にて抑へおく。
隱し附別法(上前の竪衿裏につく)



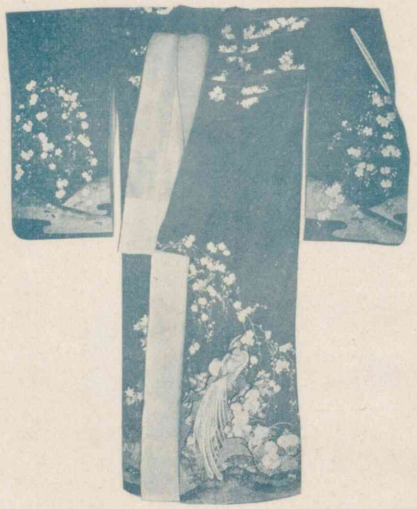
(イ)まづ隱しの口明標(イ)(ロ)と竪衿とを中表に合せて縫ひ、隱しの方に折りて烙鏝をかく。次に肩滑の前と一方の隱し口明(ハ)(ニ)(圖(一))とを合せて縫ひ、肩滑の方に折り、肩滑布を二粍ふかせて烙鏝をかけ、その縫目を(イ)(ロ)の縫目の二粍先に重ねて(圖(二))(イ)(ロ)のところを堅く四つ留をなす。

(ロ)次に二本絲にて隱しの底を袋縫とし、口明の上下の縫目を竪衿の縫目に細針に綴ぢつけ、隱しの上部を縫ひ、肩滑布を見て千鳥縫にて綴ぢつく。



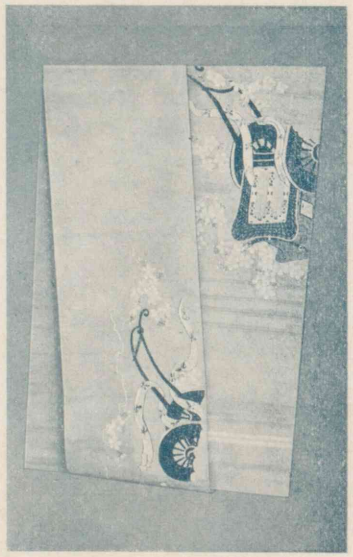
(一)　(二)

女單衣



女袷

帶



縫ひ合せ刺繍とミシンにて仕立てたるもの

【問】一、從來の裁縫と機械裁縫との長所を述べよ。
二、我國人の手指の働きに於て世界的に優れたる實例をあげよ。

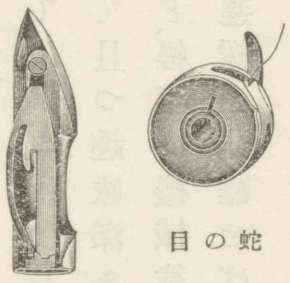
第十五篇　ミシン裁縫

第一章　概說

和服裁縫には、その獨特の長所あれば、經濟・習慣・生活の現狀に鑑みるも、未だ悉く機械裁縫によるを得ざれども、その製作の能率を高めんには、機械力即ちミシン裁縫によるを便宜とす。殊に、近年に至り、子供は殆ど洋裝をなす風に慣致し來りたればこの際に當りてミシンの使用法を練習し、毛織木綿織等の地質を以て、子供服或はシヤツ類を家庭に於て製作するは、經濟・便利にして且つ趣味深きものなり。

されど、輕卒に機械裁縫の利便を說きて、舊來の裁縫に於ける技術の遲緩を非難せば、勢ひ穩當を缺くに至るべし。

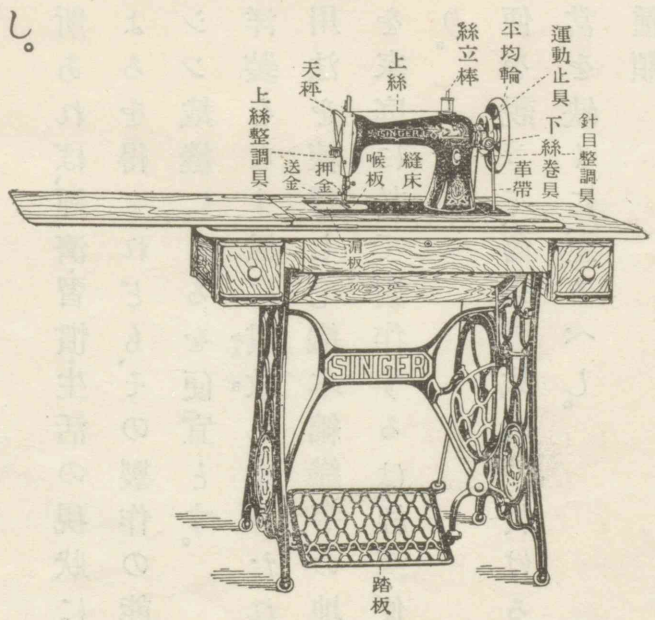
一　ミシンの種類



ミシンには、足踏と手廻との別あり。また、管・鞘の形狀によりて、蛇の目と丸船とに區別す。シンガー足踏ミシンによる各部の名稱は下圖の如し。

二　ミシン使用法

㊀足の踏み方。　平均輪、即ちはづみ車の外側にある螺旋を手前



各部の名稱

に廻して諸機械の運動を止めおき、踏板の中央に兩足を揃へて乘せ、右手を以て平均輪を手前の方に廻すべし。(向ふへ廻すべからず)然るときは、革帶輪は、平均輪によりて回轉し、踏板は上下に運動す。この運動に連れて、兩足を同時に爪先と踵にて、交る〳〵板を押し、はづみ車の逆轉せざるやう足踏の調子を會得すべし。

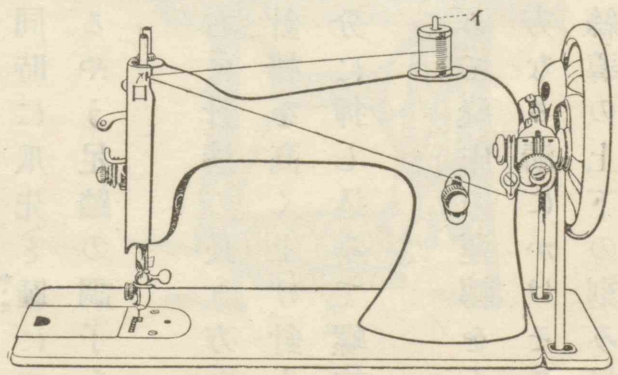
㊁縫針の挿し方。　縫針の上部平なる方を右に、針溝の長き方を左に向け、右手にて平均輪を靜に廻して針棒を高く上げ、針止の螺旋を緩め、芯棒の下端の溝に針を充分に挿し込みて螺旋を堅く締む。

㊂管に絲の卷き方。　運動止めの螺旋を弛めて縫床の運轉を止め、絲卷(イ)より絲口を引きて絲卷器の上方なる溝にかけ、その絲を管に卷きつけ、管挾に確と嵌め、絲を絲導の上下の刻み目

にかけ、溝ある小車を革帶に接觸せしめて廻轉すべし。かくて、充分に絲を卷き終らば、管挾より取り離しおく。

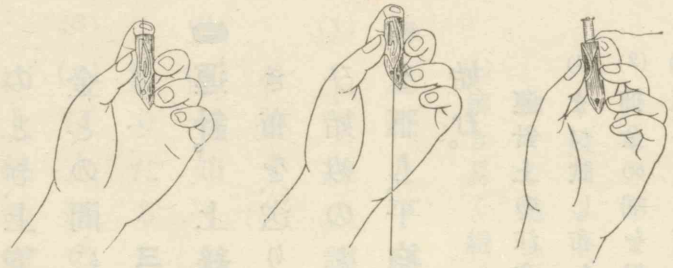
四 布の抑へ方。 運動止めの螺旋を堅く締めて、抑金の把手を上げ、布を抑金と、送り金との間に入れ、抑金の把手を下すべし。

五 上絲の掛け方。 絲立棒より絲端を取り、面板の手前上なる刻目にかけ、下方の平圓板の間に右上より挾み、下より廻して左方に引き上げ、平圓板の鈎に引きかけ、上方天秤の穴に通し、それより面板の鈎・針棒の鈎にかけ後、絲を左より針穴に通す。



管に絲の卷き方

六 梭(船)に管の入れ方及び下絲の引き出し方。



(一)　(二)　(三)

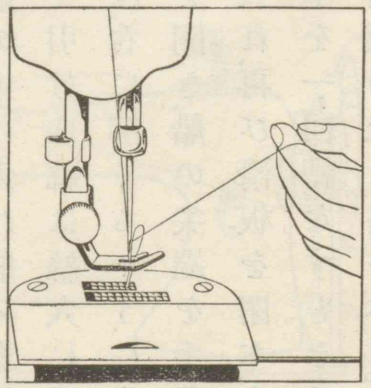
左手にて船の尖端を下に、バネを手前に持ち、右手にて管を縦に持ちて船の中に入れ、船の刻目に絲を入れて下方に強く引けば、絲は絲穴に通る。但し、絲端を左に引けば、右に解くるやうに入るべし。かくて、滑板(蓋板)を開き、船の尖端を手前に、バネを上向になして入れ、再び滑板を閉ち、上絲を左手に持ち、はづみ車を一回轉なすときは、下絲は、上絲に導かれて滑板の上に出づべし。そ

上絲のかけ方

のとき、上下絲の端を持ち送り金と抑金との間にて後方に出しおく。

三　縫ひ方

一運針。 上絲と下絲とを用意し、縫ふべき布を、送り金と抑金との間に入れ縫ひ始めのところに針を下し、次に抑金を下し、平均輪を右手にて廻して縫ひ始む。



下絲の引き出し方

運針上の注意。

(1) まづ、試し布を用ひて機械の調子を試み、然る後縫ひ始むべし。

(2) 抑金の端を目當になし、逆廻りせざるやう縫ふべし。

(3) 兩手にて布を正しく保持するのみにて妄りに押し、または引くべからず。

(4) 運針中に方向を轉ずる場合は一旦運轉を止め、布に針の挿されたるまゝ抑金を上げて徐かに布のみを回轉すべし。

(5) 縫ひ終りは針棒と天秤とが最高點にある場合に抑金を上げて布を七糎位向ふに引き、四糎餘り絲を殘して切る。

(6) 針目の大小は絲立棒の下部の螺旋を上下し、或は引出し、(小針)或は挿し込み(大針)などして適宜に定む。

下縫のとき、または、地厚の品は針目を荒く、飾ミシンまたは地薄の品は針目を細かく縫ふを普通とす

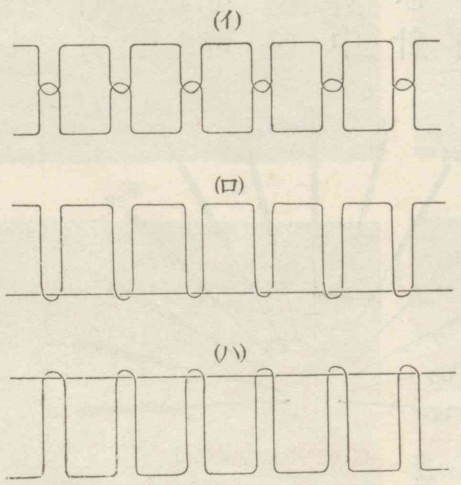
(7) 解き易く縫ふには上絲を弛むるか下絲に上絲より太目の絲を用ふべし。

二上絲と下絲との關係。

(1) 上・下絲の調子は常に平均に保つを要す。

(2) (イ)の如く上絲と下絲との平均に掛りたるときを正しとす。

(3) (ロ)は上絲の弛く下絲に掛りたれば上絲の螺旋を左に廻して締め



【問】一、ミシンの縫ひ方に於て起る故障は如何なる原因によるか。二、油を注ぐべき箇所を問ふ。

上絲を張るべし。

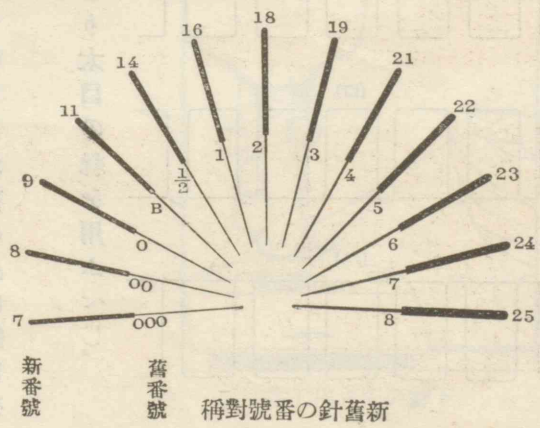
(4)(ハ)は前と反對なれば船のバネを右方に廻して締め、下絲の張りを強くす。(上絲より下絲の稍や張り加減なるを可とす)

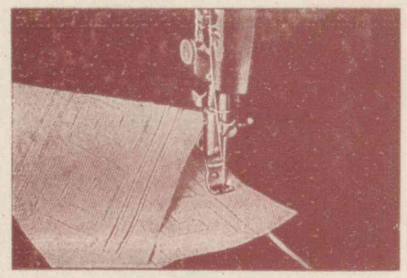
㊂ **縫ひ方に於て生じ易き故障。** 運針中に上絲及び下絲の切れ、針折れ、飛び針を生ずる等の故障起り易し、何れも機械・絲・針の扱ひ方の不注意に原因す。

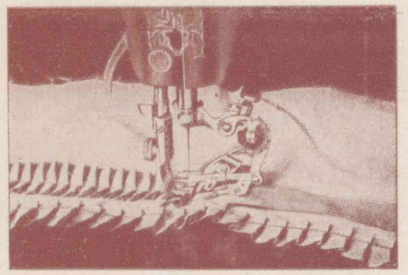
㊃ **縫絲と針と地質との關係。**

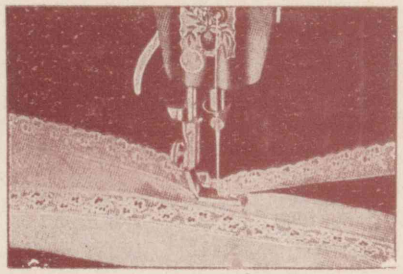
この三者の釣り合に注意するを要す。その關係大凡次の如し。

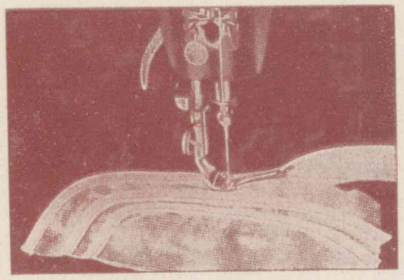
地質(布の種類)		
薄地類(毛織物)	キャラコ	金布
絹布類	瓦斯	ネル
	縮等	羅紗厚地
	セル	木綿
	羅紗薄地	麻
	縮類	

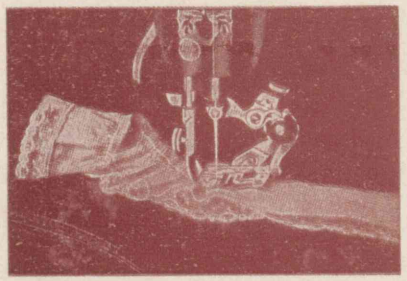


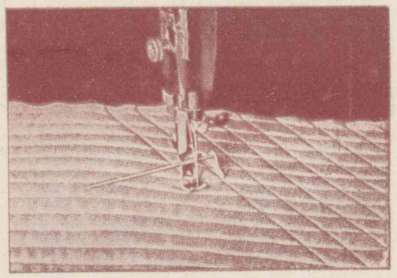

附紐打

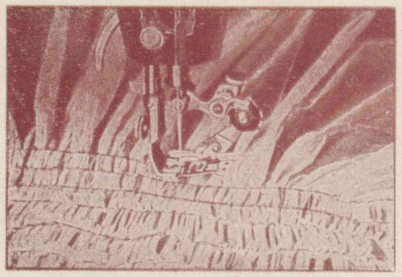

五重縫

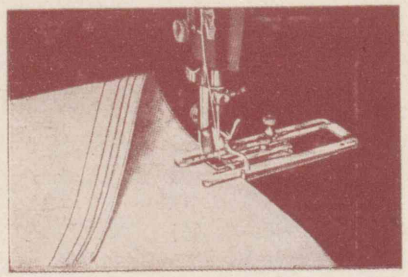

附スーレ


附絲


取襞


縫刺


寄襞


重縫

針の符號	新	舊	新	舊	新	舊
	九	〇	一一	B	一六	一四
					一 1/2	一 1/2
絲の番號	カタン絲 羽二重絲 六〇・八〇・一〇〇	カタン絲 六〇・八〇・一〇〇	カタン絲 羽二重絲 五〇・六〇・一〇〇	カタン絲 五〇・六〇・一〇〇	カタン絲 四〇・五〇・六〇	

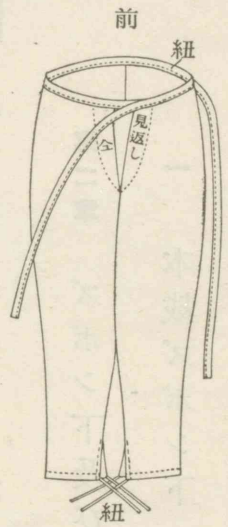
五 機械の取扱。 ミシンは精巧なる機械なれば、その取扱ひ方には特に注意すべし。即ち、使用後は、各部の塵を拂ひ、油布巾にて要部をよく拭ひ、摩擦する箇所には時々油穴より油を注ぐべし。送り金の上部、及び周圍、滑板の下、船受の内部等は、殊に注意を要す。

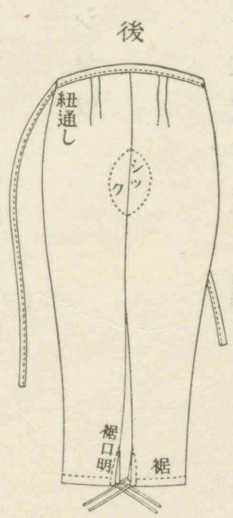
注意 縫床の横に二つ並びある穴は油穴にあらず螺旋の孔なり。

第二章 ズボン下及びシャツ

一 本裁ズボン下

一 各部の名稱及び仕立て上り圖





二　種類及び地質

種類。　紐附・帶附・股引仕立て等あり。

地質。　キャラコ・ネル・縮・麻・天竺木綿等。大幅・並幅物共に用ひらる。

三　各部寸法の取方

胯上　股のつけ根より腹部の細きところまで。後は、前より六糎長くす。

胯下　股のつけ根より足首までの寸法。

丈　前胯上に胯下を加へ、胯上に約八糎・胯下に約四糎の餘裕をつく。

胯上幅　腹圍の四分の一に後は約八糎、前は四糎を加ふ。

胯上止幅　腰圍の寸法の四分の一に、後は十五糎、前は十糎を加ふ。

裾口　足首の廻りの寸法の二分の一に、後は六糎、前は四糎を加ふ。

四　普通裁ち切り寸法

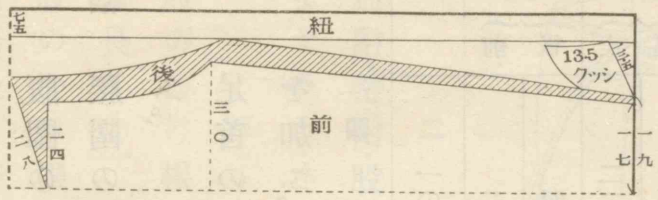
丈	一〇六糎	胯上幅	前	三四	後	二四	裾口幅	前	一七糎	後	一九
紐	丈	二二〇	幅	七・五	見返し	丈	二八	幅	二八	シック	一三・五
							六	胯上止幅	前	三〇	後	三五

五　裁ち方・積り方

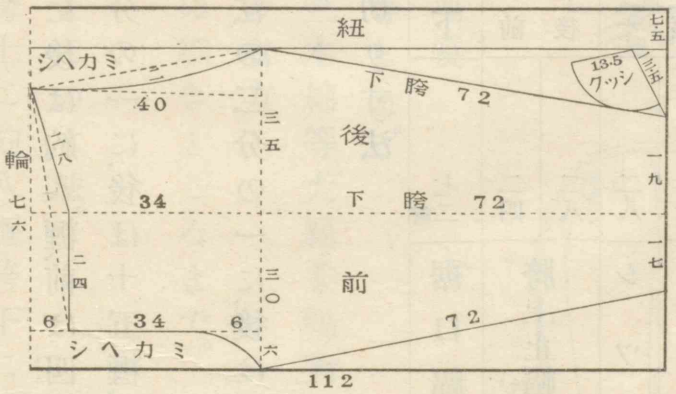
幅七十六糎・丈二米二十四糎にて、本裁普通ズボン下裁ち方。

幅七十六糎の布にて普通ズボン下裁ち方

（一）中表に丈二つ折更に幅二つ折



（二）幅を擴げし圖



積り方

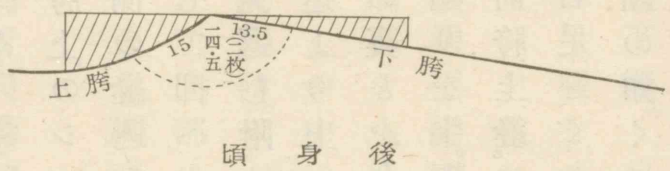
公式　(胯下＋後胯上)×2＝總丈

算式　(72＋40)×2＝……224

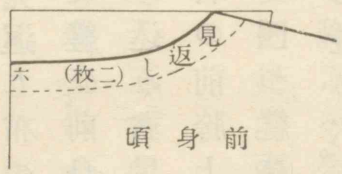
六　縫ひ方（ミシン縫）

（一）順序

一 シック　二 後胯上縫及びシック　三 見返し　四 胯下縫　五 裾口明・裾絎　六 腰紐附　七 門留・穴縢・釦附



後身頃

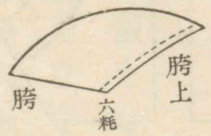


前身頃

方り取のし返見び及クッシ
（つ裁てせ合に形の頃身）

シック。 脊となるべきところを下半糎位殘し、約一糎の縫代にて脊を縫ひ、縫目を割り、外側の丸みを縫ひ締め、半糎の縫代にて裏に折をつく。

後胯上及びシック。 後胯上、即ち脊となるところをシックと同じ方法にて縫ひ、折は右を上にして手前



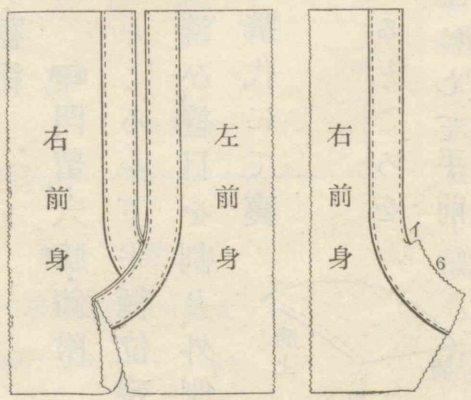
方ひ縫のクッシ

に返し(地厚のものは割る)その縫目にシックを綴ぢつけ、周圍を身頃に縫ひつく。

胯上のシックのつかざるところは内側の縫込を半糎裁ち落し、折り伏せにして抑へミシンをかく。

見返し附。 左右共胯上止り六糎の切込より上にて見返し布の表と前身頃の裏とを合せて縫ひ、前身の表の方に見返し布を折り返し、その廻りを半糎折り込み右足のみを周圍にミシンをかく。

前胯上縫。 左右の前胯上の縫ひ殘したる六糎の間を、左足にて右足をくるみて四つ縫ひにし表に返し、左足見返しの周圍に右圖の如くミシンをかく。



見返しのつけ方

胯下縫。 前後の胯下を合せ縫代を一糎二粍にし、前身を四粍引きて躾をかけ、後を見て兩裾馬乘止りまで縫ふ。折は、前に返し、ミシンをかく。

馬乘・裾絎。 馬乘十三糎のところを三つ折にして縫ふ。裾口は裁目を八粍に折り、次に一糎半乃至二糎幅に三つ折とし、テープをこの中に入れてミシンをかく。(テープ丈五十七糎位)

腰紐附。 左右後腰幅の中央にて、裏より二糎内外撮みて、襞とし、左脇上部に、幅六糎丈八糎程の紐通し穴の當布をつく。前身の方へ三十糎殘して紐をつけ、幅を二糎内外の上りにしてミシンをかく。

閂留・穴縢・釦附。 前胯上止り及び左右裾馬乘止りに閂留をなす。左脇にて上部より二糎程下り、二糎内外紐通しの穴縢をなす。また、前見返しは丈を三等分し左は幅の中央に一糎半程の穴を二

個明け右は穴に合せて釦をつく。

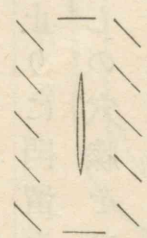
穴滕（あなかがり）。

方法。釦の直徑より二粍大きく穴をあけ、穴の切り口より二粍の深さに、道絲を左右兩側に渡す。

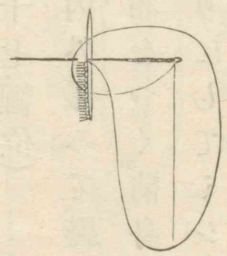
左下端より滕り始めて一週し、終りは、下端にて横に絲を二度程通し、閂留をなして絲を止めおく。

但し、上端は、下圖の如く三針出す。

滕り方は道絲の外へ裏より針を出し、針目に近き絲を取りて針の先端にかけ、左の拇指（おやゆび）にて針目の際を抑へ、右手にて絲を抜き、左右にて加減しつゝ絲を引き締めゆくな

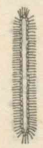


(一)



(二)

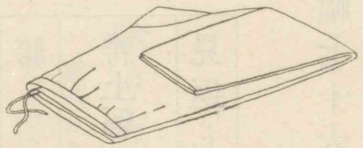
(三)



(四)

り。

釦附。穴滕の穴に合せて釦をつく。釦の穴を二重絲にて二・三度針を通し、釦の根を四・五回卷きたる後、針を裏に出し、止めて絲を切る。絲の掛け方は下圖の如し。



疊み方

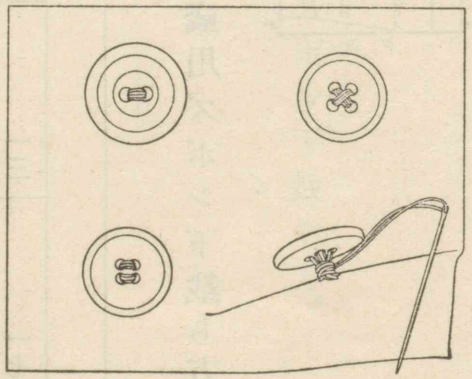
仕上げ及び疊み方。少しく霧を吹き全體に烙鏝をかく。

疊み方は內胯を中心にして兩脚を合せ、紐を中に疊み入れ、上圖の如く二つに折りて疊みおくべし。

二　中裁・小裁ズボン下

一　普通裁ち切り寸法

名稱＼年齢	六・七歳	十四・五歳



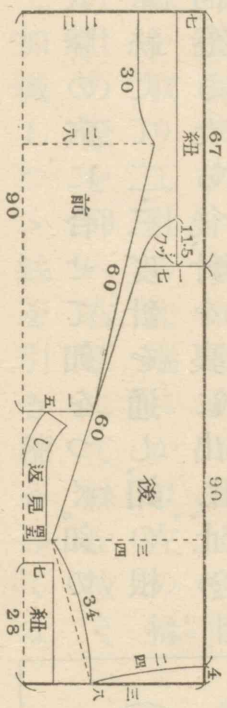
名稱＼年齢	六・七歳	十四・五歳

丈		六〇糎 六五	九〇糎 内外	
胯上	前	二四	三〇	胯上止幅 前
	後	二八	三四	後
胯下		四二	六〇	紐 丈
胯上幅	前	一七	二二	裾口幅 前
	後	一九	二四	後
見返し幅		四・五	四・五	

二一糎	二八糎	
二四・五	三四	
一五〇	一九〇	
五	七	
一一・五	一五	
一三	一七	

二　裁ち方

幅七十六糎・長さ一米六十一糎にて、十四・五歳用ズボン下裁ち方。

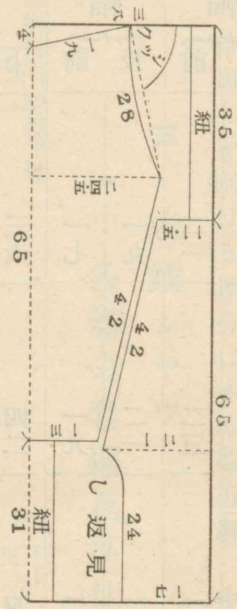


積り方

後丈×布數＋前後の差－裁込＝總丈

90×2＋4－22＝162

幅七十六糎長さ一米の用布にて六・七歳用ズボン下裁ち方。



積り方

後丈×布數＋前後の差－裁込＝總丈

65×2＋4－34＝100

三　縫ひ方

脇縫あるのみにて、他は、本裁ズボン下に同じ。

前身は後身より四粍引きて脇を縫ひ、(左脇は、紐附より二糎内外

下り、四糎程の紐通しを明く)、縫代は、折り伏せてミシンをかく。

附　ズボン下普通裁ち切り寸法表

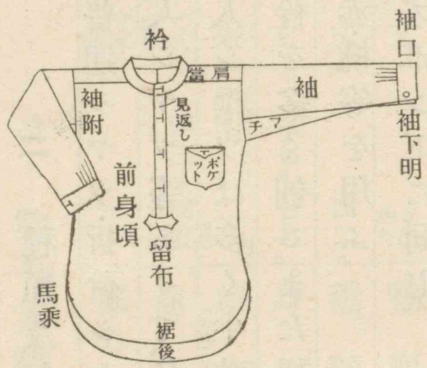
各部名稱＼年齡	六・七歳	八・九歳	十一・二歳	十四・五歳	本裁
胯上 前	二四糎	二六糎	二八糎	三〇糎	三四糎
胯上 後	二八	三〇	三二	三四	四〇
胯下	三六	四二	四七	六〇	七二
胯上幅 前	一七	一九	二一	二二	二四
胯上幅 後	一九	二一	二三	二四	二八
胯上止幅 前	二一	二三	二五	二八・五	三〇
胯上止幅 後	二四・五	二六・五	二八・五	三二	三五
裾口幅 前	一一・五	一二・五	一四	一五	一七
裾口幅 後	一三	一四	一六	一七	一九
見返し幅	四・五	同上	同上	同上	六
紐丈	一五〇	一六五	一八〇	一九〇	二二〇
紐幅	五	六	六・五	七	七・五
シック	一〇	同上	一一・五	同上	一三・五

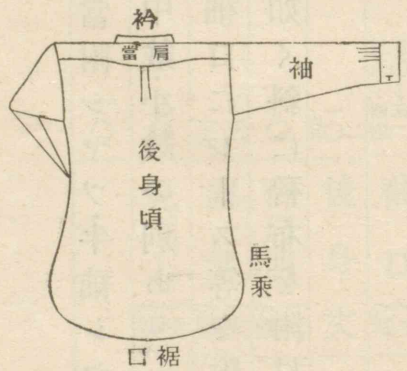
【問】シャツの用布及び仕立て上げ種類を問ふ。

注意　持出しを附ける場合は本裁幅五糎、中・小裁四糎として附く。

三　本裁シャツ

一　各部の名稱及び仕立て上り圖。





二　種類及び地質

種類。 普通シヤツ・折衿シヤツ・胸當附シヤツ・半袖シヤツ・運動シヤツ・婦人シヤツ等ありて、各・本裁・中裁・小裁の別あり。

但し婦人シヤツは多く半袖にて、袖口にレース等を附け、前を全部割り衿を多く刳る。また襦袢の如く斜に衿布を附けたるもあり。色は赤・桃等を用ふ。

地質。 ズボン下に同じ。

三　各部寸法取り方

後身丈。 直立して手を垂れ、脊骨の上部より中指の先まで。

前身丈。 後身丈より四糎乃至八糎短くす。

身幅。 胸圍の四分の一に八糎を加へたるものを後半身の幅とす。(前後同じ)

衿。 手を胸にとりて肱を張り、脊より肱を廻りて手首のところまでとす。

肩幅。 脊骨より肩の骨まで。

袖丈。 衿の寸法より肩幅を引く。

衿丈。 首の廻りに、重ね代及び縫代として四糎を加ふ。

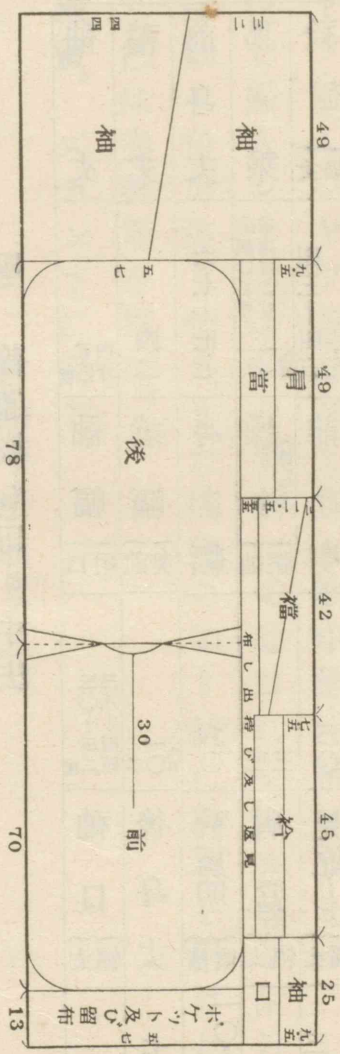
袖口丈。 手首の廻りに、重ね代二糎半・縫代一糎を加ふ。

四　普通裁ち切り寸法

袖丈		五〇糎内外	袖幅（口附）	三〇—三二糎 三八—四四	袖口（丈幅）	二五糎 九・五
襠丈		四二	襠幅（前奥）	一二 内外一〇	後身丈	七五—八五
前身丈		六七—七七	身幅			
馬乘	後裾口より 前裾口より	一九 内外一一	繰り（袖胴）	六〇	衿肩明（横縦）	七 一〇・七 丸み二
衿（丈幅）		四三—四五 七・五	前明	三〇	肩當（丈幅）	三 三 四九 内外一〇
ポケット（丈幅）		一八 一三	裾の丸み	一〇	見返し（丈幅）	三二—三四 四・五

五　裁ち方・積り方

一、幅七十六糎・長さ二米十糎の兩面物にて、本裁普通シャツの裁ち方・積り方。

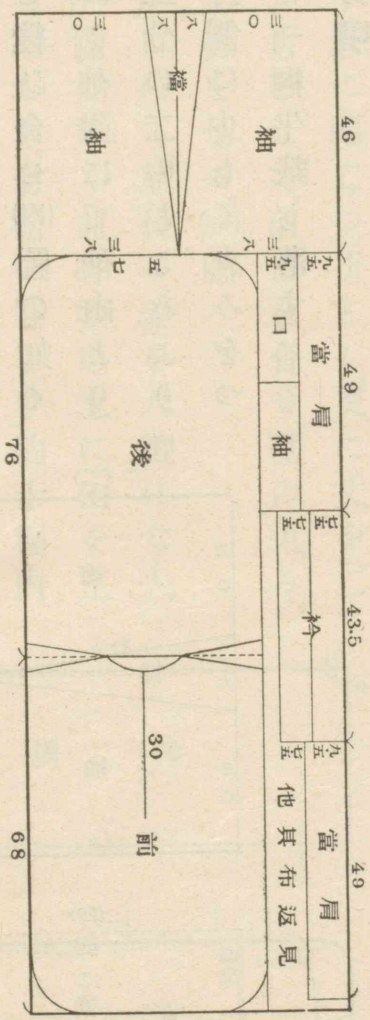


積り方

袖丈＋後丈×2－前後の差＋ボケット布＝總丈

49＋78×2－8＋13……210

二、幅七十六糎・長さ一米九十糎片面物にて、本裁普通シャツの裁ち方・積り方。(袖の裁ち方異るのみ)



積り方

{總丈－(袖丈＋前後の差)}÷2＝前丈

{190－(46＋8)}÷2＝……68

袖丈＋後丈×2－前後の差＝總丈

46＋76×2－8＝……190

六　各部分の裁ち方

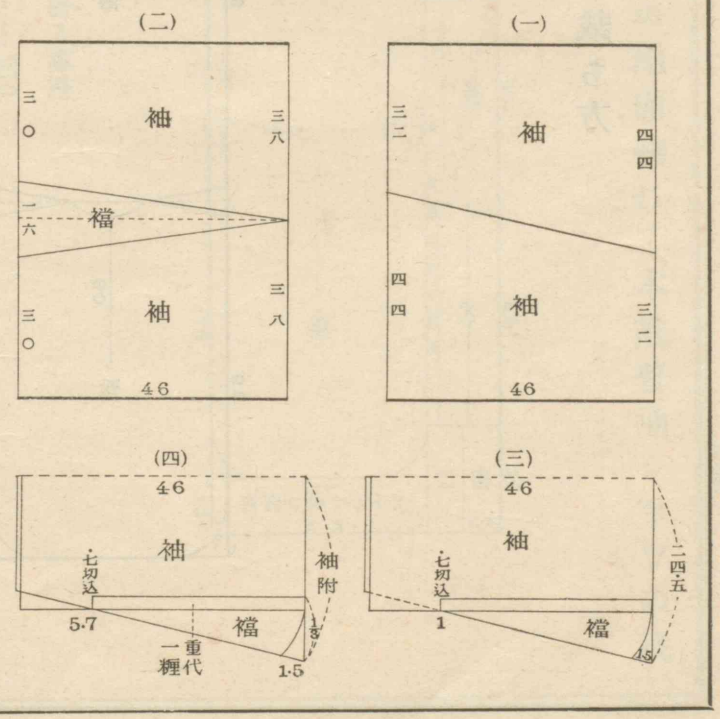
❶ 袖。

(イ) 袖布より(一)圖の如く左右の袖を取る。片面物は、(二)圖の如く裁つ。

(ロ) 中表に(三)圖の如く二枚に折り、袖下に七粍の切込を入る。

(ハ) 袖及び襠の眞直なる方を縫ひ合せ(四)圖の如くおき、袖附にて袖山より三分の二のところより外側に少しく丸みをつけ、一糎半裁ち落す。

(二) 身頃。

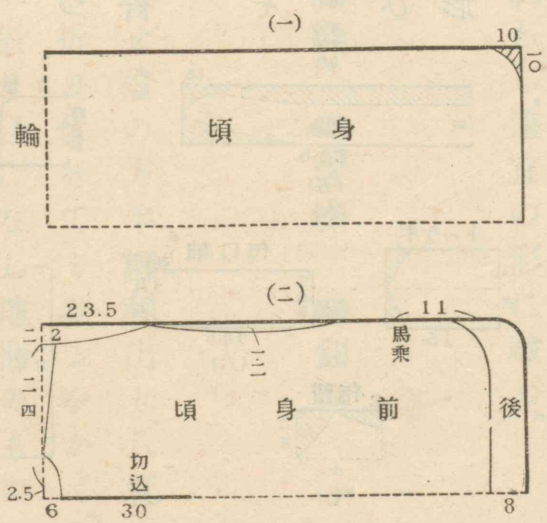


(イ) 中表に幅二つ折とし、更に丈を二つ折として、前後を合せ、裾の丸み十糎を切る。(一)圖

(ロ) 裾口にて、前後の差を八糎になし、(二)圖の如く前身頃を上に、山を正しくおき、前裾の端より約十糎内外に馬乘を標し、次に脇及び袖附に標をなして裁ち落す。

袖附は袖布の袖附丈より縫代を減じたる寸法とす(即ち山より二十三糎半)次に、輪の方二糎半は後幅の襞、二十四糎は肩幅・袖附の方二糎は裁ち落しなり。

(ハ) 肩當布を中表に、幅及び丈を二つ折とし、(三)圖の如く裁ち落し、衿肩明に鋏を入れ、前を切り放しおく。

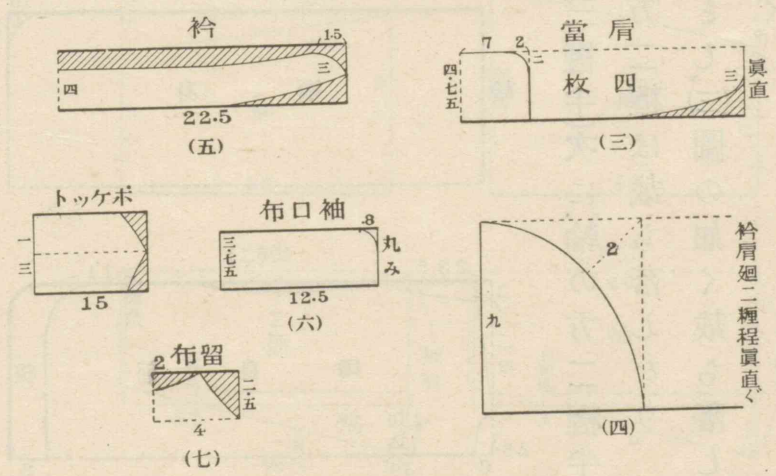


(二)後身頃を離して前身頃のみになし。肩當布と前身頃とを縫代だけ重ね、衿肩明及び前明三十糎を切る。衿肩の繰りは(四)圖の如き割り出しにして裁ち切る。

㊂衿布二枚を中表に、幅及び丈を二つ折になし、(五)圖の如く裁つ。上部は、衿の山となるところなり。

㊃袖口布を丈・幅共に二つ折になし、その一角を八糎の丸みに裁つ。(六)圖

㊄留布は、幅五糎・丈八糎位にて、幅及び丈を二つ折とし、(七)圖の如く裁つ。(形は好みのまゝ)。



㊅ポケット布は、幅十三糎・丈十五糎位とし、適宜の形に裁つ。

七　縫ひ方

(一)　順序

㊀袖　㊁身頃　㊂衿附　㊃袖附・脇縫　㊄穴縢　㊅釦附

(二)　仕立て方

袖。

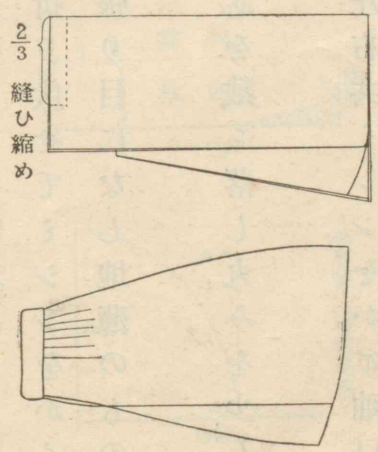
(イ)袖襠附。　袖と襠は、眞直なる方を合せ襠の方半糎程出し、八糎の縫代にて縫ひ、折は袖の方へ返し、折り伏せてミシンをかく。

(ロ)袖口布。　表裏を合せ、裏の方を稍や張り目になし地薄のものには、表に芯を入れて三方を縫ふ。芯を入れたるものは、縫目の際より芯を裁ち落し、丸みを少し縫ひ縮めて表に引き返す。

(ハ)袖口附。　袖口明六糎を三つ折とし、左右共ミシンをかけ袖口

を袖口布丈に合せ、長き分を山より三分の二の間にて縫ひ縮め、これに袖口布の表を合せて縫ひつけ、折は袖口の方に返す。

裏袖口布を折りて纏りつけ、袖口布の周圍にミシンをかく。



身頃。

(イ) 裾。　前後共、裾の丸みを二糎程の縫代にて縫ひ縮めおき、馬乘まで前後の裾を四糎程の幅に三つ折としてミシンをかく。

(ロ) 肩當附。　後幅の弛みを、脊のところ二十糎程の間にて、肩當丈に合せて縫ひ縮め、裏表肩當布にて挾みて縫ひ、前端にては、表肩當布と前身とを縫ひ合せ、裏肩當布を伏せ、躾にて抑へ、前後兩端へミシンをかけ、顎の刳を正す。

(ハ) 見返し。　上前、前明にて見返し布を身頃の裏にあてゝ縫ひ、表に返して、身頃の上に載せ、奥の一方の端を八糎程裏に折り返し、表より兩側にミシンをかく。次に下前に持出し布を縫ひ附け、持出しの方に折を返し、幅を上前見返しより四糎詰めて端を折り、周圍にミシンをかく。

(ニ) 留布。　前明止りにて、持出しと見返しとを正しく重ね、返縫にて抑へ、上前見返しの止りに留布を當て、周圍にミシンをかく。但し、前を下まで割りしものは、留布を用ひず。

(ホ) ポケット。　ポケット布に口布をつけて、周圍を折り、左前幅の中央より少しく脇に寄せ、肩より二十五糎内外下につく。即ち、上部は、袖附止り、または二糎位下となす。

衿附。　衿丈の中央を身頃の脊の表に合せ、顎の刳は、衿を稍や張り目になし、下前より普通縫代にて縫ひ、折は衿の方に返し、裏衿

を稍や張り目にして山及び衿先を縫ひ、衿先の丸みを縫ひ縮め、芯は(地薄のものは、表衿に芯布を入る)縫目の際より裁ち落し、表に返し、縫目を整へ、裏を纏り、周圍にミシンをかく。

袖附・脇縫。 袖を一糎、身頃を半糎の縫代とし、兩端を一糎位づゝ殘して縫ひ、折は身頃の方へ返し、縫込の端を折り伏せておさへ袖附の縫目をよく合せ、馬乘より袖下明まで後半糎・前一糎の縫代に縫ひ、折は後身及び外袖の方に返し、縫代の端を折り伏せてミシンをかく。

門留は、袖下明及び馬乘になす。

穴縢（あなかがり）

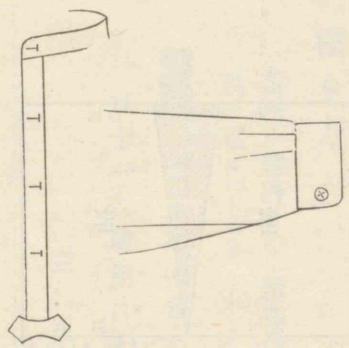
(イ) 位置。 袖口は、布の中央にて端より一糎位入りしところに、一個或は二個。(左右外袖)見返しは、幅の中央にて丈を四等分し、その間に三個(上前)

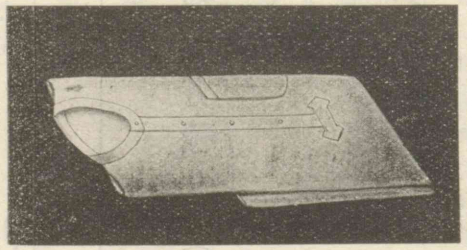
衿は、衿幅の中央にて衿先より八粍入りたるところに、見返しに揃へて一個。(上前)

釦附。 穴の中央に合せ、左右の内袖・下前持出しにつく。釦のつけ方及び穴縢はズボン下に同じ。

仕上げ。 ズボン下に同じ。

疊み方。 下圖の如く前身頃の釦をかけて脊を出し、袖を肩より斜に、後身頃に折りつけ、更にこれを下方に折り返し、丈を二つ折になし、前を上に出す。





疊み方圖

四　中裁及び小裁シャツ

一　中裁普通裁ち切り寸法(十四歳より十六歳位まで)

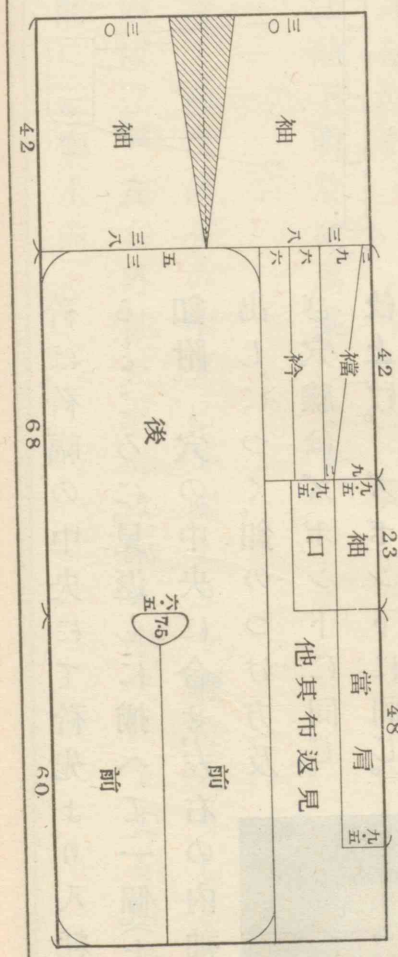
袖丈	四二糎
袖幅(口附)	二八—三〇糎　三八—四〇
袖口(丈)(幅)	二三糎　九・五

襠丈	四二	襠幅（前奥）	二九・五
前身丈	六〇—六五	身幅	五三
肩當（丈幅）	四八 一〇内外	衿（丈幅）	四二 六
裾の丸み	九		

後身丈	六八—七三	衿肩明（横縦）	丸み 六・五 七・五 一・五
見返し（丈幅）	六〇 四・五		

二　裁ち方・積り方

幅七十六糎・長さ一米七十糎にて、中裁シャツの裁ち方・積り方。（十五・六歳用）



積り方

袖丈＋後丈×2－前後の差＝襠丈
42＋68×2－8＝……170

注意　こゝに中裁・小裁二種をあげたれども、十三・四歳用はこの裁ち方に、十歳は十一・二歳用に、七歳は五・六歳用の寸法・裁ち方に準じて裁つべし。

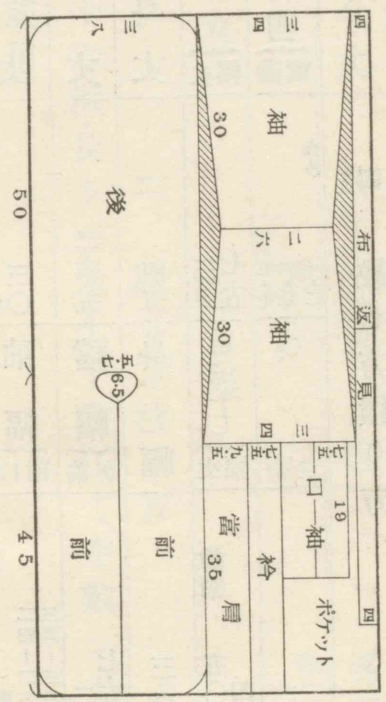
三　小裁普通裁ち切り寸法（七・八歳用）

袖丈	三〇糎	袖幅（口附）	二四—二六 三四—三六糎
襠丈	二六・五	襠幅（前奥）	一九糎 七・五
前身丈	四五	身幅	七・五 二
衿（丈幅）	三五 七・五	見返し（丈幅）	三八
衿肩明（横縦）	五・七 六・五 一・二	前割	五〇 四
裾の丸み		裾の丸み	三五 九・五
			六

四　裁ち方・積り方

幅七十六糎・長さ九十五糎の用布にて、小裁シャツの裁ち方・積り

方。(七・八歳用)



積り方

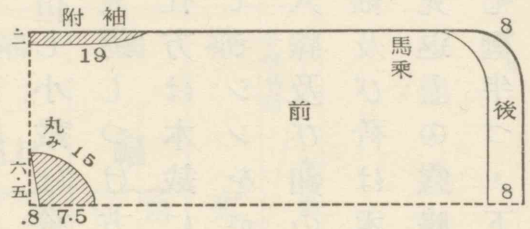
後丈×2−前後の差＝襟丈
50×2−5＝……95

小裁各部の裁ち方は、大體本裁に同じ。但し、前を全部割りたると、袖に襠を用ひざると、肩當の附け方とに、差異あり。

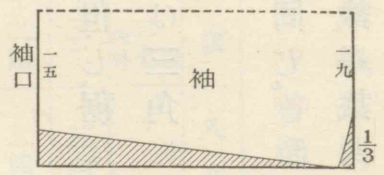
五　中裁・小裁シャツ縫ひ方

(一)　順序

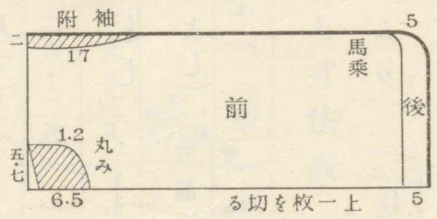
(一) 袖襠附　(二) 袖口布　(三) 袖口附　(四) 裾
(五) 肩當附　(六) 見返し　(七) ポケット　(八) 衿附



中裁身頃



中裁襠無袖



小裁身頃

小裁襠無袖

㊉ 袖附　㊊ 脇縫

㊋ 門留・穴縢・釦附

(二) 仕立て方

大體は本裁に準ずれども、中裁・小裁は前を全部開くが故に見返しを裾までつく。(但し小裁は衿山に縫目をつけず輪とす)

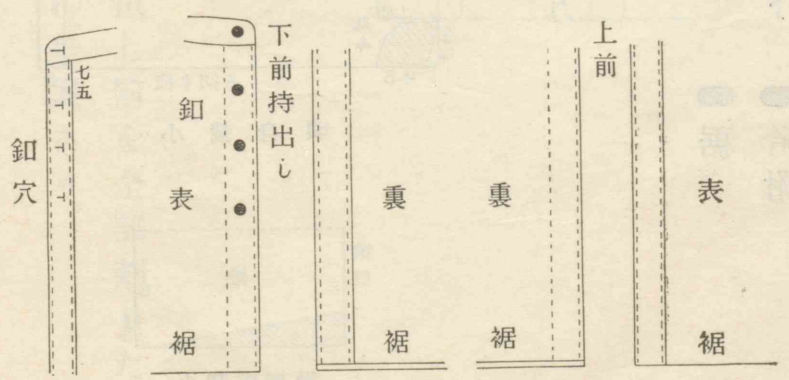
見返しつけ方

仕方は本裁に同じ。但し、裾は三つ折としてミシンをかく。(角は三角に折るもよし)

穴縢及び釦の位置

袖及び衿は本裁に同じ。

見返しの穴縢は中裁・小裁共に衿附より七糎半づゝ下りて三個、釦は穴に合せてつく。



その他の縫ひ方は本裁に同じ。

附　シヤツ普通裁ち切り寸法表

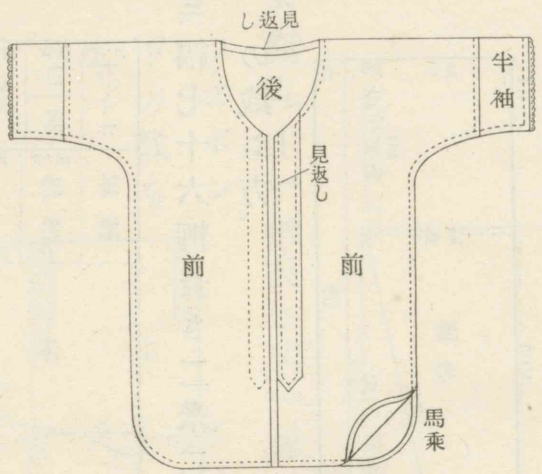
各部名稱 ＼ 年齢	五・六歳	八・九歳	十一・二歳	十五・六歳	本裁
袖丈	二七糎 内外	三〇糎 内外	三六糎 内外	四二糎 内外	五〇糎 内外
袖幅 附口	三〇—三二	三四—三六	三六—三八	三八—四〇	三八—四四
袖幅	二二—二四	二四—二六	二六—二八	二八—三〇	三〇—三二
袖口 丈	一七	一九	二一	二三	二五
袖口 幅	七・五	同上	同上	九・五	同上
後身丈	四六	五〇	五七	六八—七三	七五—八五
前身丈	四二	四五	五一	六〇—六五	六七—七七
身幅	三六 内外	四〇 内外	四五 内外	五三 内外	六〇
衿肩明 横	五・三	五・七	六・六	六・五	七・七
衿肩明 縦	六	六・五	七・二	七・五	一〇・七

衿肩明（丸み）		一・二	同上	同上	一・五
襠丈			二六・五	二八	四二
襠幅	前		二	同上	同上
	奥	七・五	同上	同上	九・五
衿	丈	三二	三五	三八	四二
	幅	一枚 五・七	一枚 同上	六	同上
肩當	丈	三〇	三四 内外	三八 内外	四五 内外
	幅	九・五	同上	同上	一〇 内外
見返し	丈	三〇	五〇	五七	六〇
	幅	四	同上	同上	四・五
裾の丸み		六	同上	八	九

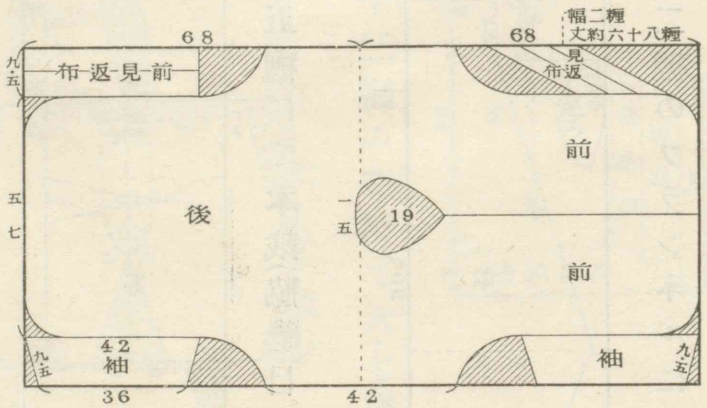
衿肩明（丸み）		同上	同上	一・五	二
襠丈		二六・五	二八	四二	同上
襠幅	前	二	同上	同上	同上
	奥	同上	同上	九・五	一〇 内外
衿	丈	三五	三八	四二	四三—四五
	幅	一枚 同上	六	同上	七・五
肩當	丈	三四 内外	三八 内外	四五 内外	四九 内外
	幅	同上	同上	一〇 内外	同上 内外
見返し	丈	五〇	五七	六〇	三二—三四
	幅	同上	同上	四・五	同上
裾の丸み		上	八	九	一〇

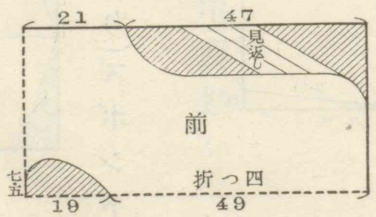
第三章　各種シャツ・ズボン下の裁ち方

一、幅七十六糎長さ一米七十八糎の布にて、女物シャツの裁ち方。

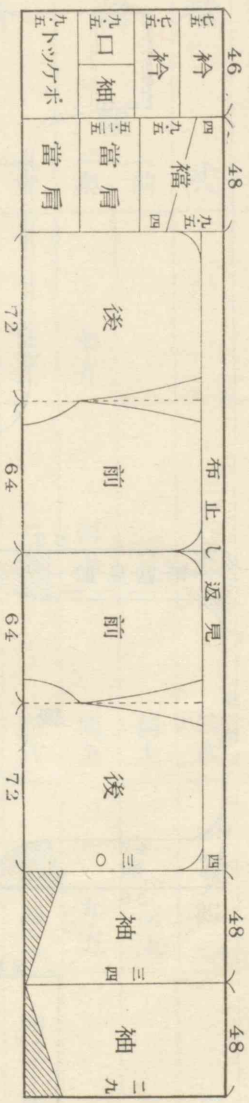


出來上り圖

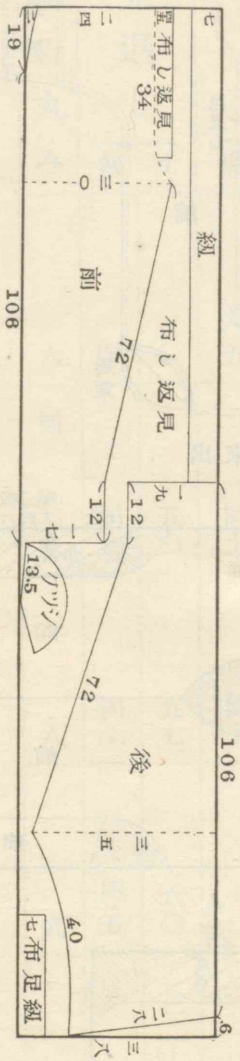




二、並幅長さ四米六十二糎の布にて、本裁普通シャツの裁ち方。

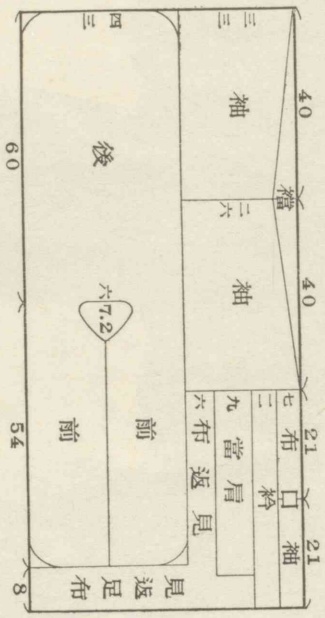


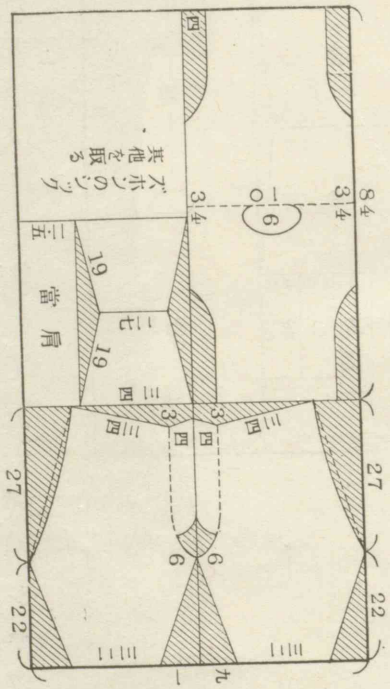
三、幅七十六糎・長さ一米二十五糎にて本裁(脇縫目有り)ズボン下の裁ち方。



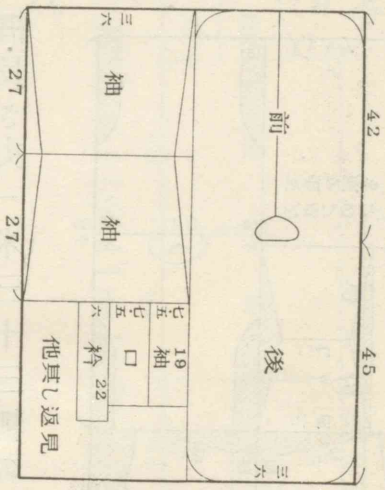
四、幅七十六糎・長さ一米二十二糎のフランネルにて十一・三歳用シャツの裁ち方。

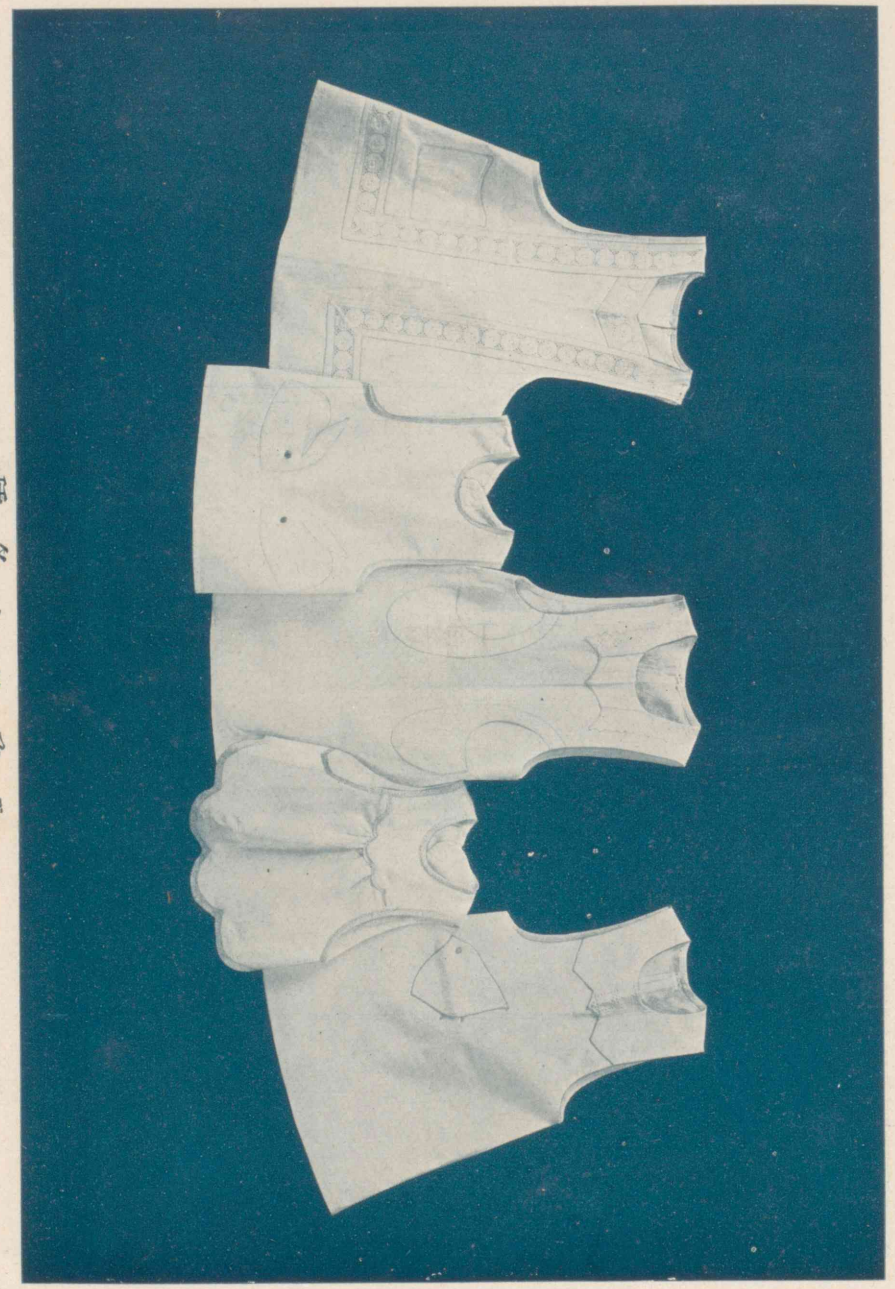
五、幅九十一糎・長さ丈一米三十三糎の布にて六・七歳用運動シャツ・ズボン下の裁ち方。





六、幅七十二糎長さ八十七糎にて五六歳用シャツの裁ち方。



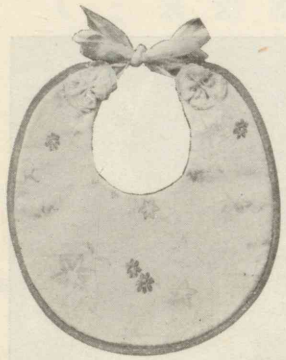


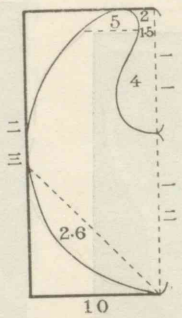
種各ノロプ。エ

附錄　應用材料

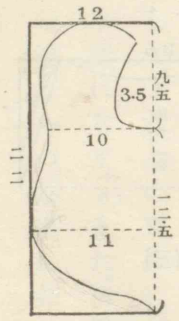
第一章　涎掛（ミシン使用）

型紙





（一）



（二）

一　裁ち方

地質　キャラコ・ネル・絹の類

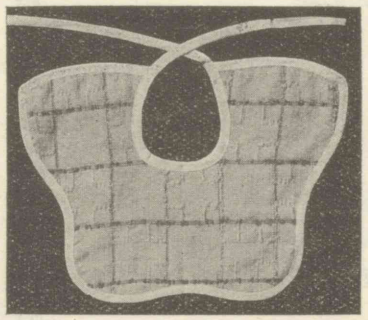
芯地　綿ネル・紋羽・晒木綿

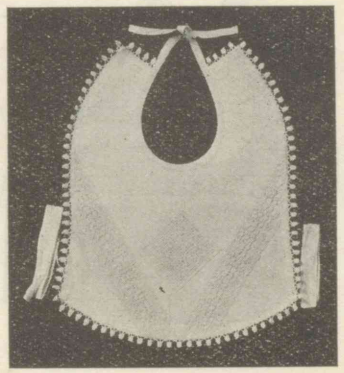
飾　テープ・レース等

用布

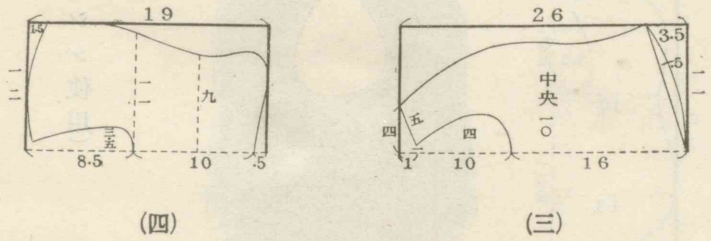
（一）
丈　二十三糎
幅　二十糎
紐丈七十糎

（二）
丈　二十二糎
幅　二十四糎





仕立て上り圖



(四)　(三)

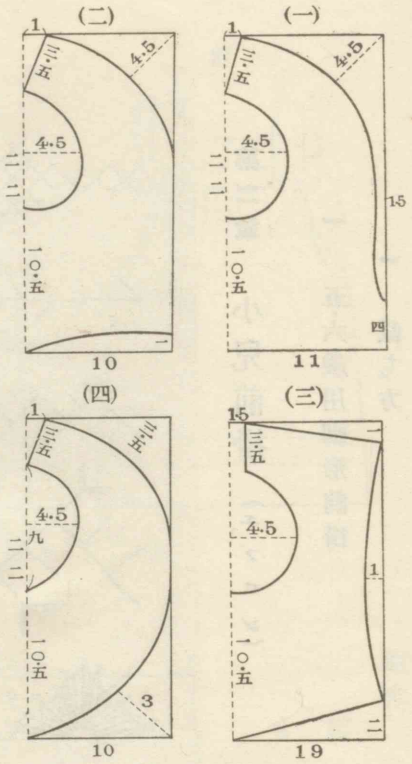
裁ち方

(三)
丈　二十六糎
幅　二十二糎
紐丈五十糎

(四)
丈　十九糎
幅　二十四糎

涎掛を裁つには、先づ紙を用ひて型紙を作り、次に、その型紙により、表裏の布及び芯地を裁つなり。

緣飾の總丈を積るには、型紙の周圍を計り、これを標準として縫ひ縮むるときは、一倍半・巾着襞の如く三重襞になすときは、三倍を要す。幅は、



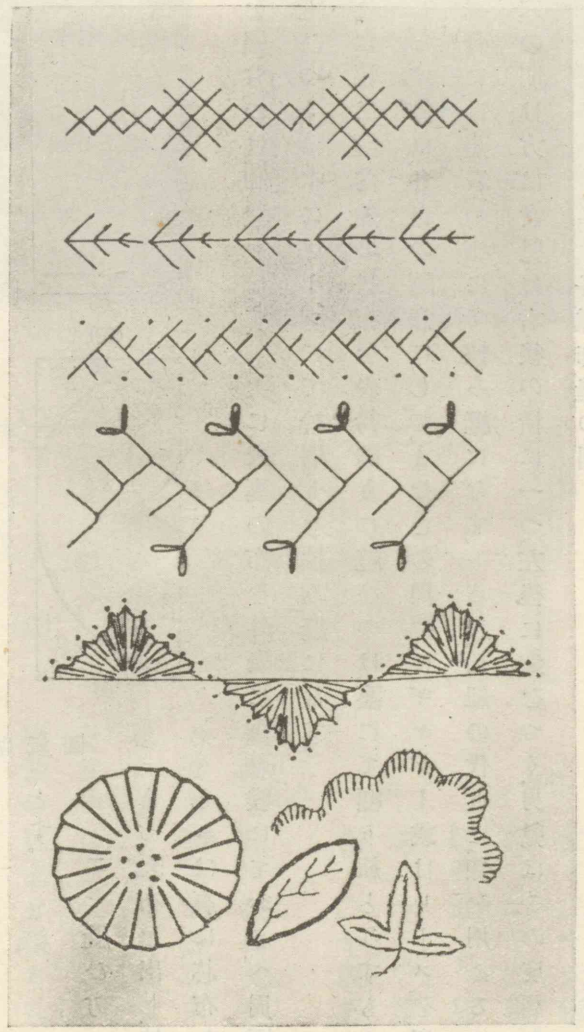
涎掛型紙圖

出來上り約二糎半内外を可とす。また、紐の丈は、六十五糎乃至七十糎、幅は、一糎二粍位を通常とす。

二　縫ひ方

まづ、表布を出し、地薄きときは、裏に芯布を當て、周圍を綴ぢつけ、飾縫をなす。次に、表裏の布を外表に重ね躾にておさへ周圍に斜布を縫ひつく。次にテープにて衿廻りを挾み縫になす。或はまた、幅二糎内外の斜布を表衿廻りに縫ひつけ、裏にて纏り、紐となすもよし。表布になす飾は、各自の隨意にして、またこの周圍に、ギャダー或はレースを用ふ。この場合には、裏表の布にて挾み縫になす。また、衿紐の代りに、釦を用ふることあり。穴の明け方は、女兒は、右後の横に一つ、左後に釦をつく。男兒は、この反對なり。

三　各種飾縫の圖

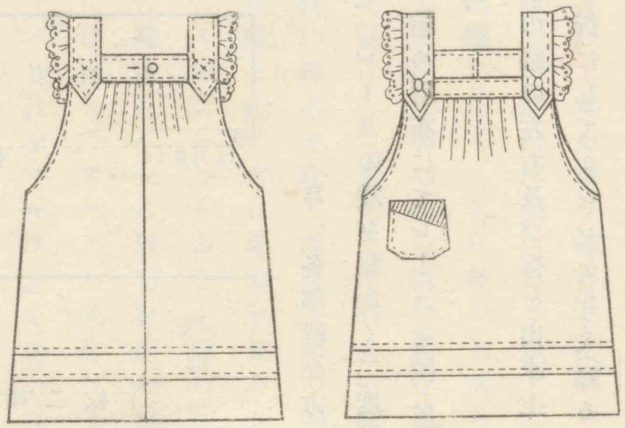


第二章　小兒前掛（エプロン）

一　五・六歳用劒形前掛

一　裁ち方

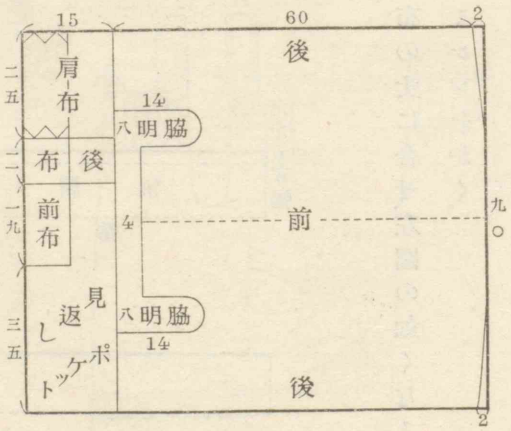
二　各部裁ち方



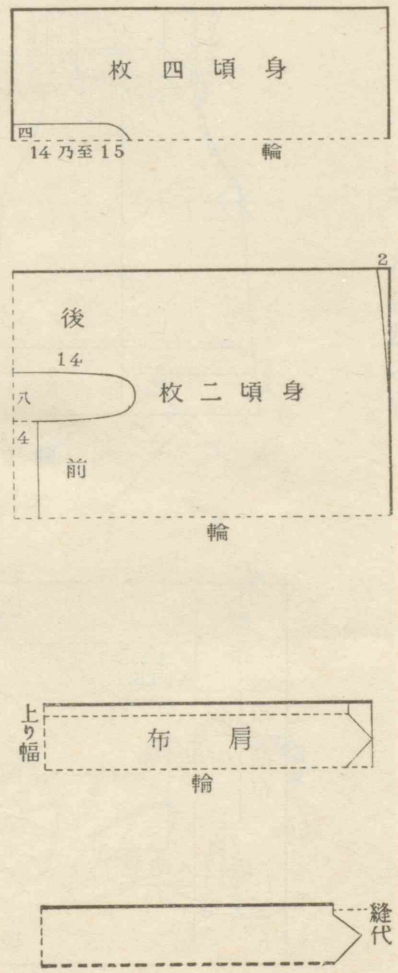
仕立て上り圖

用布

幅　九十糎
丈　七十五糎



裁ち方綜合圖



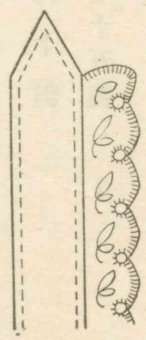
三　各部縫ひ方

(一) 肩布。レースの端を細かく二度縫ひて肩布の丈に合せ、左圖の如くなるやうに縫ひ縮め、肩布にてレースを挾みて周圍にミシンをかく。

(二) 身頃。

(イ) 身頃の幅の左右及び裾を出來上り二糎位に、何れも三つ折にしてミシンをかく。(纏るもよし)

(ロ) 左右脇明に見返し布をつけ、幅八糎に定め、ミシンを



肩布縫ひ方

かく。

(ハ) 前身の上部を縫ひ縮むるか、圖の如き襞になすか、或は片襞にして幅十五糎乃至十七糎になす。次に後の上部の右を七糎半左を八糎七糎に縫ひ縮む。但し、これは女兒にして男兒は左右この反對なり。

(ニ) 前後の緣布を取り、前後上部の幅に合せ、各兩端を縫ひ、次に身頃を挾みて縫ひ、周圍にミシンをかくること、圖の如し。

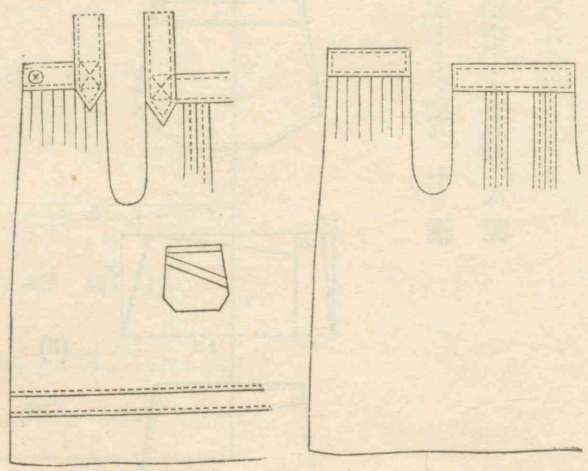
(ホ) 前に縫ひおきたる肩布を出し、緣布より劒だけ出してチキリ止めをなす。

これをチキリ止めといふ。

(ヘ) 左後に釦をつけ、右にはこれを通す穴を明く。

(ト) ポケットの位置及び裾口のタックは、形よくなすべし。

(チ) 仕上げ。

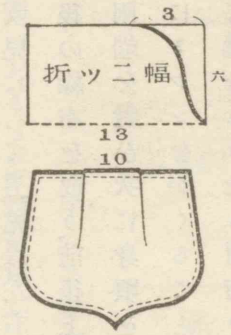


身頃縫ひ方

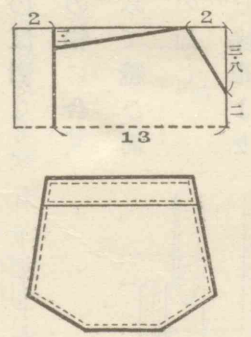
四　ポケット

ポケットの用布は、身頃と共布にして幅十二糎丈十三糎程を要す。但し、其の形は、身頃と共に頗る流行の變遷あるものにして、その形に應じてレース或は飾布を用ふ。左に、最も普通なる形の縫ち方二・三種を示す。

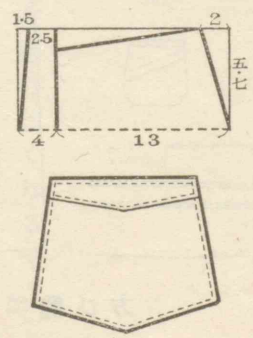
(1)



(2)



(3)



五　普通出來上り身丈

二・三歳用……四十五糎　四・五歳用……五十糎
六・七歳用……六十糎　八・九歳用……六十八糎

二　小兒用前掛(二・三歳用)

一　裁ち方

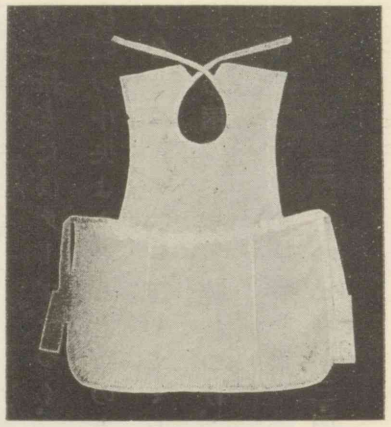
用布。

身頃　幅　九十糎
　　丈　二十七糎
レース　七十五糎

紐　首廻り　幅　三糎
　　丈　六十糎
　横紐　幅　四糎
　　丈　三十八糎

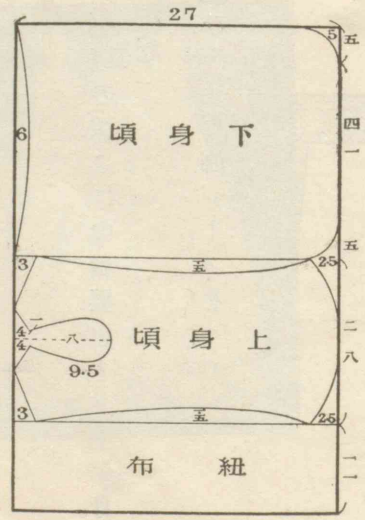
二　縫ひ方

(一)下身頃の廻りを三つ折としミシンを掛く。



仕立て上り

(二)上身頃兩脇にて各身頃の裏にレースの表を合せて縫ひ、レースを表に折り返し、



裁ち方綜合圖

レースの端をミシンにて押へおく。

(三) 肩を細かく三つ折とし、ミシンをかく。

(四) 衿刳に紐またはテープをつく。

(五) 下身頃の中央より左右七糎のところに半糎の深さに巾着襞をとり、上下身頃を縫ひ合せ、縫代の端を折りてミシンをかく。

(六) 下身頃の兩端に紐を縫ひつけ、上下の縫ひ合せに飾レースをつく。

(七) 仕上げ。

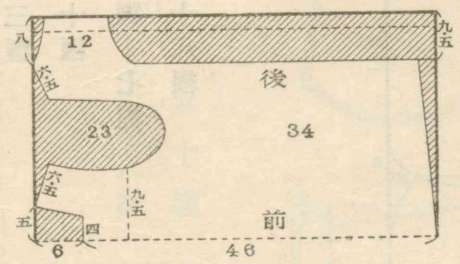
三　小兒前掛(三・四歳用)

用布。

幅　七十六糎

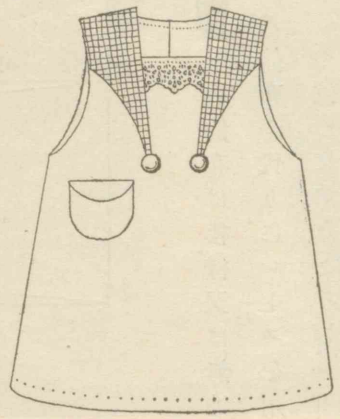
丈　五十二糎

飾は、別布を用ふ。



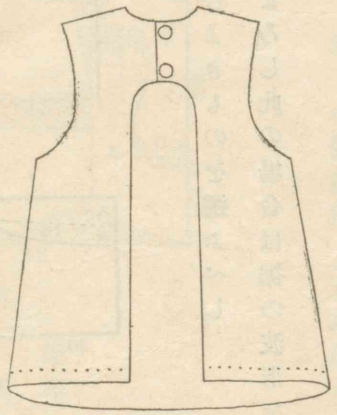
裁ち方圖

四　小兒前掛(六・七歳用)



前

前

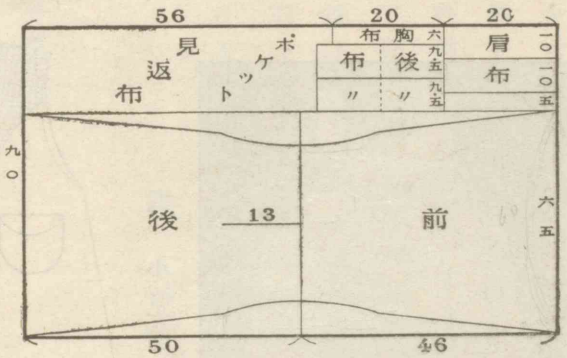


後

仕立て上り

後

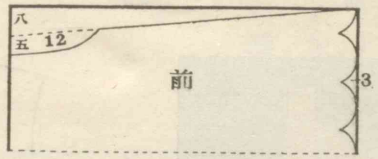
仕立て上り



裁ち方綜合圖

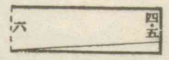
用布。

幅　九十糎
丈　九十六糎



圖一

飾布（幅　七糎　丈　一米三十糎）



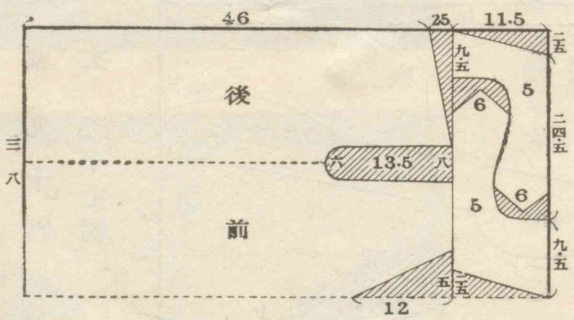
圖二

注意

(い)飾布は模様又は無地にて配合よきものを選ぶべし。

(ろ)飾布の代りにレースを用ひるもよろし此の場合は裾の波形を二つ或は三つ位になす方よろし。

出來上り圖



裁ち方圖

五　小兒前掛（五・六歲用）

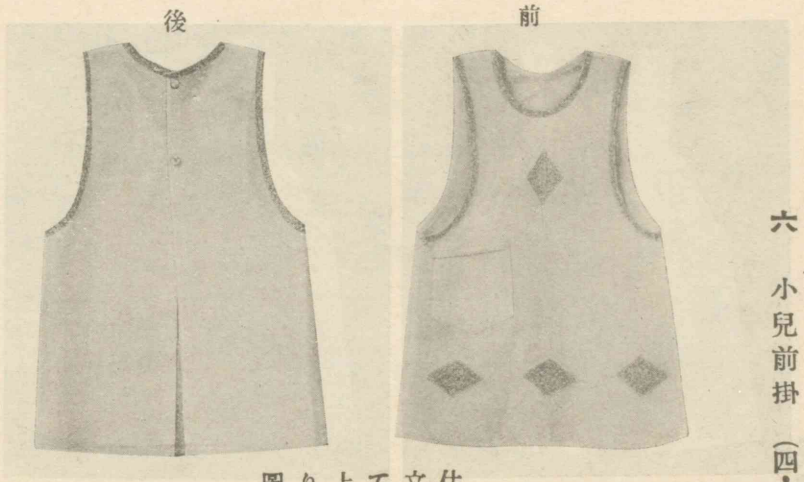
用布。

幅　七十六糎
丈　六十糎
レース十二糎
ポケット別布

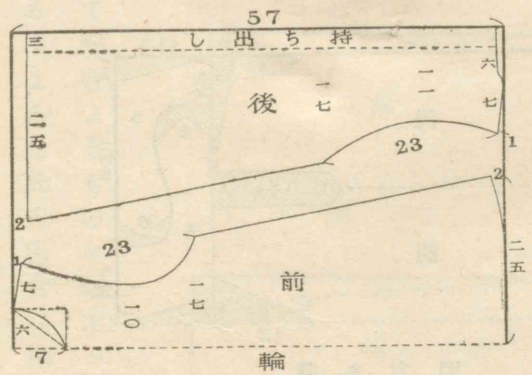
六　小兒前掛（四・五歲用）

用布。

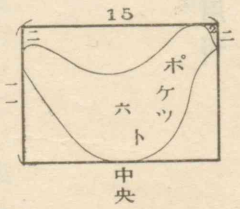
幅　九十糎
丈　五十七糎

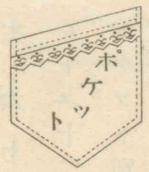


仕立て上り圖



裁ち方圖





應用（水鳥の形）

飾及びポケットを種々工夫すべし。

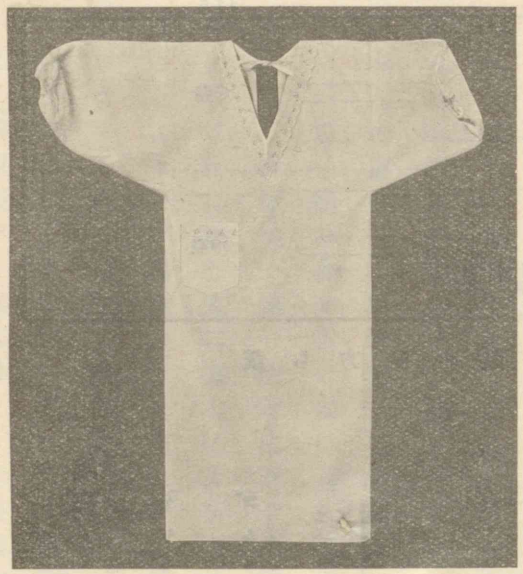
【問】割烹前掛にて他の形のものを調査して其裁ち方と縫ひ方を研究すべし。

第三章　割烹前掛

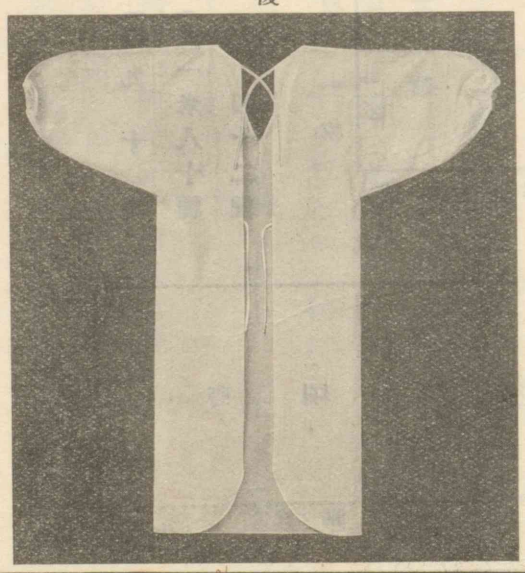
一　割烹前掛　その一

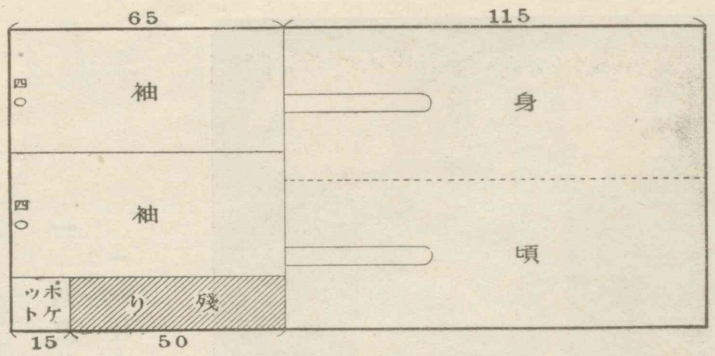
一　仕立て上り圖及び裁ち方

前



後



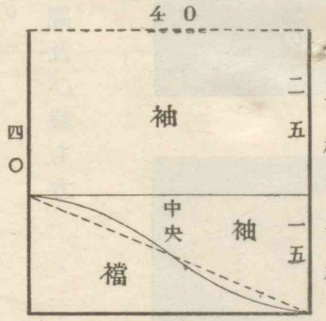


裁ち方綜合圖

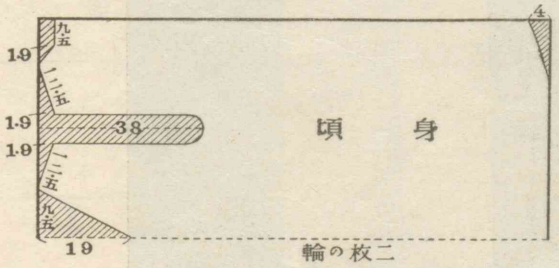
用布。

キャラコ　幅九十糎　丈一米八十糎

ゴムテープ　四十二糎



裁ち方分解圖



二　縫ひ方

(一) 袖の眞直のところと、襠の眞直なるところとを合せて縫ひ、折は袖の方に返し、縫代の端を折りてミシンをかく。

(二) 袖下を縫ひ、折は前の方に返し、縫代の端を折りてミシンをかく。

(三) 幅二糎内外の布を取り、袖口の裏に縫ひつけ、その中にゴムテープを通し、袖口布の奥を折り、口先及び奥に表よりミシンをかく。(袖口は三つ折になすもよし)

(四) 身頃の兩側及び裾を三つ折とし、ミシンをかく。

(五) 前胸明の裏にレースを當て、三角の形に添ひて縫ひ、表に返してミシンをかく。

(六) 前後の肩を縫ひ合せ、折は後に返し縫代の端を折りてミシンをかく。

(七) 後衿肩に紐をつく。幅一糎半・丈三十八糎位のものとし、殘は左右に出しておく。

(八) 袖をつけ、折は袖の方に返し、端を折りてミシンをかく。

(九) 後の上より三十八糎程下り、左右の裏に幅約一糎・丈三十糎位の紐をつく。

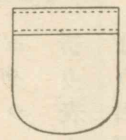
(一〇) ポケット布の口を二糎内外表の方に折り返し、更に裁目を縫代だけ中の方に折り、表より二本ミシンをかく。次に身頃にそのつく位置を定め、即ち袖附止りより、四糎程下り、脇折目より四糎程前によりしところに、ポケットの周圍を、縫

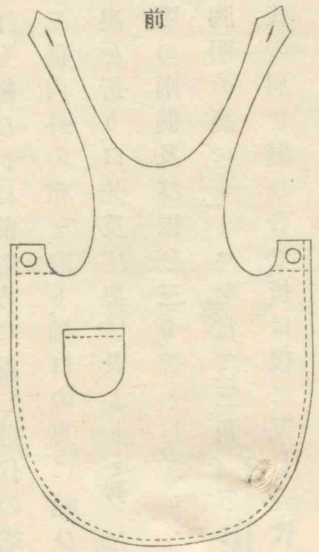
代だけ裏に折りて載せ表よりミシンをかく。口の兩側には、門留をなすべし。

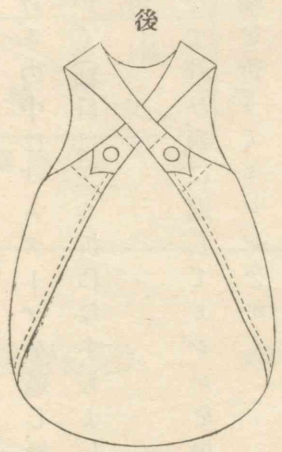
終りて、仕上げをなす。

二　割烹前掛　その二

一　仕立て上り圖及び裁ち方



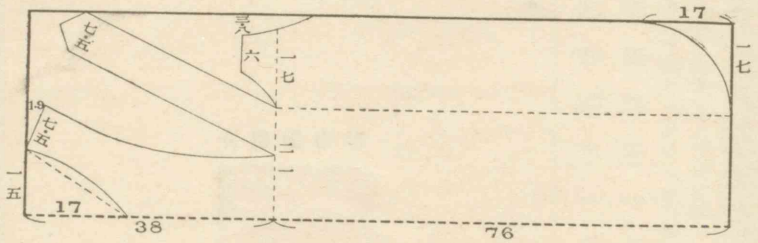




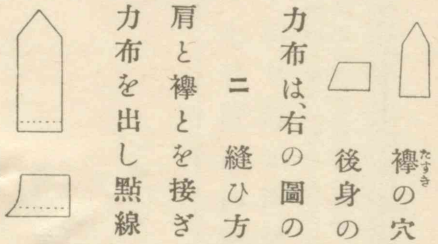
用布。幅　七十六糎　丈　一米十四糎　外に釦二個

地質。普通キャラコ天竺木綿等を用ふ。

次頁に示す如く、用布を裁ち終らば、殘布より力布を裁ち切る。



中表に幅二つ折



襷（たすき）の穴縢のところへ十糎位

後身の釦のつくところへ六糎位

力布は、右の圖の如く各形に合せて裁つ。

二　縫ひ方順序

(一) 肩と襷とを接ぎ合せ、縫目を割りてミシンをかく。

(二) 力布を出し點線のところを裏に折返し、後脇及び襷の先端へ、中表に縫ひ合せて表に返し、力布なきところは、細く三つ折にしてミシンをかく。次に、力布の奥を纏りつく。

(三) ポケット附は前に同じ。

(四) 穴縢及び釦。襷の先端より二糎半内外入りたるところにて、二糎程の穴縢をなし後力布の中央に釦をつく。左右同じ。縫ひ終らば、仕上げをなす。（終り）

大正十四年二月十六日印刷　大正十四年二月十九日發行
大正十四年九月十八日訂正再版發行　昭和二年十二月二十三日修正三版發行
昭和四年一月二十四日訂正四版印刷
昭和四年一月二十七日訂正四版發行

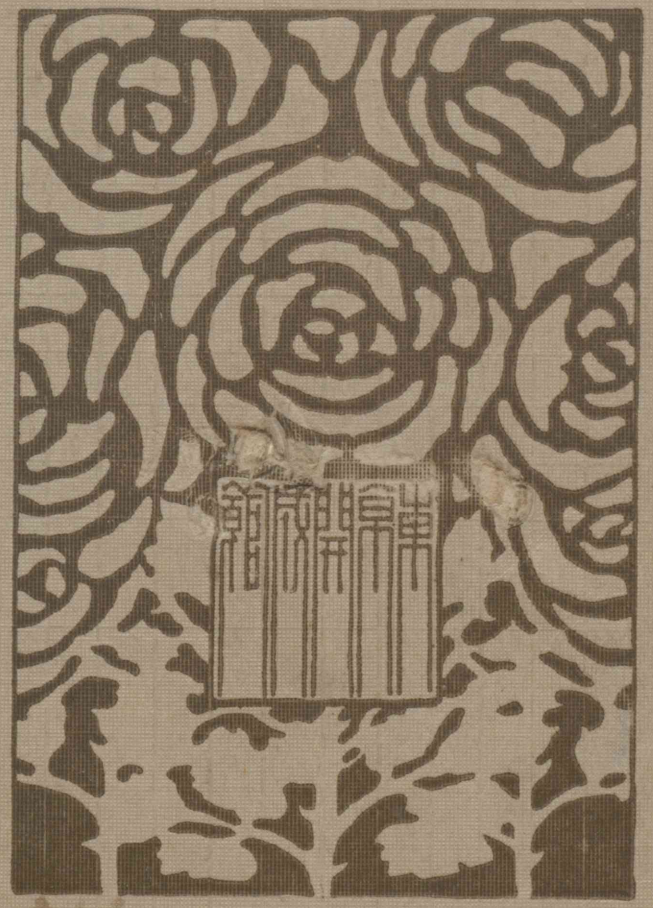
現代裁縫教科書
定價　卷三　金七拾錢
昭和四年度臨時定價　金壹圓拾六錢

（卷三總頁數244）

著作權所有

著作者　吉村千鶴
東京市小石川區小日向水道町八十四番地
發行兼印刷者　株式會社　東京開成館
代表者　松本繁吉
東京市小石川區小日向水道町八十四番地
發行所　株式會社　東京開成館
〔振替貯金口座〕東京五參貳貳番
大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角
西部販賣所　三木佐助
東京市日本橋區吳服橋二丁目五番地
東部販賣所　林平次郎

（東京一番館印刷所印刷）



広島大学図書
2000089562